


日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

教会学校 教案誌



church school curriculum

An abstract painting with vibrant colors like blue, green, red, and yellow. It features circular shapes and brushstrokes, creating a textured and dynamic background.

父がわたしをお遣わしになったように、
わたしもあなたがたを遣わす。

ヨハネによる福音書 20章 21節

vol. **61**
2016年4~6月
「子どもと親のカテキズム」
に基づく二年サイクル 第2年

【巻頭説教】キリストの低さに倣って 山中恵一
アメリカの教育事情(2) 望月 信
若者たちと共に 大嶋重徳

【教会学校教師のための神学講座】
全生活にわたる感謝 ～十戒を生きる(5) 吉田 隆

【日曜学校・教会学校訪問】神奈川バイブルキャンプのご紹介

2016年4～6月カリキュラム（第61号）

— 『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
4月3日	再臨・天国を目指す歩み	問39	—
		フィリピ3:12～4:1	フィリピ3:20
人生のゴールを見つめて歩むことによってこそ日々の歩みは確かなものとなる。的を射る人生のために			
4月10日	死後の祝福	問40	ウ小37
		テサロニケー5:23, 24	テサロニケー5:23a
自分で人生を完成させることはできない。しかし、神は全ての欠けを補い完成して下さる。その確かさを			
4月17日	体の復活	問41	ウ大87, 90、ウ小38
		イザヤ65:17～25	ヨハネ6:40
「完成された御国」で、体の復活の祝福を得て賛美と喜びにあふれる日を信じて生きよう			
4月24日	教会と共に歩む道・ キリストの体	問42	—
		ローマ12:4～8	ローマ12:5
教会共同体を形成させ、世の空気に流されない個人を鍛える無二の価値を持つキリスト教信仰を説こう			
5月1日	母なる教会による命の養い	問43	ウ小29～31, 96、ハイ21, 31, 51, 54, 75
		ルカ24:13～35	詩編131:2
エマオの道を行く弟子たちと共におられる主は、今まさに、教会において臨在を明らかにして下さる			
5月8日	教会の使命	問44	ハイデ107, 111
		マタ28:18～20、ルカ10:25～37、創1:28	マタイ28:19, 20
教会は、神の使命を果たすために地上に建てられた。三つの使命を果たすとき教会は祝福の基となる			
5月15日 聖霊降臨祭	聖霊を受けなさい	—	子34, 35、ウ小29, 31
		ヨハネ20:19～23	ヨハネ20:19～23
神からの使命に生きる教会は、神の霊に導かれ、満たされて歩む。自分に頼らず聖霊を求めよう			
5月22日	主の日の祝福	問45	ウ小59、ハイ90
		ヨハネ20:19～23	ヨハネ20:19
主イエスは、復活日の出会いの体験を、主日ごとに、繰り返して下さる。イエスさまに会える喜びの礼拝を			
5月29日	礼拝のいのちなる キリストの臨在	問46	羊飼い41, 42、ウ小88
		ルカ21:1～4	ヨハネ4:24
神はご自身の喜びを満たすため私たちに礼拝に招かれる。真心を込めて、その喜びにあずかるう			
6月5日	恵みの方法	問47, 48	ウ小問88
		使徒2:41～47	使徒2:42
見えない神を信じることは、奇跡的だが、神はそのために方法を与えて下さる。よき礼拝を整えよう			
6月12日	みことばの恵み	問49	ウ小89
		使徒8:26～40	サム上3:10
御言葉をイエスさまを指し示すものとして読み、語りかけて下さる主を見つめるなら、喜びにみたまされる			
6月19日	礼典の恵み	問50	ウ小91～93、ウ大161～164、ハイデ65～68
		ルカ24:13～35	コリント一11:24
見えない神は、信仰の弱い私たちのために見える物を通して、信仰を養って下さる。礼典に招こう			
6月26日	洗礼の恵み	問51	ウ小94、ハイデ69
		マタイ28:19、ロマ6:3, 4	ロマ6:3, 4
幼児洗礼の恵みの中に守られていること。一方的な恵みから始まった人生の幸いを熱く語ろう。			

も く じ

2016年4・5・6月カリキュラム

まえがき	島野美佳子	4
巻頭説教	山中 恵一	6
分級展開例の用い方		
聖書発見学習の恵み	愛智 愛	10
日曜学校・教会学校訪問		
神奈川バイブルキャンプ12年	関口 博一	14
絵本に心を耕されて		
「ぼくはここで、大きくなった」	望月 鈴子	18
教会・国家・平和・人権		
一とくに若い人々のために	木下 裕也	21
イスラエルの歴史と信仰 (1)	赤石 純也	24
アメリカの教育事情 (2)		
アメリカのホーム・スクーリング	望月 信	26
若者たちとともに (1)		
若者の心に届く説教	大嶋 重徳	31
御言葉は命の水	保田 広輝	34
全生活にわたる感謝～「十戒」を生きる (5)	吉田 隆	37

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

4月 3日	44
4月10日	50
4月17日	56
4月24日	62
5月 1日	68
5月 8日	74
5月15日	80
5月22日	86
5月29日	92
6月 5日	98
6月12日	104
6月19日	110
6月26日	116

2016年7・8・9月カリキュラム	122
2016年度年間カリキュラム	123
救済史に基づく二年サイクル	125
「子どもと親のカテキズム」案内	127
執筆者よりひとこと・あとがき	128

「最後に言う。主に依り頼み、 その偉大な力によって強くなりなさい。」

エフェソの信徒への手紙6章10節

島野美佳子（坂戸教会所属新潟伝道所信徒）

べつに、職場や仕事に未練があったわけではない。でも、着実にキャリアを積んでいく夫の傍らで、私は「貧乏くじをひいた」と思っていた。「何のために大学まで卒業したのだろう」とも。結婚退職し、翌年には長男が誕生。CRJMのゴー宣教師に声をかけられた2004年、私は、6歳、4歳、1歳、三人の男の子の母だった。何をするわけでもなく、それでも慌ただしく毎日が過ぎていったあの頃。

「私はあなたのことを知っています。」ゴー宣教師はそう言って話しかけてこられた。来日されて間もない頃に、所沢ニューライフ教会でJCコーナーストーンの賛美を聴いたという。失礼な話だが、私は記憶になかった。初対面といってもいいその時に、「信徒のリーダーを訓練する場をつくりたいと思っています。私はあなたの協力を祈っています」と告げられた。私の中のもやもやのひとつ、それは、CS教師とされていながら、学びが不足しているという現実にもあった。十分な準備のないまま、主の日ごとに子どもたちの前に立たされる、その重荷に耐えかねていたのだ。だから、ゴー宣教師の突然のお申し出に、「祈ります」と答えた。

2004年10月から8年間、宣教師の二度のホームサービスをはさんで、金曜日の晩に月2回、途中から1回のペースで授業は続けられ、途中で長女が生まれた。おんぶしながら、時にはおっぱいを飲ませながら授業に参加した。「霊的な成長を目指して」から始まるETA、そしてコーヒープレイク、テモテ指導者訓練会もここ

で体験した。新座志木教会の愛智長老、愛執事の子どもたちも、両親について坂戸教会までよく通ってきた。そこにいた子どもたちは今でも仲良しで、坂戸教会協力宣教師であるキム宣教師率いるビジョントリップのメンバーに成長した。私の不安とつぶやきは、学びによって解消されていった。

話は変わるが、2015年、安全保障関連法案で日本は大揺れだった。私の住む町の6月議会に「戦争法案反対を求める意見書」の請願が提出され、否決されたことを知ったのは主の日の朝だった。私は請願が出されていたことすら知らなかったのに、非常な怒りに包まれて、その日の礼拝説教はほとんど耳に入らなかった。感情に任せて行動しないように、とにかく次の主の日を待とうと思った。次の主の日は新潟伝道所での礼拝、説教は宮崎彌男引退牧師だった。礼拝後の食事の交わりの席で、宮崎牧師は「過去の戦争で韓国の兄姉に神社参拝を強要し、殉教者まで出してしまった。日本の教会はかつての過ちを決して繰り返してはならない。そのために、信徒ひとりひとはみことばと教理によって強くならなければならない」と言われた。教案誌59号の奉仕をいただいていた私は、神様のお導きに感謝した。そして7月いっぱいかけて分級展開例を書いた後で、法案成立を見送る意見書を求めて町民有志と推敲を重ねた請願を9月議会に提出し、採択された。

定住伝道者を欠いている新潟伝道所では、引退牧師を中心に数名の先生方のご奉仕で礼拝が

守られている。今年最初の礼拝から、宮崎牧師のご奉仕の時には昼食後に「ウェストミンスター大教理問答学習会」が開かれている。教会の内外にかかわらず、神様が召してくださる

「時」に備えるのに必要なのは、やっぱり、みことばと教理の学びによって日々強くなることだと思う。ゴー宣教師が授業の中で繰り返し引用したのはエフェソ6章10節だった。

キリストの低さに倣って

フィリピの信徒への手紙2章3節～9節

山中恵一（神港教会協力教師）

【はじめに、伝えるべき福音を味わう】

教会教育に携わる。それは、救い主の働きに携わるというとても大きな働きです。イエス様が地上を歩まれた2000年前から、この世界の本質は基本的には変わりません。救い主を十字架につけようとするのが、人の世です。イエス様の働きに関わる私たちは、イエス様が挑まれたのと同じように、世界と向かい合うことになります。そのような難儀な働きへと私たちがわざわざ足を踏み入れるのは、自分がそのような世界から救い出された者だからでしょう。救い主の働きに携わる者達とは、自らが救われ、そして、その救いを伝える者達です。逆もまた然りです。救いを伝える者達は、自らの救いを味わう者達である、と。

教会では、「自分よりも隣人のために」というのが通念ですが、救いを伝えるためには、「隣人のために、まずは自分が恵みを味わうんだ!」という姿勢が大切です。忙しい日々の中で、語るべき日が迫って来ますと、味わう工程を飛ばして、伝える作業に取り掛かることがあるかもしれません。しかし、どうか「まずは自分が救いを味わうんだ!」という図々しさを持って頂きたいと思います。

「子どもと親のカテキズム」の全体を貫いている中心テーマは、「神様と共に歩む」です。私たちは、御旨の中で選ばれて、赦しから始まり、栄化へと至る、「聖化」の道のりを歩んでいる者達です。これからカテキズムが扱うテーマは、いずれも、この「聖化」の内容となるものばかりです。「聖化」の旨味を子どもたちに伝えるために、この巻頭説教で、その旨味をぐいっしょに味わうことができたら、と思います。

【1. 聖化～キリストの姿に似せられていく】

聖化の恵みを子どもたちに語る時、私たちは「キリストの姿に似せられていく」ことを教えます。私たちもまた、この変化を味わう者達です。キリストとは、預言者・祭司・王の働きをする職務名です。また、キリストとは、イエス様というひとつのご人格を指すものでもあります。「キリスト」という職務に示された、救いの働き手の姿。「イエス」というキャラクターに示された、本来あるべき人間の姿。これらが、私たちが似せられていくキリストの姿です。

みなさんも、すでに教会学校の働きの中で、子どもに御言葉を語る預言者、子どもと神様を執成す祭司、子どもを守り導く王として、この変化のなかを歩まれているのだと思います。そして、その働きを、イエス様が身をもって示してくださったように、神と人を愛するという仕方です。

パウロは言いました。「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。」この、「優れた」とは、能力や性格のことではありません。能力に優劣があるのは当然のことですし、性格に善し悪しがあるのも客観的な事実です。パウロは、そうした事実をひん曲げて、相手にへつらうように、と勤めているわけではありません。ここで言われているのは、「相手のことを自分よりも大切な存在と思いなさい。」ということです。教会の子どもたちを思うみなさんは、すでにその心をお持ちのことと思います。

そうは言っても、子どもと付き合うのは決して楽なことではありません。子どもの集中力は長くは続きません。理解力だって高くはないでしょう。人間性はまだまだ未熟なところだらけです。楽しいことは大好きですが、退屈なことは大嫌いだったりします。

相手を自分よりも大切にします。これは簡単なことではありません。大人である自分を大切にしたままでは、付き合いきれないのが子どもたちです。子どもを自分よりも大切にします。そのためには、子どものために自分が変わらなくてはならないんですね。この変化を聖書は「へりくだり」と表現します。そして、この変化は「キリスト・イエスにも見られるもの」であったとパウロは続けます。続く聖句は、初代教会の賛美歌を引用したものである、とされています。「あなたたちがいつも歌っている賛美の中に、目指すべき、キリストのへりくだりの姿が示されている。」とパウロは言います。「教会学校の子どものために、自分はどのようにへりくだらなければならないのか？」その答えとなるお手本の姿は、ふだんから歌われる素朴なイエス様の姿の中にあるんですね。

【2. 低いキリストに似せられる】

「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分となり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで従順でした。」

「自分を無にする」というのは、仏教で言うところの「無我の境地」とは違います。また、言われることにただ「はい」と言って従うことでもありません。これは、すべてを持ち、すべてに満たされていた方が、それを空しいものとされた、ということで、イエス様の徹底したへりくだりを言い表わしたものです。このイエス様のくだりぶりたるや、それは徹底したものでありました。神が人となる。凄まじい高低差の

ダイビングです。イエス様は、高い所から、「こちらに上がってこい！」とは言われなかったんですね。イエス様は、万物を越える神の高みから、臭く汚い家畜小屋にくだられました。それほどに低くならなければ、人間の低さに届かないからです。最も聖い御方が、罪人たちの食卓の交わりにまでくだられました。それほどに低くならなければ、彼らに伝わらないからです。救いの手が届くところまで、救いの言葉が通じるレベルにまで、イエス様はその身を投げてくださいました。

神様に対する集中力も理解力もない。性格は欠陥だらけ。限られた時間を自分の楽しみばかりに費やしてしまう。神様の目から見れば、人間はこのような者達です。イエス様は、こんな子どもと付き合う義理はないんですけれども、私たちを大切にすると決断された父の愛に従い、天にある聖さや輝かしさを捨て去って人間と同じ者になってくださいました。神の高さに身を置いたままでは、付き合いきれないのが人間でした。

私たちの奉仕はどうでしょうか？ 教会の子どもたちの低さに付き合おうとせずに、何かに固く執着している自分がないのでしょうか？ 大人の常識、大人の美学、大人の言葉、そうした大人の高さが、子ども達に神様を伝える障害となっていないのでしょうか？ どうか、御言葉を低く語ることをためらわないでください。それは、御言葉を軽んじるというではありません。子どもが重く受け止めることができるまで引き下げることです。至高である神様に対して、何だか申し訳ないような思いがするかもしれませんが、それは錯覚です。至高の神様の御心は、御言葉が人に届くところまで低くされるところに示されました。

このイエス様のへりくだりには、「僕」としての「従順」が伴いました。それは、父なる神様に対しての従順です。イエス様は、自分の好き嫌いではなく、父の御心に従われました。「こ

の者達に救いを届けるように」そう託されるままに、その者達のところへと飛び込まれました。父から託された任務を遂行するために、喜んで神の高さを捨て、「人間と同じ者」となってくださいました。この従順は、相手と同じ目線に立って終わりではありませんでした。イエス様は、そこからさらに十字架へと、くだって行かれたのです。誰ひとりとして味わったことのない神の本気の裁きを一身に受け、そして死に引き渡されるところまで、イエス様の従順なへりくだりは徹底して行われました。

御父から託された人々のために、本来の高さを捨て、苦しみを味わう。これが、イエス様によって示された、救いの働きに携わる者の姿です。私たちは、教会学校の働きをとおして、このイエス様の働きに参加し、このイエス様の姿に似せられていきます。聖化の恵みを受けながら、子どもに関わる中で、私たちは低くくだるキリストの姿へと似せられていくんですね。それは、子どもの低さまでへりくだるキリストの姿です。彼らと交わる深度まで、彼らの抱える悲惨の深度まで、そこに向かって飛びこむ者へと変えられていくのです。

【3. 低いところから天の高さへ】

ただ、キリストのへりくだりは、低いところに身を投じて、そこで心中するためのものではありませんでした。引用された賛美歌は、この後、低くなられたキリストが天の祝福の高みへと引き上げられる姿を歌います。「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」このキリストに捕えられて、私たちもまた、天の祝福へと引き上げられています。

「捕えた者たちを天の祝福へと引き上げて行く。」これもまた、私たちが似せられていくキリストの姿です。私たちはキリストの働きに参加する中で、天にある永遠の命に与る者として、天にある完全な赦しを身に受けている者と

して、天の神に属する聖なる者として、キリストと同じように、天の神と人間を執り成す者へと変えられていくのです。

【4. キリストは今も仕えてくださっている】

このように、パウロが引用した賛美歌には、お手本とするべきイエス様の姿が歌われていました。託されている子どもの低さにまで身を投じて、神のもとにある祝福の高さにまで子どもたちを導く。そのために高さを捨て、苦勞をする。これが、教会学校が行っていることであり、皆さんの身に起こり続けている変化です。子どもに御言葉を届けるために苦しむ時、そこに、イエス様の姿があります。子どもを教会学校に招くために自分の時間を費やす時、そこにイエス様の姿があります。とてもイエス様のように徹底して低くはなれないのですけれど、それでも、私たちは変えられているんですね。

低い者達に関わろうとするイエス様は、2000年前も今現在も変わりません。聖霊の働きによって、この私に仕えてくださる御方。それがイエス様です。イエス様は聖霊によって、御言葉の中で語るパウロや、歌われる賛美歌を用いながら言われるんですね。「わたしはお前のために天の栄光を捨てた。わたしはお前のために僕となった。わたしはお前のために、お前と同じ者にまでなった。わたしがお前にしたのと同じように、子ども達にも仕えてごらん。」

私たちが、キリストに姿を変えて頂く以前に、イエス様が、私たちのためにお姿を変えてくださいました。本来、万人から仕えられるはずの方が、この私に仕える御方となってくださいました。イエス様は、なおも私たちに仕えてくださり、私たちが変えられていくことに力を注いで、同じ道を歩むように、と励ましてくださいます。

【おわりに、恵みの手段によって聖化を味わう】

牧師の目線で教会教育を考えると、それは

子どもへの取り組み以上のものです。そこに携わる方々のことも、牧師にとっては等しく重要事項だからです。奉仕をなされる方々がイエス様のようにされていく。牧師にとってこんなにありがたく、頼もしいことはありません。

今号は、恵みの手段について教えられる時でもあります。聖書が約束する聖化の恵みをいつも以上に意識して味わうことができる祝福の時です。私たちの身に起こる変化は御言葉と祈り

と礼典によってもたらされます。子どもたちに仕えるキリストの姿が、御言葉に聞くなかで、祈りのなかで、聖餐のなかで、現実みなさんのカタチとなっていくことを心からお祈り致します。牧師もまた、聖化の途上にあるひとりの人間です。子どもたちへの使命を共にしつつ、この時、いっしょに聖化の恵みを味わいたく思います。

聖書発見学習の恵み

愛智 愛 (新座志木教会信徒)

教会学校教案誌の分級展開例は、59号(2015年10月～)から「聖書発見学習」に基づいた質問形式へ一新されました。これまでと大きく変わったことで、用いられる教師の方々の中には戸惑いもあるのではないかと思います。この新しい試みについては既に59号で安田先生が解説をしてくださっていますが、執筆者としてこの「聖書発見学習」の成り立ちや具体的な導き方などをお伝えして、大切な分級の時間をさらに恵み深い時としていただけたらと願っています。

聖書発見学習とは

聖書発見学習は、1970年にシカゴの改革派教会で始まり、CRJMの働きで日本にも紹介されている Discovery Bible Study (以下 DBS) で用いられている聖書の学び方です。現在は日本の改革派教会の中にも DBS について学んだ方により多くのグループが生まれ、聖書の学びと伝道に用いられています(私は2005年より ETA(教会学校教師訓練会)坂戸クラスで CRJM のゴー宣教師から指導を受ける中で DBS と出会い、リーダーとして学びながら自宅で未信者の友人とのグループを持つようになって9年目になります)。

DBS には三つの柱があり、入り口の柱は「少人数グループであること」、真ん中の柱は「聖書発見学習」、そして出口の柱は「伝道を目的にすること」で構成されたもので、教会学校の分級に通じる点も多くあります。ここでは聖書発見学習を中心に、DBS の方法に基いて、分級を持つ上で参考になることについて述べたいと思います。

「聖書発見学習」は、帰納法を用いて、聖書本文からそれぞれが発見したことを分かち合い、本文から神様がそれぞれご自分の民に語りうとしておられる御旨を発見する学び方です。私たちは、まず礼拝において説教を通して聖書を学び、また各々生活の中で聖書を読みます。その大切さはここで私が述べるまでもないことですが、この聖書発見学習という方法には、そのどちらとも違った恵みと実りがあります。聖書発見学習は、「開かれた心、探求する心で聖書を読むようにする方法」「各個人が直接、聖書に出会うように助ける方法」で、発見のための道具として「質問」を用います。イエス様も、弟子たちや出会われた人々に説教だけでなく、質問をされています。

「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」(ルカ 9:18)

「良くなりたいか」(ヨハネ 5:6)

「あなたたちはメシアのことをどう思うか。だれの子だろうか。」(マタイ 22:42)

聖書発見学習の質問は、子どもたちの理解度を試すものや、必ずしも一つの正解があるものではありません。人の心の内をご存知のイエス様があえて質問を投げかけておられるのは、その人が自分の心の内を顧み、考え、自分の言葉で信仰を言い表すため、さらにはその場に居合わせた人々とそれを分かち合うためだったでしょう。聖書発見学習の目的は、聖書が語っている意味を理解することです。子どもたちに神様のみ言葉を大事にし、み言葉から自ら考える力を養い、聖書が真理であることを悟らせ、救

いに導く効果が期待できます。

発見とディスカッションのための道具「質問」

聖書発見学習の道具、きっかけ作りとして用いられる「質問」には、三つの種類があります。最初の「観察質問」は、聖書の本文を注意深く読み、「誰が、何を、いつ、どこで、どうやって」などの情報を整理し、次の段階へつなげるためのものです。子どもたちにとっては、国語の勉強のようなものかもしれません。もし子どもたちがこの段階で聖書から逸れて自分の考えや想像をふくらませたような答えをした時は、一旦それを受け入れつつ、「聖書に答えが書いてあるよ」と本文に注意を向けるように導きましょう。

次の「解釈質問」は、観察質問で整理したことに基づいて、登場人物の気持ちになって考えたり、出来事の背景を考えて、み言葉をより深く探るためのものです。ここには子どもたちから様々な異なる意見が出たり、それに対する意見や質問も出るでしょう。聖書発見学習での正解というものは神学の論理を意味することではなく、神様がこの本文を用いて、この本文を読み、黙想している人々に何を悟らせようとしておられるかを、それぞれの参加者が発見することを意味しますので、いろいろな違う意見があっても当然です。一人一人の言葉に耳を傾け、お互いの発見を分かち合いましょう。

最後は適応質問で、その日の聖書箇所を通して発見した御旨を、どうやって私の生活に適応することができるかを考えるためのステップです。教案誌の分級展開例では、DBSのテキストより質問の数をかなり少なくしていますので、適応質問がないこともあります。解釈質問の答えを分かち合う中でそのような話題に導くことができれば素晴らしいでしょう。

聖書発見学習のための良い質問は、

- ① 聖書の本文に導く。
- ② 聖書本文の言葉をそのまま用いる。

③ 詳しいことより、基本的な真理に焦点を合わせる。

④ 答えやすい。

⑤ 初めての参加者でも理解できる。

などです。

分級を進める上でもこれらを心にとめて、参加者の年齢や理解度に合わせて、場合によっては補足の質問をしてみてください。「はい」「いいえ」で答えられる質問より、より具体的な答えを導き出せる質問が良いでしょう。

分級展開例の用い方

では、実際に教案誌を用いて聖書発見学習を試してみましょう！

分級の初めに短く祈った後、お互いに心を開いて話しやすくするための質問（アイスブレイキング）をします。1週間の出来事を分かち合うのも良いですが、その日の聖書の個所に導くような質問（例えばクリスマスなら「生まれたばかりの赤ちゃんに会ったことはありますか？どんな気持ちでしたか？」「あなたはどこで生まれましたか？」など）を用意しておくといでしょう。

その後、聖書発見学習へ入ります。教案誌をコピーして子どもたちに渡し書き込んでもらうのも良いですが、時間がなければテキストは教師のみが持って、子どもたちには聖書を開いてもらうだけでも十分です。聖書本文からの発見に集中するため、基本的には視聴覚教材は使いません。教案誌には、小学下級科と中学科の2通りの質問が掲載されていますので、クラスに合わせて使い、必要なら分かりやすい言葉に言い換えたり、質問の数を減らしたり、理解やディスカッションをより深めるために必要な時は、補足の質問をします。教師が事前に準備をしても、子どもたちからどのような答えが飛び出すかは、その場にならなければ分かりません。ある程度はその聖書箇所から分かち合いたい事柄へと導くことが必要ですが、子どもたちの新

鮮な発見に教師が教えられることも少なくないでしょう。聖書発見学習においては、教師の果たす役割はリーダー（案内役）であって、教えることではありません。子どもたちとともに、発見を楽しみましょう。最後にその日の発見と分かち合いに感謝して、祈りをもって終わります。

ご参考までに、DBSにおいて参加者に理解してもらうルールを、以下に示します。教会学校の分級の場合は、子どもたちに最初からすべてを伝える必要はないと思いますが、分級を進める上で教師がこれらを心にとめておき、折に触れて教えていくとより良い学びにつながるでしょう。

- ① 目的は、聖書を学ぶことです。
- ② 分からないこと、疑問などどんな質問をしても良い。
- ③ グループの全員が話し合いに参加できるように、一人が話題を独占しない。
- ④ 無理に発言する必要はない（パスあり）。
- ⑤ どんな意見でも言って良い。自分と異なる意見も尊重しましょう。
- ⑥ プライベートな話題が出たとき、そのことを他の場では話さない。

聖書発見学習の恵み

DBSで聖書発見学習を体験した方が「特急電車で何度も通って知っている道を、初めて自分の足で歩いてみて、その風景をじっくり眺め、今まで気づかなかった小さな草花に気づき、触れたような感動があった」と感想を述べられたことがあるそうです。私自身もCBMの中で、何度も学んだ聖書の箇所から、その日その場にいる人とまた違った恵みを分かち合える喜びをいただいた経験が何度もあります。自宅では未信者の方のグループで学んでいますので、思いもかけない答えや感想をいただいて驚くこともしばしばです。神学的な質問が出て、自分には正しく答えられないと思った時は「牧師に聞いて、

また次回お答えしますね」とその場では保留することにして、聖書本文から発見したことの分かち合いに焦点をおくことを心がけています。時には話題が大きく脱線して盛り上がり、ハラハラすることもあります（子どもたちとの分級でも、大いにあり得るでしょう）。どのような話題、意見にも耳を傾けるようにしつつ、それが学びの妨げになる場合はある程度で話を打ち切り、学びに戻すようにする必要はありますが、参加者が、どうしても聞いてほしい個人的な悩みを打ち明けたようなときには、他の参加者に配慮しつつその話を聞いて、ふさわしいみ言葉を読み、そのことの解決のために祈って終わるようなことも、まれにあります。

しかし、聖霊なる神様は思いがけない方法で、み言葉の恵みへと導いてくださることがあります。ヨハネ福音書の学びをした時、聖霊について分かち合いたかったのに、なぜか話題が「幽霊」のことにになり、どんどん逸れていってしまったことがありました。それくらい打ち解けて何でも話せる雰囲気であったということでもあるし、皆未信者なのですから、無理もなかったことだと思います。私がリーダーとして幽霊について何と話すべきか、どこで打ち切るべきか迷い、心の中で「神様助けてください！」と祈っていた時、ある方が口を開いてくださいました。その方は少し前に色々な心労が重なって体調を崩し、外出や家事もままならない一時期から回復して、その日久しぶりに参加されていました。「私は今回本当につらい思いをしたけれど、たくさん家族や友人が心から心配して助けてくれたり励ましてくれて、こうしてまた元気になることができた。そのことを家族や友人に対して感謝していたけれど、それは周りの人たちを通して聖霊なる神様が私に働いてくださっていたんだということを、今日のみ言葉で気づくことがきました。」と、涙ながらに語ってくださったのです。誰かに教えられて知ったのではなく、その人自身が体験を通して（聖霊の力で）聖書

の真理を自らのものとして悟ったことに、大きな意味があったと思います。聖書発見学習の醍醐味を味わわせていただいた瞬間でした。

DBS リーダーテキストに「人に魚を1匹手渡せばその日の糧を与えられるが、魚の釣り方を

教えれば一生の糧を与えることになる」という言葉があります。子どもたちが聖書に親しみ、そこから神様のメッセージを受け取ることができるようになるために、教案誌が用いられたら幸いです。

神奈川バイブルキャンプの12年

関口博一（綱島教会）

通常キャンプは大会規模か、あるいは各個教会の小規模の開催となると思いますが、私達は神奈川県にある8教会*で毎年夏休みに夏期学校（正式名称：神奈川バイブルキャンプ）を1泊2日で2004年以来毎年続けてきました。（2011年のみ開催せず）昨年で11回目となりました。この場をお借りしまして、バイブルキャンプについて報告させていただきます。

もし近隣の教会合同で夏期学校をご計画されているか、あるいは既に合同開催している日曜学校教師の方々の参考にしていただければ感謝です。

1. 概要

神奈川地区の子ども達の交流を目的にスタートしました。場所は横浜市が管轄している野島^{のじま}青少年研修センターです。

幼児から高校生までが対象ですが、契約の子以外の日曜学校生徒の参加が目立ってきたこと、ヤングサマーバイブルキャンプに参加しない小学校3年生以下の子ども達のフォローを考慮して、「神奈川地区エリアでのキャンプ入門版の交わり会と、一般の子ども達への伝道の機会」と位置付けています。

入門版というのは、特に低学年の子ども達がキャンプを経験することにより、ヤングサマーバイブルキャンプに繋がっていくイメージです。

2. 近隣の複数教会で行うキャンプの恵み

各教会では少人数の日曜学校でも、集まれば「こんなに多くのお友達がいるんだ」というキャンプならではの経験に加え、年に一度集まって

一緒に学び、遊び、食事をし、お風呂に入るという事自体が重要な機会です。開催場所が遠方ではないので塾や部活の前後に部分参加する中学生もいます。中高生は「同窓会」的な感覚で集まってくれているようです。

幼児から高校生まで一緒というのも他にない魅力です。部活を引退して久しぶりに参加した高校生が「赤ちゃんだった子が走ってしゃべっている！」と感激していました。キャンプの思い出はずっと残っているのだと思いました。

幼児の時から毎年会っていれば、気の合うお友達が出来たりすることもあります。中学生になってメールでお互い連絡を取り、キャンプと一緒に参加したりもしています。

各個教会にあっても、中会という大きな教会に所属している事を子ども達に実感してもらえれば感謝です。私達は皆、欠かせないメンバーとして神様から各個教会に派遣されているのですから。

3. プログラム

バイブルキャンプは金、土曜日の2日間開催されます。プログラムはずっと変わっていません。

2015年のプログラムは以下です。

（1日目は礼拝後から夕食まで中高生は別プログラムです）。

1日目

12:00 のじまこうえんでおべんとう

12:45 かいかいれいはい

フィリピ4:6,7「祈りましょう」

みんなであそぼう！

チームわけ、すいかわり、きょうかい

- しょうかい
 2:00 けんしゅうセンターにゆうしょしき
 3:00 がくねんべつクラス①
 4:00 みんなであそぼう！

【おたのしみ】タイム

- 5:45 ゆうしょく
 6:45 キャンプファイヤー
 8:00 おふろ
 9:00 よるのれいはい（かくへやで）
 9:15 しょうどう（おやすみなさい）

2日目

- 6:30 きしょう、せんめん
 7:00 あさのれいはい
 ルカ11:1-4
 「主イエスのお祈り」
 たいそう
 7:20 ちょうしょく
 8:00 がくねんべつクラス②
 9:40 へいかいれいはい
 ヨハネ16:24
 「キリストの御名によって祈ります」
 10:00 そうじ・かたづけ
 10:30 けんしゅうセンターたいしょしき
 11:00 こうえんにいどう
 バーベキュー（おとうさんやおかあさん
 もいっしょにどうぞ）
 チームのせいせきはっぴょう！
 13:30 かいさん



キャンプファイヤーが始まります

キャンプは当日の天候が心配になるものですが、不思議と前日夜に台風が通過したり、キャンプファイヤーが終わって部屋に戻ったら雷雨が始まった等、過去に雨天でプログラムができなかったことは一度ありません。本当に感謝なことです。

4. 参加者

年度ごとの参加者の推移です。

ここ数年は30人前後の子ども達が参加しています。

2004年	131人（大人53、子供78）
2005年	95人（大人44、子供51）
2006年	84人（大人34、子供50）
2007年	91人（大人29、子供62）
2008年	86人（大人36、子供50）
2009年	94人（大人40、子供54）
2010年	80人（大人36、子供44）
2011年	開催せず
2012年	67人（大人33、子供34）
2013年	68人（大人36、子供32）
2014年	60人（大人31、子供29）
2015年	75人（大人43、子供32）

5. 日時と場所について

開催日については他のキャンプと重ならないように選ぶと、夏休みの最初か最後の、金～土曜日ということになります。最近は小学校の2学期制が広がり、8月の終わりは学校が始まっています。このため8月は第3金～土曜日しか選択肢がないのが現状です。

場所については宿泊施設が非常に重要です。

まず利用料ですが、現在利用しているのは横浜市の公共施設です。1泊600円と安いので、夏休みは利用希望が多く抽選で宿泊日が決まります。このためキャンプの開催日は7月か8月かで毎年変動します。

宿泊料金が600円ですと、一人当たりのキャンプ参加日は2000円になり、参加しやすくな

ります（各個教会で500円／人を補助しているので1500円が参加費になっています）。

宿泊施設は暑くて寝られないことがない事が大切です。私達が使っている施設は2段ベットの8人部屋が25室あります。エアコン完備の今風の施設です。

宿泊室の他に、学びの時間のクラス分けに対応した会議室も必要です。

この施設は4つの会議室があり、一番大きな会議室は雨天の際の室内ゲームで走り回れる広さで助かっています。最近は夏の炎天下が35℃ぐらいになることもあり、室内で活動ができると何があっても安心です。

公共施設によくあるように、ここも大きな公園、バーベキュー場、キャンプ場が隣接しており、裏山に上ると付近が一望できる絶好のロケーションです。

以前に別の場所での開催を調査しましたが、全ての教会の真ん中あたりの場所がかつキャンプファイヤーが行える施設はないことがわかりました。このため、もし抽選に外れたらその年は開催できないこととなります（実際に2011年は、東日本大震災で避難した方々の受け入れ施設となったため、キャンプは中止しました）。

このように良い場所が与えられた事も、ずっと続けて開催できている理由のひとつだと思います。

6. 学びの時間

学びのテーマは以下のようになっています。

- 2005年 ほんとうのよろこび
- 2006年 聖書ふしぎいっぱい
- 2007年 イエスキリストのたとえなし
- 2008年 山の上でのふしぎなできごと
- 2009年 エジプトからのしゅっぱつ
- 2010年 ダニエルと三人の友だち
- 2012年 ほんとうのよろこび
- 2013年 聖書ふしぎいっぱい
- 2014年 イエスキリストのたとえなし

2015年 お祈りってなんだらう？

ほぼ6年間隔で以前使った教材を再利用してきました。日曜学校の分級とは違って、学びの中に工作やゲームを取り入れています。キャンプですからいつもの日曜学校と違う事も魅力になっているはずですよ。

なお、教材をどう使うかはクラス担当者に一任していますが、各個教会の日曜学校教師が集まっていますからそこは心配ありません。ただし、増えてきている部分参加の子のために「2日通しでないといけない内容にはできない」ところが思案のしどころです。

7. 外遊びの時間

オリエンテーリングなど大がかりなものから、模型飛行機大会までいろいろやってきました。

特に準備が必要なのがキャンプファイヤーです。インターネットでトーチの組み方や点火の仕方など調べました。マキを運搬するのが意外と手間なので今は業者に組上げまで頼んでいます。

火を扱うので、準備から後片付けまで中高生が奉仕に活躍してくれています。小さな時に「中学生になったら、たいまつを持つんだね」、ぐらいいは思ってくれていて、頼むと積極的にやってくれます。

8. 食事について

現在利用している施設は大きな厨房と冷蔵庫があって、自炊することになっています。

食事の準備は大変で、80人前後の人数となると、どのくらいの量を準備するか、また当日の参加者の年齢構成で、余ったり、足りなくなることもしばしばあります。

現在は、食事担当リーダーをずっと同じ方をお願いして日曜学校の教師が食事の用意に時間を取られないように段取りをしています。キッチンでの奉仕は全てを自炊すると10人ぐらいの

人手が必要なので、外部業者を利用できないかを考える必要があります。朝食はサンドイッチの仕出しを利用し、夕食はカレーだけ仕出しを利用するなど工夫もしてきました。もし食事付きの宿泊施設が利用できれば必要な人手は大幅に減らせますが、参加費は上がることになります。

なお、私達のキャンプは「最後にバーベキューをして解散」というプログラムにしています。現地解散が基本のため子ども達のお迎えに来られるお父様、お母様がいらっしゃいます。その方々と一緒に楽しみたいという理由から、各教会から献金をいただいて80人程の食材を購入し無料で行っています。参加人数がその場にならないとわからないので食材の量の決定が難しいですが、「余るくらいにして、車で参加した方々で持って帰っていただく」ようになっていきます。そのため年によっては帰った日の家の夕食が、やきそば食べ放題になったりします。

9. 日曜学校の教師からみたバイブルキャンプ

私の教会ではずっと前に、会堂で1泊の夏期学校をしていました。合同になってみて、改めて各教会の日曜学校教師が集まると、こんなに楽しくできるのかと気が付きました。金曜日は誰でも仕事がありますが、皆さん休暇を取って集まってくださいます。私が苦手なことを軽々とする方々を見ると、異なる賜物が集まれば過不足がないという、神様のお導きを実感します。そして10年続けたことが、お互いの理解と信頼を作り上げます。もっと広げて中会という制度のすばらしさを知ることも恵みです。以上です。

私達と同じく日曜学校奉仕に召されている全国の皆様のご参考になれば感謝です。

(神奈川バイブルキャンプ 連絡係)

*参加教会：青葉台、厚木、いずみ、湘南恩寵、網島、西鎌倉、横浜、横浜中央



集合写真

絵本に心を耕されて

「ぼくはここで、大きくなった」

(作／アンヌ・クロザ・訳／こだま しおり・西村書店)

望月鈴子 (浜松伝道所信徒)

浜松教会では、2015年5月、クリスチャン家庭の豊かな愛の中に生まれ、教会の交わりを大切に成長してきた中学二年生の少女が信仰告白に導かれました。教会の中には喜びと感謝が溢れ、主のみ名がほめたたえられました。

2014年には二組のご家庭に新しい命が誕生し喜びが溢れましたが(一組は客員)、その子どもたちはそれぞれの家庭の愛の中で、また教会の交わりの中ですくすくと成長しています。2014年5月には、一組のご家庭に先に誕生していたお姉ちゃん、お兄ちゃんたちと共に、3人の子どもたちに幼児洗礼が授けられました。2015年11月には、客員のご家庭も先に誕生していたお兄ちゃんと共に、2人の子ども達に幼児洗礼が授けられました。二組のご家庭の若い両親は、それぞれが家族ぐるみで〈神さまの恩寵の中で生きていく〉ようにと導かれたのでした。

2014年から2015年にかけて、浜松教会は、上記のように新しい命の誕生からその子らの幼児洗礼、さらに先のご家庭の少女の信仰告白という素晴らしい恵みを味わいました。この恵みを感謝しながら、幼児洗礼を授けられた子どもたちが、時満ちて、自らの口で信仰を告白する時が与えられるようにと群れ全体が祈り求め、育てる責任をも深く覚えた一年でした。

絵本「ぼくはここで、大きくなった」 コンピューター・グラフィックの大変シンプルで美しい絵図です。絵図に添えられた言葉もシンプルです。シンプルであるが故に、この絵本を読んだ人の心に、さざ波の波紋が広がるように、



静かに深く共鳴を引き起こしていくのではないかと思えました。

ぼくはここで、大きくなった。
秋になると、おちばがぼくを、
つつみこんだ。
そうやって、冬のさむさから、
ぼくをまもってくれた。
ぼくは、ねむりについた。
ながいこと、ねむっていた。
そのあいだに、おちばのふとんは、
土になった。
春が来て、ぼくは、目をさました。
ぐんぐん、のびていった。
たねのからが、とれて、
はっぱに、はじめて、
雨のしずくがおちた。

あらしでみずにつかったし、
はっぱを、かたつむりにたべられた。
だれかが、ぶつかってきたことも
あった。

春、夏、秋、冬、……
季節はなんどもめぐり……
でも、ぼくはここで、大きくなった。
ここで、いまのぼくになった。

そしてまた、あたらしい命がはじまる。

「ぼくはここで、大きくなった」。この表題に心ひかれて絵本を手に取りました。さっと頭を横切った思いがありました。教会が子どもたちの居場所となり、教会の交わりの中で成長して「ぼくはここで、大きくなった。ここで、イエス様を信じるいまのぼくになった」と、迷うことなく高らかに宣言するようになったら、どんなに素晴らしいことだろうという思いです。

幼児洗礼を受けた子どもに限らず、日曜学校に集う子どもたち、教会の行事に集う子どもたちの居場所となり、子どもたちは成長していく。順風満帆だけではない、さまざまな課題、困難、苦しい出来事、たくさん誘惑、迷いの道があるかもしれない。それらをくぐり抜け、乗り越え、あるいは共存、苦闘しつつ成長し、やがて「ぼくはここで、大きくなった。ここで、イエス様を信じるいまのぼくになった」と証する民とされていく、教会の交わりの中に根っこを張る生き方が形づくられていけばいいなど、この絵本を手にした時、深く思わせられたのです。

現実に、どこの教会にも「ぼくはここで、大きくなった。ここで、イエス様を信じるいまのぼくになった」と、教会の交わりにしっかりと根っこを張り、神と教会・隣人に仕えつつ、社会で活躍してきた、また現在活躍している兄弟姉妹たちがたくさんおられます。そして、信仰のバトンが受け継がれて「そしてまた、あた

しい命がはじまる」と、次の新しい神の民が生まれています。

この信仰のバトンタッチが途切れることのないように、神の国の雛型・地上の教会の交わりを形づくるのが出来たらいいなと思いました。詩編1編2,3節で流れのほとりに植えられた木のことが歌われています。

主の教えを愛し
その教えを昼も夜も口ずさむ人。
その人は流れのほとりに植えられた木。
ときが巡り来れば実を結び
葉もしおれることがない。
その人のすることはすべて、
繁栄をもたらす。

地にまかれた種は、十分な光、水分、養分を得て、土の中に深くしっかりと根っこを張れば美しい花を咲かせ、良い実を結びます。そうでなければやせてやがて枯れてしまいます。人も同じだと思います。根無し草のようにあちこち浮遊していたのでは、信仰においても社会的にも何の実も結ぶことはできません。聖書・御言葉という水路のほとりに根を張る木となって、いつも御言葉を命の水として吸い上げて生きる人は、時が来れば信仰の種が花開き実を結ぶと歌われています。「主の教え」を大切に、「主の教え」を喜びとして生きるのがとっても幸せ！という姿が教会の中に溢れることが信仰のバトンタッチの大きな鍵ではないかと思えます。

母の胎にある時から教会の交わりの中で成長した人、日曜学校の学童期、青年期、働き盛り、熟年期、あるいは高齢になってから教会の交わりに入ってきた人、さまざまな違いを超えて教会・信仰共同体があります。それぞれが多種多様の人生模様を織りなしながら、〈わたしの救い主イエス・キリストの体なる教会〉に連なっています。多種多様でありながら、「ぼくはここで、イエス・キリストを信じるいまのぼくになった」と御言葉の水路に根を張って、共に信

仰の歩みをします。神の国を目指して歩む道筋が、後から続く人々に一筋に続く恵みの道筋として映し出されるような信仰者、教会の喜びの姿がある時、「ぼくはここで、大きくなった。ここでイエス・キリストを信じるいまのぼくになった」と、信仰のバトンを受け継ぐ者たちが

生まれ続けるのではないかと考えています。

「あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです」(詩編84:11)。「教会で過ごすのが大好き！教会にいと幸せ！」と言ってもらえる教会の交わり、信仰の交わりが形づくれるといいなと思っています。

教会・国家・平和・人権

—とくに若い人々のために

木下裕也（名古屋教会牧師）

アジアにおける明治国家

明治維新により、日本はアジアの国々の中でもいち早く近代国家をつくるという課題をなしとげます。ただ、この時期朝鮮や中国といった国々でも、同じように近代国家の樹立をめざす取り組みがなされ、実ろうとしていました。そうした状況にあって、日本がとるべき道はふたつありました。ひとつはアジアの国々に対等の立場に立ち、手をたずさえて平和を実現する道です。もうひとつはアジアの国々を侵略し、植民地^{注1}とすることによって、アジアを支配する強国となっていく道です。

日本はどちらを選択すべきだったのでしょうか。結果からいえば、日本が選んだのは後の道でした。当時は近代国家となるかどうか、これだけが国の優劣をはかるはかりであるとされていました。指導者たちは、今はアジアの近代化をまつ必要はない、西洋の文明国と友人になり、西洋に追いつき追い越し、近代化の遅れているアジアの国々とはたもとを分かつべきだと考えたのです。

この考えが、後の日本の進路を決定づけることとなります。このような「脱亜」、アジアを脱するとの方向はやがて「侵亜」、アジア侵略の進み行きとなり、ついには欧米をも脱して日本こそ神国、唯一絶対の国家であると主張され、これが十五年戦争^{注2}を支える思想となります。この思想がいつしか日本人の心に深く浸み込み、国民の歴史教育の根本理念として定着することにもなるのです。

朝鮮侵略政策

東アジアの国々の中でも、とくに朝鮮は日本

の侵略にさらされ続けたことにおいて際立っています。朝鮮と日本とはお隣同士であり、古くから貿易や文化交流もさかんになされていましたが、明治以後は日本の植民地政策によってたいへん不幸な、悲しい歴史となってしまいます。

日本による朝鮮侵略の第一歩は江華島事件（1875年）です。当時まだ鎖国を守っていた朝鮮に、政権交代にともなう政治の混乱が生じました。日本はこの機をとらえ、首都ソウルの要塞^{注3}であった江華島に近づき、軍事的な圧力をかけて江華条約を結ばせ、無理やり三つの港を開かせたのです。この江華条約は不平等条約です。先に、開国を迫られた日本が不平等条約を強いられたことをお話ししたかと思います。日本も朝鮮に対して同じことをしたことになります。

江華条約の締結によって日本は朝鮮の経済を支配し、人々の生活はとみに苦しさを増していきます。朝鮮の国内では日本に対する反発と当時の朝鮮政府への不満がたかまり、民衆による抵抗運動が続けて起こるようになります。

注1 ある国（国民）が他の国に渡り、その土地を従属関係に置いて支配し、主権を失わせること。

注2 1931年の満州事変から日中戦争を経て1945年の太平洋戦争降伏まで、日本が15年にわたって行った戦争をまとめてこのように呼びます。

注3 国を守り、外敵を防ぐために国境や海岸などに置かれた建物や地域。

日清戦争と日露戦争

江華条約締結後の1894年、朝鮮の独立と近代化をもとめる大規模な農民反乱が起こります^{注1}。この反乱をおさえるため、朝鮮の政府は清^{注2}に援助を要請します。一方日本も朝鮮半島での勢力を維持しようと、朝鮮政府の意向を無視して軍隊を派遣し、日本と清は朝鮮にとどまって向かい合うこととなります。1894年、ふたつの国は戦争に突入し、翌年日本の勝利をもって終わります。

日清戦争に勝利したことにより、日本は欧米の国々とならぶ帝国主義^{注3}国家としての自信を深め、東アジアの国々において支配的な地位を得、清に朝鮮の独立を認めさせることにも成功します。これ以後、日本は朝鮮を思うままに支配していきます。

日清戦争後、東アジアではロシア、ドイツ、フランスの力が強まり、朝鮮半島でもロシアの力を頼みとして日本の支配に抵抗しようという動きが見られるようになります。これに危機感をいだき、一気に状況を打開しようとした日本は、朝鮮の王妃を殺してしまいます^{注4}。王妃をうしなった朝鮮の人々は深く悲しみ、日本に対する民衆の抵抗運動が激しさを増していきます。

1904年には日露戦争^{ほっばつ}が勃発します。この戦争は中国大陸の支配をめぐる欧米の国々のかけひきを背景としていました。日本はロシアによる中国占領を阻むとともに、朝鮮の支配を確固たるものとするためイギリス、アメリカと手を結びました。一方ロシアの背後にはドイツ、フランスが控えていました。

戦争は日本がロシアに勝利する結果となり、すでに朝鮮半島を植民地とするための準備をすすめていた日本は、戦争の後欧米の国々との交渉の中で朝鮮支配の承認をとりつけます。日露終戦の1905年に韓国^{注5}を保護国^{注6}とすることが閣議決定され、続いて第二次日韓協約（もしくは保護条約）が締結されたことによって500

年の歴史をもつ朝鮮王朝はたおれ、ここに日本による朝鮮植民地化はほぼ既成の事実となります。

このとき日本国内では日の丸がかかげられ、祝賀行列がくり出されましたが、朝鮮の人々は国をうしなった悲しみに、地をうちたたいて涙にくれたのです。日本政府は朝鮮の全土に巻き起こった激しい抗日運動を武力によって弾圧しました。

注1 東洋の三つの宗教（仏教、儒教、道教）を合わせた^{とうがく}東学という宗教と結びついていたため、東学党の乱と呼ばれます。

注2 17世紀の初めから20世紀の初め、1912年まで続いた中国の王朝。

注3 ひとつの国が経済や軍事において他の国々をおさえ、大国となっていこうとする、そのありかた。

注4 王は日本の支配に抵抗していました。

注5 1897年に朝鮮国は国号を大韓帝国とあらため、朝鮮国の王は大韓帝国皇帝に即位していました。

注6 条約にもとづいて他の国の主権によって保護を受ける国。半主権国。外交等の制限を受けます。

内村鑑三の非戦論

日清戦争をどう見るのかについて、当時日本では義戦論がとなえられていました。この戦争は朝鮮の政治に口出しして朝鮮の発展を遅らせている清をこらしめ、朝鮮を清の手から解放して文明化をうながす正義の戦争であり、文明国である日本が清に対してふるう教訓の鞭であるとの理解が支配的だったのです。当時のキリスト教指導者たちの多くもそのような考え方に立っていました。

内村鑑三も日清戦争のおりには義戦論者のひとりでした。しかし戦争に勝利した日本はアジア侵略政策をつのらせ、戦勝に酔った政治家、

軍人、言論人、実業家たちのおごりや道徳の乱れは目に余るものでした。自国の利益、自身が強い国になることだけを欲する日本の現実を目にした内村は「日清戦争の義」をとねた自分を深く悔い、日露戦争のさいには義戦論を捨てて非戦論に立ち、日本の進み行きに対する鋭い批判者、警告者となっていきます。

内村の非戦論はいかなる意味においても戦争を認めないというものです。絶対的な平和、絶対的な戦争廃止を聖書そのものが教えているというのがその理由です。理屈をつけずに聖書の御言葉に従う姿勢を内村ははっきり持っていました。彼の非戦論もこの信仰の姿勢から導き出されたのです。

内村の非戦、平和の考えの要点だけを以下に挙げます。現代のわたしたちが平和について考えるときにも大切な指摘がなされていると思います。

- ・ 敵を愛せよとのキリストの教えは決して理想論ではない。これがキリストの命じておられることである以上、これを守り行う力を神は必ず与えてくださる。
- ・ 軍事的な抑止力によって平和を実現することはできない。もしできるなら、世界はとっくに平和を実現しているであろう。剣をふるうことでむしろ憎しみと報復の連鎖がつるば

かりであるというのが本当ではないか。剣を捨てることによってこそ平和が到来する。そして、悪とは自滅的なものである。

- ・ キリストが教えられた無抵抗の教え^{注1}は人を無気力にするとの意見があるが、反対である。無抵抗は抵抗するより勇気のいることである。われわれは愛のため、勇気のため抵抗しない。敵を愛し、敵の善を思う。これには敵を倒すことにまさる非常な勇気を必要とする。
- ・ あらゆる戦争の奥底には、人間の罪の問題があることを知らねばならない。われわれは何より自分自身の罪とたたかわねばならない。その意味では敵は外にでなく、内にある。十字架のキリストを仰ぎ、赦しの恵みにあずかることによってこそ、真の和解と平和が与えられる。

内村は日露戦争の開戦が迫りつつあった時期に、この戦争は日本とロシアとの戦争にとどまらず、全世界に戦争の悲惨をもたらすものになるかもしれないと警告していました。そしてその後起こるふたつの世界大戦、十五年戦争と日本の敗戦を見ることなく世を去るのです。

注1 マタイによる福音書5章38節以下。

イスラエルの歴史と信仰 (1)

赤石純也 (伊丹教会 牧師)

1. 父祖たち

今号から何回かをかけて、イスラエルの歴史と信仰の要点をたどってみることにします。どこから始めるか。ダビデからがよいとか、バビロン捕囚以後からがよいとか、専門的にはいろいろな考え方がありますが、この欄では、教会学校で奉仕するためという観点から、アブラハムから始めたいと思います。

アブラハムが「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい (創世記12:1)」と神さまに言われて旅立ったのは大きく言って紀元前2000年頃です。イスラエルの人々も、普通ここから自分たちの歴史を考え始めているようですから、私たちもそれにならって、信仰の事柄と切り離さずに創世記通りにたどってみましょう。

アブラハム物語の核心は2つあります。1つはアブラムからアブラハムに名前が変わった出来事、つまり「あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい (17:1)」と神さまに言われて、信仰の父アブラハムとなった出来事です。そもそもイスラエルの歴史は「信仰の」歴史として紀元前2000年からたどられているのです。この「全き者となりなさい」という神さまの御言葉は、やがて申命記に入って、改めてイスラエル全体への普遍的な戒めとして命じられることとなります (18:13)。そしてそれを2000年後にイエス・キリストが山上の説教の中で、弟子たちにもお命じになる (マタイ5:48) という大きな流れがあります。ですから、今わたしたち、新しいイスラエルには4000年前の御言葉が直接届いてきている。神さまの御言葉はいつまでたっても過去のものにはなりませんから、イスラエルの歴史を考えるとときには4000

年前がつねに現在なのですね。この辺がイスラエルの歴史を考えるときの勘所です。

「全き者となりなさい」というこの1つ目のポイントは、また申命記の時代にくだったときに見直すこととして、今は2つ目のポイントに入りましょう。それは有名なイサク奉獻の出来事が何をもたらしたかということです。アブラハムの生涯のクライマックスといってもよいこの出来事を、しばしば行われるように「独り子を惜しまなかつた神さま」という連想にもっていってしまうと、歴史性はどこかに行ってしまいます。この出来事の「歴史的」な重要性は、これによってアブラハムがこぎつけた約束、つまり「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る (22:18)」という神さまの約束の方にあります。一見、漠然とした感じがしますが、イスラエルの信仰の歴史はこれを漠然とした約束とはみなしませんでした。これは表面的な意味からさらに踏み込んだ「奥義」としての読み方になるのですが、イスラエルはこの「子孫」という言葉を、普通に考えたときの集合名詞 (つまり当然の事ながら「子孫たち」) の意味には読まなかったのです。この「子孫」が単数形だということのうちに「奥義」がある。つまりアブラハムから出る「単数の」子孫によって「地上の諸国民はすべて祝福を得る」。この約束を勝ち取ったことがアブラハムという信仰の父の生涯のクライマックスである。このときから、その「一人の子孫」が現れるのを待つという信仰の歴史が始まったのです。つまり紀元前2000年に、やがて地上の諸国民を祝福に入れるべき「一人の子孫」を待ち望む信仰を始めたから「信仰の父」アブラハムなのですね。「信仰」とはその「一人の子孫」を信じることです。

紀元前2000年以來のイスラエルの歴史とは取りも直さず、その一人の救い主が現れるのを待つ信仰の歴史だったので。

それでは少し時代を下ることにしましょう。イサク、ヤコブと続いていくわけですが、どうして私たちはこの三代を続けて「アブラハム・イサク・ヤコブ」と言うのでしょうか。それは取りも直さず、この「一人の子孫」の約束が三回繰り返して与えられたのが、この三代だからです。つまり、イサクに対して神さまは、これは最初アブラハムへ与えられた約束だということを出しなせながらこう言われます。「あなたの父アブラハムに誓ったわたしの誓いを成就する。(中略) 地上の諸国民はすべてあなたの[一人の]子孫によって祝福を得る。アブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの戒めや命令、掟や教えを守ったからである(26:3~5)」。こんなふうと同じ「一人の子孫」約束を繰り返して、最後にヤコブです。これがあの有名なヤコブの階段の夢のポイントですが、ここで神さまは「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である」と名乗られて、上記のつながりを踏まえた上で「地上の氏族はすべて、あなたの[一人の]子孫によって祝福に入る(28:13,14)」と、同じ約束を三度目にされたのです。これがイスラエルの歴史の最初に刻まれた「三回」という特別な数字です。ここで約束された当のかたキリストが2000年後に「三回」十字架と復活を予告され、ペトロが「三回」主を否み、ピラトが「三回」この人に罪はないと言うのも、皆ここに起源をもつ「三回」です。つまり十字架によって「地上の諸国民をすべて祝福に入れる」という神さまの約束を表すための「三回」だったので。ですから私たちが「ア

ブラハム・イサク・ヤコブ」というときには、決して漠然と信仰の父祖を思うのではなくて、この三代に向かって神さまが明確なキリスト予告をされたこと、そしてこの三代以来、そのキリストを待ち望む信仰の歴史が始まったという歴史を思うのがよい。だからこそマタイ福音書の冒頭と最後は、冒頭の系図はアブラハム・イサク・ヤコブから、最後は「地上の諸国民すべて」をわたしの弟子にしなさい、というキリストの言葉になっているのです。

アブラハム・イサク・ヤコブ三代に向かってなされたこの約束に、不思議な肉付けがなされて創世記の時代は終わります。それがヤコブの遺言の中の「ついにシロが来て、諸国の民は彼に従う。彼はろばをぶどうの木に、雌ろばの子を良いぶどうの木につなぐ(49:10)」というユダ族についての予告です。「諸国の民は彼に従う」というのは「諸国の民は彼に従いなさい」という意味でもありますが、アブラハム三代への「諸国民」の祝福を、最後にシロという謎の人物に集約して、「諸国の民は彼に従いなさい」と命じて創世記は終わります。イスラエルは、これが来たるべき「一人の子孫」を指すはずだと考え、キリスト時代に至るまで、ここが朗読されるときには「ついにシロ、つまりメシアが来て」と朗読されていました。そしてこの予告がユダ族についてのものですから、ヤコブのこの遺言以来、メシアはユダ族から出ると考えられてきたのです。そしてキリストはこのことをデモンストレートするために、ろばの子をほどこいてくるように命じられたときに「そのろばの子の主がお入り用なのです」と言わせたのでした。

アメリカのホーム・スクーリング

望月 信 (休職教師)

昨年11月に、フリー・スクールなどの学校外教育を議員立法によって法制化することを民主党が決めたというニュースがありました。現時点のことは分かりませんが、その時点の報道では、野党も大筋で同意しており、早ければ2018年4月にも新しい制度がスタートするということでした。わたしは、これまで、フリー・スクールなどの学校外教育にあまり関心を払ってきませんでした。けれども、教会として教育の領域に取り組む必要性が以前に比べて増していると感じており、公立学校に代わりうるオルタナティブ教育（代替教育）の可能性に目を向けることが必要だと思っています。実現までなお紆余曲折があると思いますが、良い方向への進展を期待しています。

アメリカでも、ホーム・スクーリングが公的に認められるまでには、長い道のりがかかったそうです。アメリカでは、それ以前からおもに宗教的理由による私立学校やホーム・スクーリングが行われていましたが、1960年代後半から1970年代にかけて、公教育に対する不満が噴出し、その受け皿となるかたちでホーム・スクーリングが広く認知され、実践されるようになりました。今日では、ホーム・スクーリングを私立学校と同等の地位として扱う州、学校での教育を通常と定めてその例外として扱う州など、法的な取り扱いはいくつもあります。アメリカのすべての州でホーム・スクーリングが認められています。

ホーム・スクーリングは、英語では、Home schooling、Home-Based Schooling、Home Education、Home-Based Education、Home-

Designed Schooling などいろいろな呼び方がありますが、ひとことで言うならば、「家庭を拠点とした学習」、「家庭を基盤とした教育」です。子どもを学校に送り出すのではなく、家庭で親が（場合によっては家庭教師が）教育します。公立学校、私立学校による学校教育と同様に、義務教育の責任を果たす就学形態の一つとして認められているものです。全米の教育に関する統計によると、2011～2012年の年度で、アメリカ在住の幼稚園から高校生にあたる子どもおよそ5200万人のうち、およそ180万人がホーム・スクーリングによる教育を受けました。これは全体のおよそ3.4パーセントです（さらにその内訳は、白人系が83パーセント、黒人系が5パーセント、ヒスパニック系が7パーセント、アジア・太平洋諸島系が2パーセント）。ですから、100人に3人が4人はホーム・スクールで学んでいることになります。また、2003年が2パーセント、2007年が3パーセントであり、増加傾向が続いています。

自身もホーム・スクーリングで子どもを教育し、ホーム・スクーリングについて幾つかの著作がある Diana Johnson は、“The Starting Point -Finding your way through the home school maze-” というホーム・スクーリングの手引き書の中で、ホーム・スクーリングに取り組む理由を七つ挙げています。1) 道徳的、宗教的理由。学習項目の主題や教材をその信仰的な確信や道徳的な立場に基づいて選択することができます。これがアメリカにおいてホーム・スクーリングが選択される最大の理由でしょう。公立学校の教育に賛同できず、しかし、近隣に適切な私立学校がない場合、ホーム・ス

クーリングが選択されます。都市部を離れると、適切な私立学校を見つけることができない場合が多々あると思われます。2) 学問的優位性。ホーム・スクーリングは多くの場合、子どもと親（教師）の対一で行われます。これは、多人数が教室で一緒に学ぶ方式に比べて、到達度が高いという研究結果があります。3) 社会性の向上。「ホーム・スクーリングの子どもは社会性に欠けるようになる」という批判があります。しかし、ホーム・スクーリングにおいては、家庭での教育に並行してさまざまなグループで教育を受け、社会的な活動に参加する機会を設けることが一般的です。それらを通して、同年齢の友人を見つけることができます。また、同年齢に限らない、幅広い人間関係の中に置かれることとなります。それはより実社会の人間関係に近いのであり、学校という閉じられた環境よりもむしろ社会性の向上に結びつく、とされます。4) 家庭の一致。ホーム・スクーリングは家族全体を巻き込むものへと生活スタイルを変革します。家庭生活と学校生活が分離されるのではなく、親と子どもは生活の大部分を共にします。そこには、祝福と失敗の両方があるでしょう。それらを通して、家族は互いに愛すること仕えることを学び、霊的な成長を遂げることができます。5) 個々人の事情に配慮した指導。子どもはそれぞれ自分のペースで、自身の関心に応じて、学習を進めることができます。ゆっくりしたペースで学ぶことができますし、逆に通常よりも速いペースで学ぶこともできます。6) 特殊な事情への配慮。教室で活動することが難しい身体的・能力的な困難等がある場合に、子どもの必要に応じた教育をすることができます。7) 教育内容等の管理。ホーム・スクーリングの場合、学習内容、教育方法、学習する時期などを親自身が管理できます。

以上の理由から分かりますとおり、アメリカにおいて、ホーム・スクーリングは、より良質の教育の可能性を求めて選択されるもの、という

位置付けです。また、学校教育に不安を抱いて、ホーム・スクーリングに踏み切る場合も少なくないようです。日本では、不登校に対する対策としてフリー・スクールあるいはホーム・スクーリングに関心が向けられますが、そのような理由はあまり挙げられません。アメリカでも、いじめがないわけではなく、何らかの理由により不登校に陥る場合がないわけではありません。けれども、そのような場合には、別の学校に移ることなどによって対応するようです。もともと年ごとに学校が変わることが少なく、家庭によっては、学校とホーム・スクーリングを一年交替にしていたり、子どもたちのうち一人は公立学校に、一人は私立学校やホーム・スクーリングで、などということが行われていますから、一つの学校にこだわる理由がありません。いろいろな意味で、学校教育が相対化されていると行うことができると思います。

広義のホーム・スクーリングには学校の通信教育（学校がカリキュラム等を提供する）も含まれますが、一般的には、Home-Designed Programであり、家庭がカリキュラム（教育課程）を検討し、適切な教材を選択します。このカリキュラムと教材は、多くの場合、ホーム・スクーリングを支援する団体、出版社等が発行するものから選択されます。とても多くのカリキュラム、教材があり、宗教的・道徳的な立場から、あるいは教育内容や学問的な関心から、個別の事情に対する配慮の必要からなど、さまざまな方針に基づく、数十種類に及ぶ、多種多様なカリキュラム、教材が提供されています。前述の Diana Johnson は、同書の中で、次のような教育形式また教材を紹介しています。教室スタイルの教育の中で用いられていた子ども用の教科書と教師用の指導書がセットになった伝統的なもの。ワーク・ブック形式で、テキストを自分で読み、そこに書き込むことによって学び、親（教師）の負担を軽減する形式のもの。

さまざまな分野の書物を紹介し、教科書ではなく、書物を読むことを通して学びへの関心を高め、導く形式のもの。成長の過程に応じた主題を定め、その主題を中心に諸領域（国語や算数、理科、社会など）の学びを広げていくもの。コンピュータなどの技術デバイスを用いて学びを進めていくもの、子どもに自身の関心を追求させて子どもの生来の可能性を広げようとするもの、などなど。実際には、これらをうまく混合し、適度に取り捨選択できるようにしたものがカリキュラムや教材として提供されています。親はそれらを自身の家庭の状況に適応するように用います。

ホーム・スクーリングが公的に認められるようになった今日、州政府の規制や監督がホーム・スクーリングにも及ぶようになりました。多くの州で、ホーム・スクーリングにおいて学ぶべき学習項目が定められており、カリキュラムや教材も、その基準に適合するように作成されています。親は、提供されるカリキュラムと教材の中から州政府の基準を満たすように内容を選択しなければなりません。

このカリキュラム・教材を提供する支援団体や出版社が中心になって、ホーム・スクーリングを行っている家庭を支援するネットワークが形成され（あるいは、そのようなネットワークが自らカリキュラムを編成し、出版している、とも言える）、スクーリングの機会を提供しています。地域のコミュニティー・センターや教会などを会場にして開催される教室に、週に一回や二回、家庭の事情に応じて通い、子どもは友だちと出会い、親は仲間と出会います。また、コミュニティー・センターや教会で開催されている音楽や芸術の教室に通っている子どもも多く、これらを通して社会性を身につけることができます。

こうして行われるホーム・スクーリングですが、さまざまな調査と研究によって、ホーム・スクールで教育された子どもたちの学力は、公

立学校に通う子どもたちと比べておおむね高いことが判明しています。2008年に行われた調査では、全米で行われる標準学力テスト（SAT）で、ホーム・スクールの子どもは公立学校の生徒を37パーセント上回る成績を記録したそうです。一般的にホーム・スクーリングを施す親自身の教育レベルが高いため、一概にホーム・スクーリングの効果とのみ判断することは難しいようですが、一対一の教育が基本で、分かるまで時間をかけることができること、また、分かったならばどんどん先に進めることが好結果をもたらしていると考えられています。

ホーム・スクール後の進路について、高校入学に際しては、とくに入学試験があるわけでもなく、中学校の卒業証明が求められることもありません。前述のSAT Tの成績の提出が求められますが、可否を判断するためではなく、入学後のクラス分けや指導のために用いているようです。大学に進学する際には高校の卒業証明が必要とされますが、それについても、公立学校に在籍する形をとって州政府が発行する、ホーム・スクーリングの団体が証明を発行する、通信教育機関に申請して発行してもらうなど、幾つかの方法が可能であるようです。自宅を学校として適当な名前を付け（たとえば、Mochizuki Family Academyなど）、親を校長として証明を自作する方法も認められているようです。大学も、ホーム・スクール出身の優秀な学生をどんどん受け入れる傾向にありますから、ホーム・スクーリングだからということで心配することはないようです。ただし、アメリカでは、大学進学に際して、それまでの学習内容、獲得した賞や課外活動、ボランティア活動などの実績などの記録の提出が求められ、評価の対象となります。懸賞論文・作品やボランティア活動などに積極的に参加し、実績を積み重ねておくこと、それらをきちんと記録しておくことが大切であり、家庭全体で目的意識をもって取り組み、努力することが必要であると

思われます。

ホーム・スクーリングの実際を知りたいと思い、あるキリスト者のご家庭を訪問して、お話をうかがうことができましたので、最後に紹介いたします。夫がアメリカ人、妻が日本人で、お子さんは2016年1月時点で小学3年生のお嬢様です。ミシガン州在住のご家庭ですから、これはミシガン州の事例ということになります。また、奥様はボランティア活動などを除いて決まったお仕事を持っておらず、ご主人も会社員ではなく、比較的時間の都合のつきやすいご職業です。学習の指導は、おもに奥様が担当しておられます。

- 1) ホーム・スクーリングを行うきっかけ…小学1年生で通った私立学校に対する不満から、2年生に上がる際に切り替えた。近隣の私立学校に通っていたが、教育水準が地域の公立学校よりも低く、経済的な困難もあり、生徒も教師の数も減少傾向だった。クリスチャン・スクールだから通わせただけで、失望した。また、宿題が多く、家庭で日本の勉強の時間を取ることに難しかった。日本の勉強と両立させることが困難だと思った。また、戦争に対する態度への疑問、日本を含めて旧敵国をさげすむ言動への失望もあった。
- 2) ホーム・スクーリングの目的…①日本語の勉強、また日本の勉強の時間を取るため。②教育水準の問題。③時間の用い方の問題。家庭で学ぶなら、カリキュラムに従った学びをおおむね午前中に終えることができるので、午後の時間が比較的自由になる。午後に習い事の時間を取るができる。
- 3) 学習内容と一般的なスケジュール…朝8時から9時頃に勉強をスタートし、おおむね午前中に終えることができるが、日によっては午後や夜になることもある。内容は、ミシガン州の基準として求められているもの

が、リーディング、文法、算数、ミシガンの歴史、社会、理科(学年が上がるにつれて、内容が増える。アメリカの歴史と憲法、連邦政府と州政府、など)。これらをホーム・スクーリングのカリキュラムに基づいて行う。また、日本の通信教育を取り寄せていて、国語、算数、理科、社会を行っている。午後は、習い事、地域での活動などにあてる。

- 4) スクーリングなど…カリキュラムの提供団体が主催する教室に、週一日通っている。3年生までは午前中のみ、4年生からは丸一日になる。この教室は、家庭で行う勉強と内容がリンクしている。また、公立学校のパート・タイムの生徒として登録しており、オンラインで授業を二つとっている。これは家庭での学習内容とリンクしていない。この登録により、地域のコミュニティーのクラスを四つとることができる。これは、ミシガン州が費用を負担する(公立学校に通わないため、公立学校の費用を抑制することができるから)。そのクラスとして、ピアノ、陶芸などの習いごとに四つ通っている。スクーリングや習い事に通うために、送迎を含めて、多くの時間を割かれている。

このご夫妻によると、ミシガン州は、ホーム・スクーリングに対して比較的寛容であり、むしろ支援する方向で制度を整えているようですが、今なお厳しい環境におかれている州もあるそうです。地域や州政府と厳しい折衝を必要とする場合もあり、そのような家庭を支援する弁護士のグループがあるそうです。ホーム・スクーリングの支援団体のネットワークに所属すると、親同士の協力だけでなく、弁護士の支援も受けることができるので、とても心強いということでした。お嬢様は、午前中はとても忙しいが、習い事、課外活動はとても楽しいとおっしゃって、ホーム・スクーリングで学ぶことを喜んでおられました。うらやましいとも思える

ホーム・スクーリングですが、しかし、そのために払われる時間的、経済的な犠牲は決して小さくありません。家庭全体の取り組みが必須であることはもちろんですが、アメリカの柔軟な

教育システムがあり、支援団体や地域のコミュニティがあつてのホーム・スクーリングであると思われました。

若者の心に届く説教

大嶋重徳 (KGK 副総主事)

「若者の届く説教とは何か」、KGKの主事となってから私が一心に求めてきた課題です。届くとは、若者に人気のある話しができることではなく、若者が御言葉によって変えられ、御言葉に応答した信仰の決断へと導かれる説教なのだすると、若者に「届く」のは必ずしも若い説教者ではありません。私自身、自分自身の人生の節目に、出会ってきた説教者は、温和で、重厚な年配の牧師達でした。しかしその重厚さなどどこを探してもない私自身が、ひたすら獲得しようとしてきた若者に届く言葉に関して、考えさせられ、祈りつつ備えてきたことをこの紙面を通じて分かち合わせていただければと思っています。

私たち説教者が変わりゆく若者文化の中で、どこで若者に届く言葉を獲得できるのかというと、それは若者文化に溢れている若者言葉のなかにあるのではなく、説教後の説教者と若者との信頼に満ちた人格的な交わりが重要な役割を果たすと私は考えています。私は説教を終えた後、必ず「今日のメッセージどうだった？」と聞くことにしています。中高生もこちらを気にして「良かった。」と言ってくれたりしますが、そこで終わらずに「どこが良かった？ 教えて。」と聞くと、「わからん……」と言い、「どこがわからなかった？」と聞くと、嫌そうな顔して「それがわからん」と答えます。そこで心がくじけそうになるのですが、そこで諦めてはいけません。この説教後の分かち合いの中に、若者達の心に届いた御言葉の応答が隠れている。その言葉こそ、教会に居る具体的なある青年に届いた言葉なのです。ここに若者に届く言葉があります。あるいは、説教後の祈りの交

わりの中にも若者に届く言葉は隠れているでしょう。メッセージを聞いて、先ず第一に彼らが神様に応答する言葉、テーマのなかに確かに神様が触れてくださり、彼らに届いた言葉が祈りの言葉の中に隠されています。



これは説教者が、説教を若者と共に作るという同労者の意識を持つということです。若者達に説教者が「私は若者に届く言葉を持つ説教者でありたい。そのために君が教えられたことをしりたい。助けてほしい」と説教者がお願いする姿勢を見て、教会の若者が牧師を侮ることはありません。むしろ若者たちは牧師のためにこの教会のために何か出来るのだ、と喜びをもち、説教者を尊敬するようになります。そして彼らの説教を聞く姿勢が変わってきます。大切なことは、説教者である我々が、教会で若者から説教を問われることから逃げないことかもしれません。

説教後の分かちあいの時間が、忙しい日曜日の礼拝後という時間がほとんどなければ、別の日に約束をすることや、メールでレスポンスをくれとお願いしてもいいかもしれません。

さらに「若者に届く説教」という課題は、決して説教者だけの課題ではなく、教会の課題でもあります。なぜなら説教は教会の営みだからです。若者たちは「本当にこの説教は大人達にとって届いているのか？」「自分が聞く価値のある言葉なのか？」「本当に大人が御言葉から教えられ、養われているか？」ということを冷静に見ています。説教が届いている大人たちが

御言葉を分かち合う空気を教会で形成する事が大切です。そこで若者達は、説教を聞くとは何か？ということを経験していきます。教会の中で「今日の説教、深かったなあ」という言葉が飛び交う教会を形成しようと取り組むことは、「それほど聞く価値があり、あのような大人が痺れる神の言葉は何か？」ということ若者たちに伝えることは、彼らを大きく変えていきます。

以前、KGKの集まりで説教中必ず寝る学生がいました。よく話しを聞くと、彼らはクリスチャンホームで礼拝は、我慢する時間。そして礼拝中に寝る習慣をつけた。すると説教となるとパプロフの犬のように目が閉じる学生でした。子どもの頃から、説教を親しむ習慣をつけることは大切なことだと思います。静かに本を読んでいることは、礼拝の邪魔をさせないというだけで、何の霊的助けにもなりません。先日行った教会では、こども達のために礼拝クイズという形で説教のレジュメが子供向けに配られます。説教者が事前にクイズを作成する訳ですが、説教のなかにクイズの答えがある。またもっと幼い子は説教の話を自分なりにイメージ化して絵にし、礼拝後に教会学校の先生に提出します。すると、教会学校の先生が赤ペンで返事を書いてくれ、シールをくれる。とてもいいなあと思いました。私もその教会で礼拝説教の奉仕をした時に、クイズを作成しました。クイズを作る時に必ず説教者は、こども達のことを思い浮かべます。こども達が説教黙想に必ず浮かんでくる。その時にこども達に届く言葉を思い巡らし、説教の言葉がより整えられるということを経験しました。

また若者に届くためには、ただ単に例話を入れればいいというものではないと思います。例話を沢山話せば話すほど、聖書そのものの持つ力を信じていないかのような説教になることも多くあるかと思っています。また例話しか残らないこともあるでしょう。例話を話す場合も、どこ

かの素晴らしいクリスチャンの話しをするのではなく、説教者自身の失敗、説教者自身のストーリーを分かち合い、そこに働かれる神のあわれみの物語を話すことのほうが大切です。説教者のリアリティーに神の言葉が真剣に望んだことを、若者達は自分自身にも御言葉が語られるならば、それはどのように語られるのだろうかと考えからず。

もしくは説教者が自分のことだけではなく、教会の中の具体的な人物の証を話す。立派な人物の話は、リアリティーがないし、その場合ほぼ「こういう人になりましょう」という道徳訓になるケースが多いと思います。むしろ自分の属している教会で接している具体的なある人のストーリーが有益です。さらに教会の具体的な歴史、大切にしている信仰の背景、神様が導いてくださったあわれみの物語を伝えることは、彼らの信仰にとっても歴史性をもたらします。教会の信仰にも物語があって、山あり、谷ありで、でもそれでも尚、歴史を導いてくださる神様が、教会自身の歴史を導いてくださることを伝えていくことは、自分自身もまた教会の歴史の中を生きていくものでありたい、と願うようになります。

聖書自身を紐解いてみると、そこには失敗の歴史、あわれみの歴史……の連続です。悩み、失敗した信仰の先人達の人生のストーリーが綴られています。この人格的な神様の関わりのおかげにこそ、「届く」ことの本質があるのではないのでしょうか。

現代、より問われているのは、効果的な伝道方法や効果的な話し方ではなく、キリスト者の人格的な交わりを誠実になすことです。届く言葉を作る、届く関係作りが大切なのです。ある時、「一人一人に時間をかけて……と言っても、圧倒的に忙しい社会と教会の中でどうしたらいいのか？」と質問を受けたことがあります。しかし、これには王道はなく、人が成長するには時間がかかるのであり、忙しいなか、どこに価

値を置いて生きるのか、ということが問われているのです。時間をかけて、長いスパンで若者と関わること、これは若者伝道に避けて通る事の出来ない重要な要素です。

若者伝道を本格的にするならば、この「時間」をささげることなしに、他のどんな魅力的なプログラムを提供したとしても、彼らは成長しません。むしろ大人が好む青年を集めるだけになるでしょう。わたしたちは人格的に彼らの側に寄り添い彼らに説教を為し続けていきたいと願います。わたし達もまた自分の若い頃に、自分の叫び声に耳を傾けてくれた大人の姿があったからこそ、今の自分がある筈です。

大嶋重徳先生 略歴

- ・1974年、京都府福知山市生まれ。
- ・中学生時代はバスケ部に属し、教会を離れた時があったが、16歳で受洗。
- ・1997年からキリスト者学生会(KGK)主事となる。
- ・2003年に神戸改革派神学校卒業し、KGK主事に復帰。現在は副総主事、学生宣教局長、沖繩地区担当主事。
- ・鳩ヶ谷福音自由教会協力伝道師。一男一女の父親。
- ・著書：
「おかんとボクの信仰継承」(いのちのことば社)
「若者と生きる教会」(教文館)

御言葉は命の水

保田広輝（長丘教会員）

【新改訳 ルカの福音書 5章15～16節】

「イエスのうわさは、ますます広まり、多くの人の群れが、話を聞きに、また、病気を直してもらいに集まって来た。しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。」

イエス様は、どんなに忙しい時も、たったひとりで荒野（寂しい所）に退いて、祈っておられました。それは父なる神様と親しい交わりの時間を持ち、父の御声を聞くためであり、父の御心を知るためでした。

神様に選ばれた人がまず導かれる場所は荒野です。私たちは荒野を避けて、居心地の良い場所で休み、自分の力で生きようとしてしまいます。世と同じ価値観で人生を歩もうとするのです。

しかし、御霊は私たちを人生の荒野へ導きます。隠れていた罪の性質や、自分すら気付いていなかった傲慢な心、怒り、といった日頃は浮かび上がることのない、心の奥にあるものが、荒野で追い込まれた時にあらわれてきます。神様はそのような古い性質を打ち砕き、整えてくださり、神様の務めを果たすのにふさわしい者へと、造り変えてくださいます。荒野で神様に取り扱いわれ、新しい自分に養われていくのです。

荒野は神様の恵みの豊かさを知り、安息を味わう場でもあります。荒野でイスラエルの民が天からのマナで養われたように、私たちも父なる神様が背負ってくださることを知ります（申命記 1章31節）。

荒野は、ヘブル語で「ミッドバール」、つまり「御声の場、神様の御声を聞く場所」という意味があります。神様が私たちに荒野に導くのは、最高の理由があるからです。神様ご自身が私たちと2人きりになりたいのです。

【新改訳 ホセア書 2章14節】

「それゆえ、見よ、わたしは彼女をくどいて荒野に連れて行き、優しく彼女に語ろう。」

荒野は、神様とのデートコースです。私たちが御声を聞きたいと願う以上に、神様はご自身の声を聞かせたいと願っておられます。しかし、私たちは日常があまりに忙しく、疲れているので、御声を聞き取りにくいのです。だから、神様は私たちと2人きりになれる荒野へ連れ出すのです。

ちなみに、荒野は『水』が流れるなら、人が生きることができる豊かな土地に変わります。

【イザヤ書 43章20節】には、「荒れ野に水を、砂漠に大河を流れさせ、わたしの選んだ民に水を飲ませるからだ。」とあります。神様が私たちに与える『水』がわき出る場所は、荒野です。何もない荒野にいるような試練の中で、『命の水』である御言葉が与えられるのです。

神様が私たちに試練を与える目的は、何もない環境の中で、父なる神様に立ち返り、私たちの人生が御言葉によって回復させられて、神様に礼拝と賛美をささげるためです。そして、自分のために生きるのではなく、神の国と神の義を求める人生を生きるために、試練が必要なのです。

大切なのは、試練が速やかに終わることを願うのではなく、何もない荒野にいるような試練の中で、飢え渴いて神様を慕い求め、『命の水』である御言葉を受け取って、神様の御心を自分の心とすることです。

6年前に、難病の私は「35歳で亡くなる」と余命宣告されてから、いつも御言葉を読んで祈っていても、神様の沈黙をずっと感じていて、絶望の中でどうしてよいか分からない時期が長く続きました。神様は共におられないのか？と真つ暗な気持ちに支配されました。

しかし、現実の問題が大きくて、自分の思いに支配されていたので、神様の語りかけを聞く心のスペースがなかったことを、余命宣告から10ヶ月が経った時に、祈りの中で示されたんです。

私は「人生を自分の好きなように生きたい。そのために健康になりたい。」と心の奥で思っていたし、自分が人生の主となっていたので、自分の思いに支配されていました。私には「神様が私の主であり、自分の思いではなく、神様の御心に従って生きる」という気持ちがなかったため、神様の語りかけを聞く心のスペースがなかったんです。

だから、自分の思いに支配されて、神様の語りかけを聞くことができない心の高ぶった状態が罪であると示されて、悔い改めました。自分が人生の主となっていた罪を悔い改めました。そして、神様の御心に従って生きるためには、私の内に御言葉が回復しなければ、何も始まらないという事が示されました。

それからは、「神様が私の主です。私は神様の僕です。御言葉を通して、私に対する神様の御心を教えてください。御言葉がなければ、私

は生きることができません。人生に必要な御言葉を与えてください。ただ神様の御言葉に従って生きていきたいのです。」と祈るように変えられていきました。

そして、余命宣告から1年半が経った時に、次の御言葉を通して、心が新しく変えられたんですね。

【新改訳 ヨハネの福音書 15章16節】

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」

私は自分の意志で生まれて、自分から望んで生まれつきの難病になって生まれて来た訳ではありません。ということは、私は神様からの任命を受けて、生まれつきの難病の体選ばれた、と感じたんです。神様が難病の私を造ってくださって、難病の人生を生きていきなさい、と神様が任命してくださったからこそ、私は生まれた時から難病の人生にチャレンジしているんです。

だから、難病の私も神様から愛されているんだ、難病の私も神様の作品なんだ、難病の私は神様の失敗作ではないんだ、と思えるようになりました。それからは、難病を受け入れて、いつも神様から愛されている喜びを感じられるようになったんです。

また、難病は神様から与えられた良いものだと示されました。なぜなら、私はこの難病で生まれて来たからこそ、今の自分の性格や人生になれたし、今まで築き上げて来た人間関係があ

るからです。ひとりの命は自分に関わっている人たちに何かしらの影響を与えていますし、もし私がこの難病になって生まれて来なかったら、今まで私に関わってくれた人たちの性格や人生が何かしら変わってしまうと思うんです。神様はひとりひとりの人間を用いて働かれますから、神様と人との関係から考えたら、私にとって難病は良いものだとして示されました。

私にとって難病の人生と余命宣告は、水がなくては生きていけない荒野にいるような試練ですが、こうして『命の水』である御言葉が与えられて、神様の御心に従って、前向きに生きて

いけるように変えられました。

クリスチャンである私たちの視点は、「私が、世が、こう言っている」ということではなく、「御言葉が何を言っているか」に合わせる大切だと思えます。御言葉を通して、父なる神様の御心を感じることができるからです。

【マタイによる福音書 4章4節】

「イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」

全生活にわたる感謝～「十戒」を生きる(5)

吉田 隆 (甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長)

第9課 (第七戒)

第七戒

「姦淫してはならない。」

序

「姦淫」という言葉自体がすでに死語になっているほど、今日、性にまつわる情報は巷にあふれ倫理などはあって無きが如しです。しかし、そうであればあるだけ、この戒めの正しさと重要性はいつそう高まってきていると信じます。私たちが心して聞かねばならない戒めです。

第六戒は神によって与えられた命の尊厳を教えました。第七戒は、個々人の尊厳を踏まえた上で、神がお造りになった二つの性について、とりわけ夫婦関係・結婚関係の重要性を教えます。

そもそも命は結婚関係の中で生み出され育まれるものです。その意味でも第六戒と第七戒が密接に結びついていることがわかるでしょう。

男と女

創世 1:27～31、2:18～25、箴言 5:18,19、雅歌

神は人を御自分にかたどって男と女とに創造されました。男だけでも女だけでもない。男と女と二つの性を持つ者たちがいて初めて、神のかたちは完全に現されます。ですから、人は、男であろうと女であろうと、結婚するしないにかかわらず、それぞれの性を尊んで共に生き共に助け合うことによって神の栄光を現すものなのです。

結婚は、そのような男女の共生・協働におけ

る一つのかたちです。とりわけ、男女の性が一体となるのはこの関係においてのみです。二つの性は、結婚において、魂と心と体の調和の中で人格的に結合します。神はこのような性の交わりを豊かに祝福されました。

ですから、二つの性が互いに惹かれあうことも交わることも、それ自体は罪ではありません。神から与えられた性は喜びであり祝福です。問題は、それをどのように生かし用いるかということです。

結婚の意義

マラキ 2:13～16、マタイ 5:27～32、19:3～6、エフェソ 5:32、ヘブライ 13:4、I コリ 13:1～13

聖書は、結婚関係を損なうあらゆる言動を厳しく禁じています。イエスもまた、「心の中」の姦淫や安易な離婚を姦淫と同罪であるとおっしゃり、神が結び合わせたものを人が離してはならないとお命じになりました。

結婚は、なぜそれほどに大切なのでしょう。それは第一に、結婚関係が隣人愛の最も基本的な表現の場であるからです。子供がいるかどうかは、必ずしも結婚生活の本質ではありません。何よりそれは、隣人愛が実際かつ具体的に学ばれて行く場なのです。私たちは、結婚関係を通して、神から与えられた(何人もではない)一人の人を身も心も長所も短所も丸ごと受け入れることを学びます。また、互いに忍耐し合い赦し合いながら、人間としての成長を学びます。そうして私たちは、一時の恋愛感情や肉的な愛(エロス)とは違う愛(アガペー)を学んで行くのです。

だからこそ、聖書はしばしば、神と信仰者との契約関係を結婚になぞらえるのです。これが、結婚が重要視されることの第二の理由です。誓いに基づく人格関係、互いに対する誠実さ、生涯にわたる忠実さ、全人格的な愛、赦す愛、忍耐する愛、献身愛。それらはすべて神が御自分の民に対してお示しくださる聖なる愛のかたちです。

人間の墮落・結婚の崩壊・性の倒錯

創世 1:27～31、3:12,16、サム下 11 章、13:1～22、エゼ 23 章、レビ 20:10～21、I コリ 6:18、ロマ 1:26,27

「これこそわたしの骨の骨、肉の肉！」と感嘆の声を上げて最高の幸福を手にしたはずのアダムが墮落後どのように豹変したか、私たちは知っています。アダムにとって自分の妻は「あの女！」に過ぎなくなりました。男と女の調和によって表されるはずの神のかたちはもろくも崩れました。男は女を支配し、命を生み出す出産さえも苦痛に過ぎない。一つの家庭の崩壊が世界の崩壊につながったのです。人間の墮落と悲惨が、まさにこの結婚関係のただ中で起こったことを肝に銘じるべきでしょう。

※結婚関係が神によって定められた恵み深く麗しい制度であればあるほど、そこに現われる人間の罪深さも際立ちます。結婚関係がいつも簡単に崩れ去る社会と隣人愛からは程遠い自己中心的社会とは、表裏一体です。

姦淫の罪は、結婚関係に対する裏切り行為です。自分の一時の感情や欲望にはだされて、簡単に結婚相手を裏切る者にどうして隣人を愛することができるでしょうか。また、自分の好き嫌いで相手を簡単に変える人に、どうして人格的な成長を期待できましょうか。自分の目の前にいる人を愛することができなくて、どうして見えない神

を愛することができるでしょうか。

※健全な性が祝福であるのとは反対に、歪んだ性は多くの悲惨をもたらします。それは神のかたちを損ない、人はただ獣や物のように扱われます。性の商品化や物質化とはそのことです。そこには心や魂はなく人格を重んじることもありません。あるのはただ、肉の欲のみです。倒錯した性は、隣人のみならず自分自身の人格をも深く傷つけ、その力が強いほど魂や心を深く傷つけます。

他方で私たちは、性の倒錯と障害とを混同してはなりません。生まれながらに心と体の性が調和しない人たちがいます。同性愛の行為そのものは性の倒錯として退けねばなりませんが、障害を持つ人々に対して教会は深い理解を示し特別な配慮をしなければなりません。

聖霊の宮

ルカ 7:36～50、ヨハネ 8:11、I ヨハネ 4:10、ハイデル 1:108,109、I コリ 6:19,20、エフェ 5:3～5

この破れた世界において、結婚関係や性の倒錯の罪は重く深刻です。けれども、それがこの世の腐敗のすべてではありません。何より、キリストの十字架の下で赦されない罪などないことを覚えましょう。

第七戒が持つ意味は、年を経るごとに変わって行くかもしれません。若い体の欲をコントロールすることの難しさ、若気の至りに対する後悔の念、結婚生活の現実への失望、この世の誘惑との戦い、そして夫婦関係の危機。人間の弱さも罪もありのままに出してしまう夫婦の間に、家庭のただ中に、十字架が立たねばなりません。この十字架の前で私たちは絶えず悔い改め、主の赦しを請わなくてはなりません。そして何とか、主がお求めになる愛の高みへと成長して行けるように努めましょう。

私たちはそのためにこそ、主の尊い血によって買い取られたのでした。私たちが真の愛によって育まれる、健全な人間になるためです。私たちの体も魂も、もはや自分のものではなくキリストの霊の宿る神殿です。私たちはこれらを汚すことのないように、自分の体と魂を貶めるような思いや会話や振る舞いから遠ざかるようにしましょう。

小羊の婚宴

I コリ7章、マタイ 19:12、22:30、コロ 3:5、ガラ 3:28、黙示 19:6～8

キリスト者になったからといって、性が無くなるわけでも男女の関係が無くなるわけでもありません。性は、キリスト者の生の一部です。私たちは性を持つ存在として、これを本来の喜びに満ちたものとして生かして行くことが求められます。大切なことは、結婚関係の有無にかかわらず、男性また女性として、互いに助け合い尊重し合って、ひたすら主に仕えることです。神の祝福としての性と結婚は、しかし、地上に属するものです。それは、永遠に至るキリストとの交わりにまさるものではありません。キリストにあっては男も女もない。人は皆、天使のように主に仕える者とされるでしょう。私たちは、小羊キリストとの婚宴の日を望みつつ、聖なる行いによって花嫁の装いを整えてまいりましょう。

ディスカッションのために：

1. 結婚関係以外の性的交わりの問題は何か？
2. 性の倒錯と芸術との違いは何か？
3. 結婚関係の誘惑や危機を避けるためには？

第10課 すべては神のもの（第八戒）

第八戒

「盗んではならない。」

序

第八戒は、人間の所有に関わる戒めです。第六戒や第七戒がより人間にとって本質的な命や性や家庭に関わる戒めだったのに比べると、第八戒はより周辺的な事柄のように思えるかもしれませんが、実はそうではありません。

所有権が最も基本的な人権の一つであることからわかるように、第八戒は他の戒め同様、人間の存在や生活に関わる重要な戒めです。

「盗み」とは？

ウ大 142、ハイデル 110、ジュネーヴ 206

「盗み」とは、人が正当に持つことが許されている状態や物を不当に犯すことや奪うことです。けれども、誰から何をどのように盗むかによって、様々な「盗み」のかたちが現れます。

第八戒で禁じられている事柄にどんなものがあるか、少し身近な具体例で挙げておきましょう。万引き・キセル・カンニング・本や CD などの違法コピー・ドロボウ・高利貸し（消費者金融！）・詐欺・ごまかし・不正取引・不良品販売・食品等の偽装表示・誇大広告・低賃金労働・国や自治体による税金の無駄遣い・国際貿易における不公平、等々。それだけではありません。買いすぎ・食べすぎ・お金や時間の浪費・電気や水など資源の無駄遣い等も。あるいは、たとい実際の行動に出なくても心の中での生活に対する不満、他者の繁栄に対するねたみ、この世の財産に対する過度の執着や怠惰でさえも。

これくらいで十分でしょう。第八戒が私たちの日常生活といかに深く関わっているか。また、この戒めが今日いかに軽んじられているか、お分かりいただけたでしょう。大切なのは、

なぜ「盗み」がいけないのか。何が神のお望みになることなのかを正しく知ることです。

すべては神のもの

詩編 24:1、50:12、ヨブ 1:21、I テモ 7,8、箴言 23:10、I コリ 7:17、マタイ 25:14～30

「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの」です。人はみな裸で生まれ出で、みな裸でこの世を去って行きます。この世で与えられているものはすべて、“与えられている”ものであって、私たちが自分自身で初めから持っていたものなどありません。第八戒は、この真理を前提としています。

そして、この神が、御心のままに各々に必要なものすべてを備えてくださるのです。住む場所で あれ、家族であれ、財産であれ、生きるのに必要なものすべてを、一人一人にふさわしく分け与えてくださいます。すなわち、人間の所有はすべて 神の御心によるのであって、それを不当に奪うことは神の意思への侵害にあたるということです。

私たちはむしろ自分に与えられた分に満足し、それを感謝し、忠実に管理すべきです。それらを 放置したり無駄にしたりしてはいけません。他方で「忠実に管理する」とは、当たりさわりのない 消極的な生き方をすることでもありません。それは、御心に沿った用い方をすることであって、私たちが神の栄光と隣人の益のために賜物を積極的に用いることが正しい管理の仕方なのです。

正義と公平の神

出 21:37～22:12、ルカ 19:8、レビ 19:35、申命 25:13～16、エゼ 18:8、アモス 8:4～6、ミカ 6:10,11、ヤコブ 5:4～6

盗みは神の意思への侵害であると同時に、言うまでもなく、所有者に対する侵害でもあります。しかもそれは、物質的な損失を与える

のみならず、その人を精神的に苦しめる行為でさえあります。なぜなら、財産は人間の尊厳と自由の保証であり、その人と家族の人生を支えるべきものだからです。さらに、奪われたものがその人にとってどれくらい大切なものであるか、他の人にはわかりません。ですから聖書は、盗みに対して、何倍もの償いを要求するのです。それは盗まれた物に対する償い以上に、その人に心を返す行為だと言ってもよいでしょう。

神は正義と公平の神であられますから、あらゆる不正を厭われます。そもそも不正は、あたかも 神が見ていないかのごとくに犯される罪であり、不信仰からくることです。

神の公平さは、しかし、この世の富が皆に等しく配分されることでは必ずしもありません。一人一人の財と労働の実りが正義と愛を持って保たれ 互いに分かち合われることを、主は望んでおられるのです。

貧しい人への配慮

レビ 19:9,10、ルツ記、申命記 15:7～11、詩 146:6,7、イザヤ 3:14,15、58:6～10、マタイ 25:35～40

とりわけ貧しい人々に対する配慮を、主は殊のほか重んじられます。そもそも貧しい人々に分け与えることは必ずしも愛の行為ではありません。彼らが当然受けるべきものを正当に受け取っているかという、正義と公平の問題です。

実際、最も弱い部分に最もよく世の罪の影響は表れるものです。たとい生活が貧しかろうが、彼らもまた主のものですから、決してないがしろにされてはなりません。貧しい人にすることは、主に対してするのと同じなのです。彼らが尊ばれるかどうかは、神に対する私たちの信仰の実質が問われる試金石と言えますでしょう。

惜しみなく与える

Ⅱコリ 8:9、マタイ 10:8、11:5、ロマ 8:32、ルカ 6:30、38、Ⅰヨハ 3:17、18、マタイ 6:11、12、ヤコブ 2:15、16

キリスト者にとって、第八戒は、特別な意味を持っている戒めです。神の富を盗んでやまない私たちに神が惜しみなく御子をさえくださったことを、私たちは知っているからです。私たちはこの福音を、ただで受けて救われました。

したがって、この福音に感謝して生きる道は、惜しみなく与える生活です。神に対し、また隣人に対し、自分自身のすべてを献げて生きる生き方です。それでもなお、主の恵みは尽きることがありません。御自身の御子をさえ惜しまずにくださった方は、万物をも賜るお方だからです。

主は貧しい人のもとに福音を届けられました。しかもそれは、一人一人の具体的な必要を満たす形でもたらされました。「罪の赦し」をお与えくださる方は、「日用の糧」をも与えたもうお方なのです。ですから、私たちもまた、周囲や世界の貧しい人々に、言葉だけではなく具体的な形での助けを差し伸べましょう。それが、キリストの愛と恵みを帯びている者の務めです。

この世とかの世の富

創世 1:26、28、3:17～19、Ⅰコリ 10:31、ハイデル 111、ルカ 12:21、18:24～30、Ⅰテモ 6:9、10、エフェソ 4:28、マタイ 6:19～

21、24、黙示 21:26、14:13、22:5

神が造られた世界を治めることをゆだねられた人間は、労働を通して世界を保ちよりよくするために召されています。墮落によって呪われたものとなったこの世の富に、本来の輝きと喜びを回復することが、キリスト者の使命です。

今日の世界における経済活動は実に複雑であり、自分自身の労働の意味を見出すことは極めて困難かもしれません。それでもなお、基本的な信仰の姿勢は有効と信じます。

何よりも、労働によって産み出される富は、人が神と共に豊かに生きるためにあるのであって、富を産み出すために人が犠牲になってはならないことを覚えましょう。

第二に、この世の富を絶対視せず、むしろその富を隣人の利益の促進のため、貧しい人を助けるために用いましょう。この世の財の管理にその人の信仰が出るものです。失われる地上にではなく、天に宝を積む人は幸いです。終わりの日に、私たちは本来神のものであった賜物を主にお返しし、神がすべてのすべてとなります。同時に、栄光の御国は私たちのものとなり、私たちは永遠に主にお仕えするのです。

ディスカッションのために：

1. 上記の諸々の「盗み」が与える影響とは？
2. 貧しい人々への配慮としてできることは？
3. 天国の富への信仰が私たちに与える影響は？

聖書默想・説教展開例・分級展開例

テキスト

フィリピの信徒への手紙 3章12～4章1節

子どもと親のカテキズム 問39

1. 本国は天に

パウロは3章12節で、わたしはまだ得ていない、何とかして捕えようと努めていると語っています。彼がフィリピの信徒への手紙を書いた時期は、その生涯の晩年であったと言われています。つまり、彼は晩年に至って、生涯の終わりの時期にさしかかって、なお自分は得ていない、今なお追い求めることの途上にあると言うのです。

パウロは、ひたすらキリストを求めて生きた人です。ひたすらにキリストに仕え、キリストを宣べ伝え、キリストの御名が崇められることを願い、キリストを生きることを喜びとした人です。そのパウロが晩年に至って、わたしはなお得ていないと言う。わたしたちは、救いを得るとは何とむずかしいことかと感じてしまうかもしれません。

けれどもパウロは決してここで、救いの完成に至ることの困難さを言い立てているわけではありません。そうではなくキリスト教信仰の本質から言って、キリスト教信仰がもともと持っている性格からして、パウロがこのように言うのは当然のことなのです。

なぜなら、キリスト者の目標は本国である天にあるからです(3章20節)。地上の歩みのどこかに目標があるというのなら、わたしはもうすでにそれを得たということはあるでしょう。地上的な目標、たとえば受験に合格することや、会社に就職することや、家庭を持つことや、何かの事業をなしとげることであれば、それが達成された時点で追い求めることは終わります。

けれども救いの完成は、そもそもこの地上において成し遂げられるものではありません。地上のある時点で救いは完成し、神が与えてくださる賞を得て、その先の残りの時間は安閑と暮らすというようなものではないのです。聖書はそのような救いというものを説いていません。キリスト者の本国は天に、この地上を突き抜けたところにあります。そうである以上、キリスト者の歩みはおの

ずから、ひたすら追い求めるというありかたにならざるを得ないのです(13,14節)。

イエス・キリストはわたしたちのために十字架にかかって死なれ、わたしたちのためによみがえられました。それゆえわたしたちも、死を超える復活の命を生きています。この復活の命、この世を超えた永遠の命を見据えるまなざしのもとでこそ、わたしたちは真に確かな人生の歩みを得ることができるのです。

パウロがここで示している人生観は、実に驚くべきものであると言えるでしょう。人生の最後が死で終わるとすれば、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつひたすら走るなどという姿勢は生まれようがありません。

ではなぜ、彼のような人生の態度、姿勢が生まれるのでしょうか。それは神がお与えになる賞があるからです。彼が得ようとしているものは何でしょうか。14節の言葉で言えば「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞」です。また10節の言葉で言えば、「死者の中からの復活」ということになるでしょう。別の言葉で言えば、救いの完成ということにもなるでしょう。

キリストの命、永遠の命、キリストにある救いの完成という素晴らしいご褒美が天に備えられている。それゆえ、キリスト者は地上にあるかぎりたゆみなく、失望することもなく、この賞を得るためにひたすら走るのです。

そのことを思えば、わたしたちが復活のキリストを信じ、復活のキリストの命に生かされて生きていることがいかに決定的なことであるのかがわかってきます。人生に目標があるということ、その目標が(地上のある時点で達成できる、すなわちやがては消えてしまう、過ぎ去ってしまう、そういう刹那的な目標ではなく)永遠の射程をもつものであること、そのことこそがわたしたちの人生に、真に生きる意味をもたらすのです。

2. キリストに似せられる

キリスト者が救いの完成に至る、人生の目標に到達する、その道のりとはキリストにあやかっていく道のりです。聖化の道です。聖化とはキリスト者がキリストのまどわれた人間性にみずからも似せられていくことを言います。これがわたしたちの希望です (21節)。

では、どのような面でキリストに似せられていくのでしょうか。キリストの苦難、死、そして復活にあやかることにおいてです。キリストの苦しみと死をなぞることによって、わたしたちは死者の中からの復活に達するのです。救いの完成という目標に到達し、義の栄冠を得るのです。

キリストは体をもってこの地上を生きられ、その地上の体において死なれ、そして体をもって復活されました。そのキリストの体とは仮の宿のようなものではなく、幻のようなものでもありませんでした。生ける、命をもつ、現実の体でした。

そしてキリストはその体において、人間の苦しみと死を担ってくださいました。わたしたちを罪から解放し、わたしたちの死を減ばしてくださるために十字架に死なれ、三日目に復活されたのです。そのような意味でキリストは苦しみを通られ、死を通られて、栄光に入られたのです。

教会とキリスト者の歩みも、この点においてキリストに似るのです (10, 11節)。これがわたしたちのたどるべき道のり、救いを受けた者が救いの完成という目標を目指して走るべき道です。

3. 永遠の命を生きる

「天におられるイエスさまは、再び地上に生まれ、最後の審判をし、天と地とを新しくし、神さまの国を完成されます。私たちは、再び来られるイエスさまを待ち望み、その日に備えつつ、希望に満ちて歌いながら御国をめざして歩みます」

(「子どもと親のカテキズム」問39)。

キリスト者の目標は復活の命、永遠の命を得ることです。そして永遠の命とは、キリストに結ばれた命です。キリストを通して父なる神と結ばれた命です。つまり、永遠の命とは神の命です。

では、神の命とはどのような命でしょうか。愛において生きる命です。なぜなら、神は愛だからです。

そのことは何を意味しているのでしょうか。目標を目指してひたすら走るキリスト者の歩みは、愛によって歩み、愛によって生きる命であるということです。

この世はなお罪の世です。それゆえ、世を愛することには苦しみが伴います。キリストに従う道は、一方では苦難の道です。けれども、苦しみや試練、困難に負けずに世を愛するのです。世の苦しみ、世の痛み、世の惨めさに寄り添い、これを自分の身に引き受けるのです。なお暗闇に閉ざされた世の人びとを、それにもかかわらず愛し、世の人びとのために懸命に執り成して生きる。どんなにこの世の暗闇が深いように見えても、もはやこの世に望みがないかのように映っても、それでもキリストの体なる教会は世を愛し、世が与える苦しみを引き受け、世のために執り成すのです。そのようにして、世に光をかかげるのです。

それが教会と、キリスト者一人一人のこの世における使命です。再臨のキリストを待ち望みつつ、わたしたちはこの使命に生きるのです。

キリスト者たちはこの使命をたったひとりで担うわけではありません。教会に生きる者たちは、ともに苦しみを分かち合い、重荷を担い合い、祈り合い、執り成し合いつつ、この使命をともに担うのです。聖徒の交わりの祝福の中で、目標を目指してひたすらに走るのです。 (木下裕也)

テキスト

フィリピの信徒への手紙 3章12節～4章1節

子どもと親のカテキズム 問39

(単元のねらい)

キリスト者の幸いは、人生の目的をはっきりと示されているところにある。ゴールがはっきりしているからこそ、希望と確信をもって信仰の道を走りとおすことができるのである。キリストにあってすばらしい目的が与えられていることをあらためて感謝したい。キリストの再臨を待ち望みつつ神をあがめ、キリストに従って生きる信仰を新しくしたい。

天国——人生のゴール

「子どもと親のカテキズム」問39は、このように尋ねます「救われて神さまの子どもとされた私たちは、どこをめざして歩むのですか」。

人生の目標、人生のゴールを尋ねているのですね。わたしたちの人生のゴールはどこにあるのでしょうか。

それは地上のどこか、ではありません。もちろん地上の歩みにあっても、わたしたちはいろいろな目標を立てます。入学試験に合格することや、結婚することや、何か大きな目標をなしとげること、そうしたこともやりがいのある目標となり得ます。けれどもそうした目標は、それが達成されたならもうなくなってしまいます。その先、わたしたちは何を目標にしたらよいのでしょうか。もっと大きな目標、まさに人生を賭けるに価する目標はないのでしょうか。

あるのです。今朝のフィリピの信徒への手紙3章20節で使徒パウロは言います「わたしたちの本国は天にあります」。

わたしたちの人生の目標は地上に置かれているわけではありません。わたしたちの本国、本当の住まいである天国に入れていただくことです。地上の人生のすべての道のりは、この目標のためにあるのです。

だからパウロは言います「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」(12節)。「なすべきこと

はただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」(13,14節)。

イエスさまを信じて生きる人には、天国というすばらしい場所が備えられています。マラソンの選手がわき目もふらず、ゴールを目指してひたすら走るように、わたしたちも天国を目指してひたすら走るのです。

そこにはすばらしい賞が用意されています。この賞を得ることがわたしたちの人生の目的です。どのような賞でしょうか。パウロは言います「キリストは、万物を支配下に置くことさできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」(21節)。

わたしたちが人生の目標に到達する、その道のりはイエスさまにあやかる道筋だということです。イエスさまを信じて生きる者は、イエスさまに似せられていくのです。わたしたちの体がイエスさまに似せられていく。わたしたちの存在が、小さなキリストともいうべきものになっていく。そしてついには、イエスさまは「わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる」のです。

すばらしいことです。神さまが恵みによって、わたしたちの身になしとげてくださることです。

わたしたちはこのようにすばらしい人生の目標を与えられています。そのことに感謝したいのです。

わたしたちがイエスさまに似せられていく道とは、どのような道でしょうか。それは、愛の人につくりかえられていく道です。なぜなら、神さまは愛であられるからです。

イエスさまは地上の生涯において、愛の道を歩み通されました。罪人を愛し、生かすことのために生き抜かれました。最後にはわたしたちの罪を滅ぼし、わたしたちに永遠の命を与えるため、十字架に死なれました。十字架は愛のきわみです。ここに神さまの愛があります。そしてイエスさまを信じるわたしたちも神さまを愛し、隣り人を愛する愛の人に変えていただけるのです。まことの愛のお方であられるイエスさまに似せられていくのです。

この道には苦しみや悩みも伴います。イエスさまもこの世で苦しみや悩みを味わわれました。なぜなら、天国はまだ実現していないからです。この世はなお罪の世だからです。

けれどもイエスさまの道を歩むわたしたちは、この世の苦しみや試練、困難に負けずにこの世を愛します。なお暗闇に閉ざされた世のただ中に、イエスさまの光をかかげます。死のにおいに満ちた世に、イエスさまの命の香りをもたらすのです。どんなにこの世の暗闇が深いように見えるときにも、わたしたちは希望を失いません。なぜなら、

終わりの日にイエスさまが再び世に来られて、正しい審判をなし、天国を完成させてくださることを信じているからです。

「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」(20,21節)。

「天におられるイエスさまは、再び地上に来られ、最後の審判をし、天と地とを新しくし、神さまの国を完成されます。私たちは、再び来られるイエスさまを待ち望み、その日に備えつつ、希望に満ちて歌いながら御国をめざして歩みます」(「子どもと親のカテキズム」問39)。

わたしたちがイエスさまを信じ、イエスさまに従って生き抜いたことは、最後の審判の日にごそ明らかになります。その日わたしたちが地上で味わったすべての悲しみ、苦しみは慰められ、すべての涙はぬぐわれ、大きな喜びが与えられます。その日にごそわたしたちはゴールに到達します。わたしたちの体はイエスさまの栄光の体に変えられるのです。

このことは確かです。それゆえわたしたちは、どのような時にもイエスさまの道を歩みます。天国の完成の日を待ち望み、歌いつつ歩むのです。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句]

フィリピの信徒への手紙 3章20節

しかし、わたしたちの本国は天にあります。

フィリピの信徒への手紙 3章12～4章1節を読みましょう。

1. 13せつでパウロが「なすべきことはただ一つ」としていることは何ですか？
2. キリストのじゅうじかにはんたいしている人たちはどうなりますか？
3. その人たちはどのようにしていますか？
4. わたしたちのかえるべきところ、ふるさとはどこにありますか？
5. わたしたちは何をまっていますか？
6. キリストはわたしたちのよごれた体をどのようにしてくれますか？
7. 生きていくことのマラソンをはしりおえたときにゴールでかみさまがあたえてくださる賞は何だともいますか？

フィリピの信徒への手紙 3章12～4章1節を読みましょう。

1. 13節でパウロが「なすべきことはただ一つ」と言っていることは何ですか？

2. キリストの十字架に敵対している人たちの行き着く先は何ですか？

3. 彼らの態度はどのようなものですか？

4. 私たちの本国、ふるさとはどこにありますか？

5. 私たちは何を待っていますか？

6. キリストは私たちの卑しい体をどのように変えてくださいますか？

7. 私たちがこの世の人生を走り終えたときにゴールで与えていただく賞は何だと思いますか？ 7.

テキスト テサロニケの信徒への手紙一 5章23, 24節
 子どもと親のカテキズム 問40
 参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問37

問40 私たちは死んだあと、どうなりますか。

答 死んで終わりではありません。死んだあと、私たちのたましいは完全にきよめられ、天におられるイエスさまのもとに引き上げられます。体はイエスさまに結び合わされたまま墓の中で休みます。

〈聖書テキストの解説〉

テサロニケの信徒への手紙は、パウロが第二回宣教旅行の時に立ち寄ったテサロニケの町で建てた教会にあてた手紙です。その時の様子は使徒言行録17章1～9節に記されています。テサロニケを離れたパウロは、再訪の思いを断ち切れず、テモテを派遣して教会を励まし、その様子を報告させました。テモテの報告はパウロを安心させ励ますものでありましたが、幾つかの信仰上の課題ももたらされました。それらに応えるために記されたのがこのテサロニケの信徒への手紙です（参照2:17～3:10）。

パウロはこの手紙で幾つかの課題に答えていますが、その中でも特徴的なのは、終末と再臨の問題についての教えです。この手紙が記された時代は新約聖書の諸文書の中でも最も早い時期であり、信仰者が生きている間にキリストが再臨し、世が終わりを迎えるという期待が強い時代でした。キリストの再臨を迎える前に死んでしまったクリスチャンについて、どう理解したら良いのか悩んでいたのです。パウロは終わりの日について幾つかの事を教えますが、その根本にあるのは希望を失わず平安の中にあること。しかし忘れることなく備えることでした。なぜなら、主は平和の神、真実な方であり、私たちを完全なものとしてくださる事を約束してくださっているからです。信仰者の生涯の終わりは、生きて再臨を見ることができなかったという挫折ではなく、真実な神様によって非のうちどころのない者としていただけの時、すなわち完成の時であるのです。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

「まことの神さまを知り、神さまと共に歩む道」（問6）の最後は、私たちそれぞれの人生の終わりについての理解です。問40では人の死そのものについて扱っています。

現代の物質主義の世界観では、「死は私たちの存在の終焉である」と考えがちです。しかしそのような人生観は、生きている間に何がなんでも満たされなくてはならないという「成功至上主義」につながり、必然的に失敗や挫折を受けとめることができなくなります。また、私たちの人生や存在そのものが無に帰してしまうという人生観は、全てのことに価値を見出すことができない虚無主義に陥ったり、今この瞬間の幸福だけを追い求める刹那主義に陥ってしまいます。永遠の神様が私たちを受けとめてくださり、完全に清められる。死が終わりではなく、神様と共に歩む生涯が完全に実現する時として理解されるならば、私たちの今の人生も揺るぎない希望に満ちたものとなるのです。

〈黙想・子どもたちに対して〉

死生観について語ったり、死そのものについて語ることは難しいことです。実感の伴わない観念だけの言葉では聞く子どもたちに届きません。しかし、あまり生々しい話題を取り上げる訳にはいきません。特に近親者等を失った経験を持つ子どもがいる時は、逆に表現を抽象的にするなどの注意をしなければなりません。

また、死が終わりではない事を説明する時には、日本的な生まれ変わりや、ゲーム等で見られるよ

うな「リセット」と混同されないように注意しなければなりません。そのような考えは、人生を何度もくり返しやり直せるものであると考え、結果的に今の私たちの命を軽視する傾向を生んでしまいます。聖書はむしろ私たちの今のこの「生」が、かけがえのない一回きりのものである事を教えています。そのような生の大切さを伝えることができるよう注意しなければならないでしょう。

旧約聖書の中には、死者は神様を呼ばず、賛美や感謝を献げることもない（詩編6:6、115:17等）として、生きている者に賛美と主を呼ぶ事を求める箇所があります。一方、特に新約聖書では、死者が神様の御名を賛美する場面が描写されますので、生きている者だけが礼拝をすることができるという訳ではありません（黙示録7:9～17等）。その一方で、新約聖書でも死後になってからいくら救いを求めても、救われることがないことが描写されています（ルカ16:26）。救い主を信じ、その名を呼ぶ事ができるのは生死と関わらないのですが、それによって永遠の命を受けるのは、今地上に生きている者だけに許された特権であると言えるでしょう。死は私たちの存在の終わりではありませんが、私たちが救われるためのチャンスは生きている者だけに許されているのです。

この場合もまた私たちは、子どもであってもすぐに「では、私たちの愛する（既に亡くなった未信仰の）親族や知人は、滅びてしまつて命に至る希望は全く絶たれてしまったのか」と疑問を感じる事でしょう。注意すべき事が二つあります。第一は、このようなカテキズムは、救われた者につ

いて語るものであるということです。今救われている私たちは、命ある間に主に招かれ、主を賛美することが許された。その幸いを感謝して告白するのであって、そうでない人について積極的に語るものではありません。罪に対する裁きと罰の悲惨さを語る事も大切な事です。特に信仰の浅い、また理解力の薄い子どもたちに対して、裁きを一方的に恐ろしい脅しとして語る事は、つまずきを生む元です。相応しい時に相応しい形で語るように心がけ、むしろ救われた者の喜びを積極的に語るように心がけましょう。第二に、地上で信仰を持つ持たないに関わらず、人が死を迎えた後の事については、全面的に神様に委ねられます。愛と正義と公正のお方である主が、信じる者と同様に信じない者も御心のままに扱ってくださる事を私たちは信じています。私たちは私たちの死後のありようについては、神様の裁きに委ねるべきであり、そこから平安をいただくべきです。全てを自分たちの理解の枠内で把握するのではなく、自分たちの及ばない所については、神様に委ねる事で平安を得る。私たち自身についても、周りの全ての人についても、神様が支配してくださる事に委ねて平安を得ることができればと思います。

子どもたちそれぞれの状況やその応答を正確に把握し予想するのは不可能ですが、子どもたちがつまずく事なく、救いの恵みを受け、今ある自分たちの歩みを信仰をもって歩む事に喜びを感じることができるよう語りかけることができるように願って参りたいと思います。（長田詠喜）

テキスト テサロニケの信徒への手紙一 5章23, 24節
子どもと親のカテキズム 問40

〔単元のねらい〕

私たちの日々が、終わりの日に完全な者にさせていただけるという希望によって生き活きとした恵みに満ちたかけがえのない者となる事を自覚できるように。そのように私たちを導いてくださる神様に感謝と賛美を献げ、委ねて歩むことができようにながす。

生きている時も死ぬ時もイエス様と一緒に

テサロニケの教会の人びとの心配

今日読みましたのは、テサロニケの信徒への手紙という手紙の一部分です。この手紙は、イエスさまの弟子の一人、パウロという人が書いた手紙です。パウロは、イエスさまのことを沢山の人たちに伝えるために、さまざまな町を旅して回っていました。色々な町にいったらイエスさまの事をお話しし、みんなにイエスさまを信じるようにと伝えておりました。その町にイエスさまを信じる人たちが生まれて来ますと、その人たちを集めて教会を作り、教会が出来るとまた別の町へと出かけていくのでした。もちろん、町を離れたらそれでおしまいという訳ではありません。別の町に行った後もパウロは教会の人たちと連絡を取ったり、相談に乗ったりしておりました。もちろん、今のようにメールを送ったり、電話をしたりということが出来る訳ではありません。連絡を取ろうと思えば手紙を書かなければなりませんし、手紙を届けようと思うなら、誰かがそれを届けなければなりません。パウロと一緒に旅をしている仲間の宣教者たちや、教会の人たちがパウロと教会の間を往復し、教会の様子を伝えたり、手紙を受け渡したりしておりました。

テサロニケの教会の人たちだけでなく、どの教会も色々な事で困っていたり、分からなくなってしまうたりしていました。教会の仲間で仲良くしている筈の人たちが喧嘩になってしまったり、イエスさまについて色々なふうに考える人が出て来て、何が本当なのか分からなくなってしまうたり、

時には色々な失敗もありました。パウロはそれらの悩みに丁寧に答え、教会のために祈っていました。

テサロニケの教会の人たちが、悩んでいたのは、亡くなった人たちの事でした。家族や大切な人が亡くなるのは哀しい事です。けれど、テサロニケの教会の人たちは、もっと難しいことで悩んでいました。死んでしまったら、それでおしまいなんじゃないか、天国に行けないんじゃないか、せっかく生きている間一生懸命頑張ってきたのに、全部無駄に終わってしまったのではないか。そんな事が心配だったので。

人は死んだらどうなるのか

そこでパウロは教会の人びとに手紙を書きます。そして彼らが心配している事に答えます。ここでパウロがテサロニケの教会の人たちに教えている事は、私たちも大事な事として覚えておく必要がある事です。例えば、私たち人間は死んで終わってしまったら、いなくなったり消えてしまうという訳ではない事、イエスさまを信じている人たちはイエスさまが甦ったように復活する事等です。私たちも時々、自分が死んだらどうになってしまうのか心配になることがあります。また自分の知っている人たちが亡くなってどうになってしまうのか心配になることがあります。けれども、パウロが教えているように、私たちは、生きている時だけでなく、死んだあとでもイエスさまと一緒にいることができるので、何も心配しなくて良いのです。

最後に完成させてもらえる希望

そんな手紙の最後に、パウロは教会の人びとのために一つのお祈りを書いています。この祈りも、とても大切なことを私たちに教えてくれます。

「平和の神御自身があなたがたを全く聖なる者としてくださいますように」「霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、……非のうちどころのないものとしてくださいますように」こんなふうに祈るのは、テサロニケの教会の人たちが、完全に聖なる者ではなく、欠けたところや非のうちどころのある人びとだったからでしょう。特にテサロニケの教会の人たちがダメな人たちばかりだったという訳ではありません。私たちはみんな、完璧な訳ではありません。失敗もします。叱られる事も沢山あります。喧嘩をしたり、人の悪口を言ってしまったりということもあります。イエスさまを信じているからと言って、私たちがなんでも全部「お利口」にできる訳ではありません。神様を信じる私たちを神様は毎日毎日神様の良い子どもにしてください。それでも私たちは、失敗したり間違ったりしてしまうのです。けれども神様は真実なお方ですから、私たちを神様の子どもにくださるといふ約束を必ず守ってください。必ず私たちを素晴らしい子どもにくださいます。けれどもそれは、まだ今ではありません。私たちが天国のイエスさまの所に行く時、その時私たちは、完全にきよめられ、天国にふさわしい人としていただけるのです。

ですから、私たちは死ぬ事がちっとも怖くありません。何も心配することはありません。私たちが生きている時もいつも私たちと一緒にいて私たちを守ってくださいているイエスさまが、私たちが死ぬ時も、私たちと一緒に居て、私たちを守ってくださいるのです。そして、私たちを天国の神様のところに移し、私たちを素晴らしい百点満点の私たちにくださるのです。この約束を私たちは信じて、神様と一緒にいられる日を楽しみ

に待つことにいたしましょう。

希望を持って生きる喜び

ところでもう一つ覚えておいてもらいたい大事なことがあります。天国に行く時には何も心配なくていい。むしろその時に欠けない素晴らしい人になれるなんて事を言うと、「じゃあ、早く死んじゃえば良いじゃん」なんて事を思う人がいるかも知れません。けれどもそれは決してそんなことはありません。これからみんなは、大きくなっていく途中で、お父さんやお母さんや学校の先生に叱られたり、兄弟や大事な友達と喧嘩をしてしまったり、大事な大事なものが台無しになってしまったり、辛くて辛くてもう死んでしまった方がいいんじゃないかと思うような気持ちになる時があるかもしれません。死んだら天国に行ける、素晴らしい人になれるんだったら、早く死んだ方が得じゃないかと思うこともあるかもしれません。けれども、これは決してそんなことではないのです。神様は私たちに命を与えてくださいました。私たちがみんなと仲良く幸せに生きていくようにと願ってくださいます。そのために私たちと共にいてくださいます。そして、私たちは今生きているからこそ、こうやって神様を信じて、神様を礼拝して、神様の救いをいただけるのです。神様は私たちに命を与えてくださり、私たちが成長し、神様を信じて生きていくことができるようにしてくださいました。そしていつかは私たちを神様のおられる天国へと導いてくださいます。それがいつであるかは誰も知りません。神様しか知りません。けれども、その日まで必ず神様が私たちと一緒にいてくださって、私たちに必要なものを全部与えてくださいます。だから私たちは、その神様を信頼して、やがて与えられる天国の喜びを待つのです。今どんなに辛くても苦しくても、必ずその日に喜びをいただけるのですから、それまで楽しみに、しっかりと待てるようにしたいと思います。(長田詠喜)

[今週の暗唱聖句] テサロニケの信徒への手紙一 5章23節 a

どうか、平和の神御自身が、
あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。

カテキズム問40、テサロニケの信徒への手紙一 5章23, 24節を読みましょう。

1. イエスさまはじゅうじかでしなれたあとどのようにになりましたか？

2. いまイエスさまはどこにおられますか？

3. ではわたしたちはしんだらどうなりますか？

4. かみさまはイエスキリストがこられるとき、わたしたちをどのようにしてくださいますか？

カテキズム問40、テサロニケの信徒への手紙一 5章23, 24節を読みましょう。

1. イエス様は十字架上で死なれた後どうになりましたか？

2. 今イエス様はどこにおられますか？

3. では私たちは死んだら終わりですか？死んだ後どうなりますか？

4. 神さまはイエスキリストが来られる時、私たちをどのようにしてくださいますか？

テキスト	イザヤ書 65章17～25節
子どもと親のカテキズム	問41
参考教理問答	ウェストミンスター大教理問答 問87, 90 ウェストミンスター小教理問答 問38

問41 体は墓の中で永遠に休み続けるのですか。

答 いいえ、ちがいます。イエスさまが再び来られる時、私たちの体もよみがえらされ、きよめられたたましいとひとつにされて、イエスさまの栄光の体と同じ姿に変えられます。私たちは、完成された御国で、完全な祝福を受け、永遠に神さまをほめたたえ、神さまを喜ぶのです。

『子どもと親のカテキズム』の解説

問39より、終わりのこと（終末論）について取り上げられています。当問答の内容は、ウェストミンスター小教理問答問38で扱われる項目に相当しますが、ウェストミンスター小教理が信仰者個人の復活にのみ焦点が当てられているのに対して、復活の祝福を「完成された御国」で受けることが取り上げられており、個人的終末論と一般的終末論が結び付けられています。このような記述は、日本キリスト改革派教会の創立六十周年記念宣言である「終末の希望についての信仰の宣言」で告白された内容を反映したもので、当カテキズムの特徴であると言えます。

【復活】

肉体の死の後、私たち信仰者の魂は直ちに天におられるキリストのもとに迎え入れられ、体は墓の中で休みます（問40）。しかし、やがて再び天から主イエス・キリストが救い主として世に来られる時（再臨）、すなわち「終わりの日」に、私たちは復活させられます（ヨハネ6:39）。信仰者の復活は、キリストに結ばれて死んだ者たちの復活であり（テサロニケ一4:16）、それゆえに、以前の卑しい体からキリストの栄光ある体と同じ形に変えられることにもなります（フィリピ3:21）。神は、キリストを復活させた力によって私たちをも復活させてくださるので（コリント一6:14）、私たちの体は、これまでの「朽ちるもの」から「朽ちないもの」に、「卑しいもの」から「輝かしいもの」に、「弱いもの」から「力強いもの」に

復活させられます（コリント一15:42, 43）。

【永遠の祝福】

キリストが再び世に来られる時、天と地を新しくし、神の国を完成されます（問39）。復活させられた私たちが祝福を受けるのは、この「完成された御国」においてです。そこでは、神が人と共に住んでくださり（黙示録21:3）、太陽の光も要らないほどに、神の栄光が民を照らします（黙示22:5）。そこは、神が「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」（黙示録21:4）、完全な祝福の場です。

イザヤは、主が「新しい天と新しい地を創造」するところで、「代々としえに喜び楽しみ、喜び踊る」ように、主が私たちに命じておられることを告げています（イザヤ65:17, 18）。ですから「完成された御国」で、私たちは永遠に神をほめたたえ、神を喜ぶのです。すなわち、「人の主な目的」（ウ小教理問1）の完全な達成です。救いを大声でたたえる「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆」（黙示7:9, 10）による賛美に、私たちも加わることになります。

〈聖書テキストの解説〉

【KEY1 聖書本文を語る】

〔STEP1〕 聖書本文を読む。

イザヤ65:17～25を繰り返して読む。

〔STEP2〕 この個所のテーマは何か？

主は、やがて新しい天と新しい地を創造し、喜びで満たし、苦しみを取り除いて、完全な平和を与えられる（ヨハネは、最後の審判の後に、「新しい天と新しい地」の幻を見たことを記している（黙示録21:1）ので、ここに記された内容は、終わりの日に実現する神の国の様子と理解することができる）。

〔STEP3〕それをどのように展開しているか？

「新しい天と新しい地」は、とこしえに喜び楽しむ場となる。泣く声、叫ぶ声がその中に響くことはなく、自分たちが建てたもの・育てたものを他の人びとに奪われるという理不尽なこともない。死の恐怖は遠のき、主がすぐに呼びかけに答えてくださるところとなる。肉食の動物が他の動物に危害を及ぼさないほどに、完全な平和が訪れる。

〔KEY2 神の福音を語る〕

〔STEP1〕この個所で神はご自身について何を表されたか？

神は、やがて新しい天と新しい地を創造され、ご自身の民にそこで喜び楽しむことを命じられる。神は、新しいエルサレムとご自身の民を喜び踊るものとして創造し、神ご自身が彼らを楽しむ。主は、人びとの死を遠ざけて祝福し、彼らの呼びかけ・語りかけに直ちに答えられる。主は、ご自身の聖なる山のどこにおいても、完全な平和を実現される。

〔STEP2〕今回の個所の前後では、神について何と言っているか？

65章から、主は逆らう者たちにも手を差し伸べてきたことを語られる。しかし、主はついに報いを与えられる。ただし、すべてを滅ぼすのではなく、主の僕らを残し、彼らには祝福を与えられる。17節以下の祝福は、主に逆らう者たちの間で苦難を経験してきた主の僕への約束である。

66章もまた、主に従わない者たちに主が報いを与えられることが語られ、主に従ってきた者た

ちに喜びと慰めを与えることが約束される。22節では、再び主が創造される「新しい天と新しい地」に言及される。

〔STEP3〕聖書全体を通しての神の働きに、この個所はどのように関係しているか？

神が創造された世界において、神に従わない者たちが繁栄し、神に従う者たちが苦しみを経験している。しかし、そのような状況は永遠に続くものではなく、やがて主は新しい天と新しい地を創造し、ご自身の民に完全な祝福を与えられる。

〔KEY3 子ども達の信仰と生活のために語る〕

〔STEP1〕この個所を最初に読んだ当時の人びとの必要は何だったか？

神に従わない者たちが力を持ち、神に従う者たちが苦しみを経験していた。そのような中でなお神に従い続けるために、希望を必要としていた。

〔STEP2〕私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

イエス様を信じているために、あるいは日曜学校に通っているがゆえに経験している困難があるかもしれない。また、家庭や学校で、深刻な困難を抱えていたり、身体的・精神的な困難を抱えていたりする子どもたちもいることだろう。そのような子どもたちが、どこに希望を見いだすことができるのか。

〔STEP3〕この聖書個所の「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

主に従っているにもかかわらず、さまざまな困難を抱えてしまうことは、主に従う民の歴史の中で、決して初めてのことでない。多くの主の民が困難の中を歩いたが、主はそのようなご自身の民のために、希望を与えてくださっている。それは、やがて主が創造される新しい天と新しい地の約束である。そこでは、喜びと楽しみが満ちあふれ、もはや悲しみや悲慘もなく、主が私たちの呼びかけに直ちに答えてくださり、完全な平和が実現する。
(大西良嗣)

テキスト イザヤ書 65章17～25節
子どもと親のカテキズム 問41

〔単元のねらい〕

「子どもと親のカテキズム」問41は、墓の中で休んでいた体の復活について問うている。それに対する答には、前半でキリストの再臨の日に肉体がキリストの栄光の体によみがえらされることを、後半で復活した私たちが神の国で祝福を受け、神をほめたたえることが述べられている。聖書テキストは、新しい天と新しい地での祝福について述べているところであるため、今回の説教では答の後半に記された神の国での祝福に焦点が置かれている。

完全な祝福

人は、みんな死にます。死んだ後、どうなるのかということは、先週、お話を聞きました。

それでも、まだ何だか、死ぬのは怖いと思っている人もいるかもしれないね。つらいことばかりあって、嫌なことばかりされて死ぬのだったら、何だか生きている意味がないのではないかな？ なんて考えたことがある人もいるかもしれません。

今日のお話は、死んでから、最終的にどうなるのか！ というお話です。

いつなのかは分からないけれど、必ずイエスさまがもう一度この世界に来られます。それは、私たちが死ぬ前かもしれません。死んでしまった後かもしれません。イエスさまが来られる時、もし私たちがすでに死んでいたら、復活させられます。死んだ私たちの体は、イエスさまに結ばれたままお墓の中で休んでいるのですが、その体が復活させられて、天のイエスさまのもとへ挙げられていた魂と一つにされます。そして、イエスさまの栄光の体と同じ、素晴らしい体に変えられます。

そのような新しい体に変えられて、何をしたらいいかな？

神さまは、私たちの体を新しくされるだけではありません。この世界をも新しくされます。さっき読んだイザヤ書65章7節には、「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する」と書かれてい

ました。神さまは、新しくされた私たちが住む「新しい天と新しい地」を創造してくださるのだね。

そこで何をしたらいいのかな？ 18節「代々としえに喜び楽しみ、喜び踊れ」って書いてあるよ。永遠に喜んで楽しんで、喜び踊りなさいってことだね。とっても楽しそうだね。イエスさまの栄光の体と同じ体に新しくされるということは、そんなふうに喜び楽しむものとして創造しなおされるということでもあるのだね。神さまが与えてくださった栄光の体を存分に使って、踊って喜びを表すようだね。神さまも、私たちが喜ぶのを喜び楽しまれるそうですよ（19節）。

私たちは、この世で生きている間、楽しいことばかり経験するわけではありません。悲しくて、泣きたいこともあります。イヤでイヤでたまらなくて、叫びたくなることもあります。だけど、「新しい天と新しい地」では、そういうふうに悲しくて「泣く声」や、イヤでイヤでたまらなくて「叫ぶ声」なんて、ぜんぜんしないのです。悲しみや嫌なことが、完全に無くなるのだね。

もし、誰かが大けがをしまったり、重い病気になるってしまったり、そうして死んでしまったりしたら、とても悲しくなると思います。ある国では、生まれたばかりの赤ちゃんがたくさん死んでしまうということが、新聞に書かれていました。そんなふうに赤ちゃんが死んでしまったり、お父

さんもお母さんも、みんなみたいなお兄さんお姉さんも、とても悲しくなると思います。けれども、「新しい天と新しい地」では、そういう心配はいらないのです。赤ちゃんが死んでしまうのを怖がる必要もなくなります (20, 23節)。

今、私たちは、神さまにお祈りをしても、神さまが答えてくださる声を直接聞くことはできません。神さまがお祈りに応えてくださるかどうかが、かなり長いこと待たなければならぬこともあります。けれども、「新しい天と新しい地」では、私たちが神さまに呼びかけるより前に、神さまが答えてくださるのだって！ 私たちがまだ言い終わる前から、神さまはしっかり聞き届けてくださるのだって！ 驚いてしまうね。本当に、神さまが近くにいてくださって、私たちが何か言おうとしている様子をじっくり見てくださっているみたいな感じだね (24節)。

そして、こんなことも書いてあります。何と、狼と小羊と一緒に草を食べるのだって！ ライオ

ンが牛みたいにわらを食べるのだって！すごいことだね。そんなの見たことある？ 狼もライオンも、他の動物を食べたりしないのだね。「新しい天と新しい地」では、だれも他の人や他の動物を傷つけたりしない完全な平和になるのだね (25節)。

この「新しい天と新しい地」は、「完成された御国」です。神さまのご支配が、完全になされているので、本当に素晴らしいところです。終わりの日に復活した私たちは、そこで喜び楽しめます。神さまが与えてくださった素晴らしい体を感じ、喜びます。「新しい天と新しい地」を心から楽しめます。

今、生きているこの世界では、辛いことがありますが、イエスさまが救いを実現してくださったので、最終的に行きつくのは、この「新しい天と新しい地」だということがハッキリしています。ですから、私たちは、「完成された御国」で、イエスさまの救いを賛美する日を楽しみにしながら、歩んでいきたいと思えます (大西良嗣)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 6章40節

わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、
わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。

カテキズム問41、イザヤ書 65章17～25節を読みましょう。

1. イエスさまがふたたびこられるとき、わたしたちの体はどうなりますか？

2. そのときこのせかいはどうなりますか？

3. わたしたちはこのせかいで何をしますか？

4. わたしたちがよびかけるよりも先にこたえてくださるのはどなたですか？

5. あたらしい天、あたらしい地でのどうぶつたちのようすをおしえてください。

6. このあたらしい天とあたらしい地とはカテキズムのことばではどのようなところとかかれていますか？

7. あなたはこのあたらしい天とあたらしい地へいきたいですか？

カテキズム問41、イザヤ書 65章17～25節を読みましょう。

1. イエス様が再び来られる時私たちの体はどうなりますか？

2. そのときこの世界はどうなりますか？

3. 私たちはこの世界で何をしますか？

4. 私たちが呼びかけるより先に答えてくださり、そして私たちが語りかけている間に聞き届けてくださるのはどなたですか？

5. 新しい天、新しい地での動物たちの様子を教えてください。

6. この新しい天と新しい地とはカテキズムの言葉ではどのようなところですか、何といますか？

7. あなたはこの新しい天と新しい地へ行きたいですか？

テキスト ローマの信徒への手紙 12章4～8節
子どもと親のカテキズム 問42

〈教会と共に歩む道を強調する理由〉

本日から第二部に入ります。本カテキズムの一つの決定的な特徴は、教会論の強調にあります。

そもそもキリスト教信仰とは、教会（形成）的なものです。教会なくして信仰は成り立たない、そのように言っても決して、過言ではありません。一方何故、そのような当たり前のことを強調するのかと言えば、私どものまわり（私どもの内側にも！）には、言わば、「個人的キリスト教」が強い影響力を持っているからです。個人的キリスト教とは、教会の存在を言わば便宜上のものとして受け止めるものです。自分の個人の信仰を育て、利益を得るための手段として考えるのです。教会のため（つまり神のため）の信仰ではなく、自分のための信仰です。そのような教会理解では、教会を宗教施設に解消される危険性があります。簡単に言えば、自分のニーズにあった教会を欲して教会を転々としたり、教会を動かし自分の居心地をよくしてしまう態度です。キリスト者個人としては社会的に影響を持つ人が少なくありません。しかし、一個の教会として地域社会をはじめ世論に影響を及ぼす教会は、極めて少ないのです。そこにも、聖書的な教会論の欠落を認識し、その弱さを具体的に担って立ち上がろうとする牧師や役員が少ないからだと思われる。

したがって、私たちは残念ながらキリスト教を標榜するとき、言わば「教会的キリスト教」という言葉さえ用いて、聖書を正しく読み、聖書の使信を正しく語らなければならない状況があります。「個人的キリスト教」の歴史的系譜をごく大雑把に言えば、敬虔主義さらにリバイバリズムの影響を受けたキリスト教に見ることができます。プロテスタント開教によって、その影響を色濃く受けていた当時の宣教師たちによってもたらされたものです。それゆえ、今なお、多くの日本人キリスト者、とりわけ牧師や伝道者たちに、信仰告白や教会政治という信仰における客観的、制度的

な事柄に対して生理的な拒否反応を示されるのです。日本キリスト改革派教会の創立とは、まさに、そのような日本の土壌に対して、本来の聖書のキリスト教、つまり、前記「教会的キリスト教」を明瞭にすることによって開墾し、一個の聖書的教会を建てあげようとする挑戦に他なりません。

〈私たちは～教会です。〉

さて、本問の答えは、三つの文章から成り立っています。最初は、まさに基本的な教会論が描き出されます。教会とはキリストの体であって、キリストがその頭でいらっしゃることで、キリスト者とは、聖霊によってその御体の一部分であるということです。

第二は、教会とは、天（神の国）に根拠を持って生きる者たち、天を永遠の故郷にさせていただいた者たちの地上における神の家族であることです。つまり、教会とは、キリスト者相互の交わりそのもの（「聖徒の交わり」）であることです。

最後に、キリスト者の信仰生活の具体的な場、「母なる教会」（問43）としての機能が描き出されます。

今回は、第一の教会論を中心的に扱います。しかも、その特徴的な表現にポイントを絞ります。ここに、「私たちは～教会です」という大胆な表現があります。教会とは、他ならない私たち自身のことだと言うのです。教会とは、キリストの体であって、キリストを頭としていただくものです。そして、キリスト者とは、聖霊によってこの体に結び合わされた者です。そして、まさにそれゆえに、教会とは私たち自身のことなのです。実に、キリストの体である教会とは、私たちの存在なくして地上に実現しません。神は、それほどまで私たち一人一人を神の救いの御業のために用いようとなさっておられるのです。神の民は、神の御心を実現するために救われた「器」であることを深く覚えさせられます。

ちなみに、「キリストの体である教会」とは、単なる比喩ではありません。ここが決定的に大切です。永遠の御子なる神は、私どもの救いのために肉体を取られました。これは、肉体において罪を犯す私どもの全存在を救うために必須でした(救済論、特に問35を参照)。私どもの救いとは、主イエス・キリストと結び合わせられることにあります。キリストとの交わりこそ、私どもの救いの事態です。そして、まさにそのためにキリストは受肉されたのです。この受肉の事実の中に、地上の教会は根拠を据えることができたのです。この点で、旧約の教会とはまったく異なり、神との交わりの徹底さにおいて驚くべき霊的な祝福にあずかっているわけです。

このような主イエス・キリストと救われた者たち、神の民の交わりの深さ、一体化を表現する言葉が「私たちは～教会です」を生んでいます。当然、契約の子たちを含めて、教会にはいわゆるお客さんは一人もいません。会員の皆が、教会の「当事者」です。教会を構成する必須の部分(コリント12:12～31)なのです。

「私たちが教会である」ということは、私どもに、使命や責任を呼び覚ますこととなります。洗礼を受けて教会員になった一人は、まさにかげがえのないキリストの体を構成する一部分であり、その存在と働きによって、教会は形成され続け、新しく生き続け、歩むのです。したがって、私たちが教会であるという自己理解は、教会員としての当事者意識を常に鮮明に育み、キリスト者の召命、奉仕の務めの責任感が養われてまいります。

〈全体と個の課題〉

教会論を考えると、「鶏が先か卵が先か」に似た議論は常に繰り返されます。つまり、「私たちが」がより重要(先)なのか、「私」がより重要なかというものです。かつてアメリカの神学者が「プロテスタント病」という言葉で、現代社会やキリスト教、教会の個人主義化に警鐘を鳴らしました。

確かに、私たちの教会の原点ともいえるべき、神の前に徹底的に個人、「一人」とならせる信仰の側面は、常に覚えられているべきです。ルターが、ヴォルムス帝国議会で語ったとされた有名な「我、

ここに立つ」との宣言に象徴される、神の御前に、信仰と良心を偽ることができない者とされているキリスト者の姿に、プロテスタンティズムの精華を認めることができるはずです。それは、神が「一人」を徹底して重んじられたからです。99匹を野原に残してでも、失われた一匹を捜された主イエスのたとえ話と十字架の愛を思えば良く分かります。その意味で、教会教育の責務としてこのような「一人」を徹底して鍛えるべきことを指摘させていただきたいと思います。分級で、あるいは子どもの教会で、まさに一人を相手に福音を語る教師もおられるかもしれませんが、その一人が、本当に、そして深く主イエスと交わり、主イエスに生かされるなら、その教会と社会を変え、担う一人になることができるはずです。

しかし、そのような聖書的な「個(個人)」とは、常に、外へと開かれ、使命をもって営まれるものとなるはずです。私たちの外にいらっしゃる神に心を開くことによって鍛えられ、養われ、磨かれる良心は、常に隣人に心を開くことへと解放され、隣人、神の家族に心を開き、彼に仕える者として導かれるのです。ここでも、この二つは一つのこと、まさに聖霊による相互作用によって実現される恵みです。

〈子どもたちに〉

ここでは、説教以上に分級での営みが重要のように思います。契約の子たちが、どれほど、まさに生まれる前から教会の皆さんに祈られてきたのかを教えてあげましょう。親たちの祈りは当然ですが、教会の祈りによって生れてきた子どもであるとの自覚を持たせてあげたいものです。

また、彼らの信仰告白、成長のために同じ世代の信仰の仲間、友がいることも決定的に重要な意味を持ちます。各個教会でそのような友が与えられれば幸いです。困難であるときにも、いえ、そうでなくとも中会やサマーデイズなどの同世代の仲間たちとの「交わり」がどれほど、彼らの信仰を養うことになるのでしょうか。これらはまさに中会・大会の主要な課題であることを銘記しておかねばなりません。(相馬伸郎)

4月24日 教会と共に歩む道・キリストの体 説教展開例

テキスト

ローマの信徒への手紙 12章4～8節

子どもと親のカテキズム 問42

(単元のねらい)

教会なくして神の民もその信仰も生活も成り立ちません。教会こそ、私たちの生の根拠であり使命であり目標です。教会に生きる、つまり教会を通して、教会のために生きることから離れて、聖書的な人生を描くことは不可能です。そのような、教会的キリスト教をまさに恵みの事実として、子どもたちに気づかせ、感じさせ、喜びと感謝へと高めていきたいと願います。そのために説教の重要性は言うまでもありませんが、分級での教師との対話が要です。その対話（もとより説教自身が、子どもたちとの霊的な対話＝神との対話を求めてなされるものです）を通し、自分自身が教会の一部であること、かけがえない価値、また使命が与えられていることに気付かせることができれば幸いです。

わたしたちが教会？

新学期も始まって、新しいクラスや学年にも慣れてきたでしょうか。月曜日から金曜日まで、学校に幼稚園や保育園に行きます。そして、日曜日には、必ず教会に行きます。

教会と学校の違いを考えた事がありますか。幼稚園や保育園の場合は、家族の誰かに連れて行ってもらう場合がありますね。教会もお父さんかお母さんに連れてきてもらっているお友だちも多いです。けれども、そのままいっしょに幼稚園や小学校にずっといっしょにいてくれますか。これは、教会とは違いますね。後で、分級の先生といっしょに似ているけれど違うところを考えてみると楽しいかもしれません。

今朝、皆は教会に来ています。さあ、今日は日曜日、教会だと思えますね。そのとき、皆さんの心の中で教会をどのように思い描きましたか？この建物のことを思った人はいますか。それとも、先生やお友だちのことを思いましたか。

教会のことで、最初にお話ししたいのは、聖書が教えている教会とは、この建物のことではないということです。建物のことを教会堂と言います。皆は、知らないのですが、昔、私たちの教会は、4階建ての小さな小さなビルのその3階の部屋を借りて、そこを教会堂、礼拝室にしていました。

その部屋はとても狭かったのです。子どもたちも30人も集まる時がありました。そこで分級は、外の昇り階段の踊り場でしていました。冬と真夏は、大変でした。それでも、地域の小学生たちが大勢集っていました。きっと、当時の子どもたちは、立派で素敵で教会堂でなければ行きたくないとは思わなかったのです。もしかすると教会に行っていたというイメージもなかったかもしれません。いつもの学校とは全く違った日曜学校、教会学校でのイエスさまのお話や分級を楽しんでいたのだと思います。確かに、小学校のように、教会学校には、校長先生やクラスの先生がいます。教会学校でも同じですから、変わった学校と考えていた、かもしれません。

けれども、教会とはこの地上にあるありとあらゆる学校とは違います。いえ、地上にあるすべての団体、組織、会社、子供会やクラブだとかとも違ってきます。なぜなら、教会とは、神さまのおつくりになられた、神さまの家だからです。ですから、ここには、神さまがおられるのです。聖霊なる神さまが、ここに働いておられ、天にいらっしゃる主イエスさまと僕たち私たちとを一つに結び合わせてくださいます。つまり、神の家である教会にはイエスさまが聖霊によって共にいてくだ

さるのです。それが神さまの家である教会にとって一番大切な、一番すばらしい恵みです。

学校や幼稚園に入るためには、手続きが必要です。誰かが、皆に代わってしてくれたのです。それなら、教会はどうでしょう。教会は、天の父なる神さまが、イエスさまの血潮によってこの地上に起こし、建てあげてくださった神さまの教会です（使徒20:28）。天のお父さまは、僕たち私たちを神の子にしようと生まれる前から選ばれました。生まれる前から先生たちにお祈りされていた皆さんです。イエスさまは、あなたを神の子にするために十字架について罪を贖って下さいました。ご復活されて、天に昇られたイエスさまは、聖霊によって、僕たち私たちの名前を一人一人呼んでくださり、教会に招き入れて下さいました。この手続きはすべて、神さまが成し遂げて下さいました。そして今朝も、聖霊なる神さまは、僕たち私たちに働いてくださり、御言葉を聴かせて、イエスさまを信じさせ、教会の一員にしてくださっているのです。

正式に教会の一員になるためには、洗礼を受けることが必要です。赤ちゃんのとき洗礼を受けたお友だちも、そうでないお友だちも、一日もはやく私は神さまの子です、イエスさまについて行きますと信仰を告白しましょう。ここにいらっしゃる皆さんは、神さまがまさに、そのように導こうとしてここに呼び集められたのです。

このように、教会は神さまの家、神さまの教会です。しかし、聖書は言います。ただ神さまだけが教会にとってなくてはならないお方なのではありません。神さまの教会がここにあるためには、どうしても僕たち私たち、その一人一人が必要なのです。今日の暗唱聖句を読みましょう「わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです」。つまり、僕たち私たちなしには教会はここにない

のです。つまり、僕たち私たちが一つの体つまり教会、キリスト教会、神の教会そのものなのです。一人一人は、お互いに体の部分なのです。聖書は言います。教会はキリストの体。しかしイエスさまのお体は今、天にあります。父なる神さまの右にイエスさまのお体、つまりイエスさまがおられるのです。つまり、この地上に、イエスさまのお体はありません。それなら、キリストの体である教会って、何なのでしょう。

先ほど、洗礼について言いました。聖書は、教えてくれます。洗礼を受けたとき、先生のすべて、心も体も魂もすべてイエスさまのお体とぴたりと結び合わされてしまったのだというのです。先生は、イエスさまの体の一部分になってしまったというわけです。自分の手の甲を軽くつねって見て下さい。それでも痛いでしょう。イエスさまは、僕たち私たちをイエスさまの体の一部分として見ておられます。皆が苦しんだり、悲しんだりすると、イエスさまも「痛い」と思ってくださいに違いありません。それほど守られ、愛されています。

イエスさまは、何故、天に戻ってしまわれたのでしょうか。それは、あなたをイエスさまの体に結び合わせることで、あなたがイエスさまの代わりに、僕たち私たち自身である教会がイエスさまの代わりに、イエスさまのお働きを続けていくためです。つまり、イエスさまは、僕たち私たちに、教会にご自身のお仕事を託されたのです。

僕たち私たちは、小さいですし、小さなことしかできないかもしれませんが、そのまま十分に教会のために奉仕できる人にされています。そのことが分かれば、イエスさまのために、イエスさまと共に、イエスさまのように、自分たちにできる教会の奉仕を教えてもらって、それができるように励みましょう。そのために、聖書を読んで祈りつつ、皆で礼拝を捧げていきましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 第12章5節

わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。

4月24日 教会と共に歩む道・キリストの体 小学科下級

カテキズム42、ローマの信徒への手紙 12章4～8節を読みましょう。

1. わたしたちがせいれいによってむすびあわせていただいたのはどなたですか？

2. むすびあわせていただいてひとつの何となりましたか？

3. わたしたち神さまの子どものこくせきはどこにありますか？

4. おしえること、おせわすること、はなすことなど神さまからあたえられているものがそれぞれあるとおもいます。わたしやあなたにあたえられているもののおもいをはなしてみましよう。

5. そのようなわたしたちはきょうかいでいっしょに何をしますか？

6. そしてどこをめざしてあゆみますか？

カテキズム42、ローマの信徒への手紙 12章4～8節を読みましょう。

1. 私たちは聖霊によって誰と結びあわせていただいていますか？
2. そして一つの何となっていますか？
3. 私たち神様の子どもの国籍はどこにありますか？
4. 聖書に様々な賜物が書かれています。あなたにはどんな賜物を与えられていますか？ そして一緒に学んでいる友達にはどんな賜物があるでしょう？ それぞれお話ししてみましょう。
5. のような私たちは教会で共に何をしますか？
6. どこを目指して歩みますか？

テキスト	ルカによる福音書 24章13～35節
子どもと親のカテキズム	問43
参考教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問29～31, 96 ハイデルベルク信仰問答 問21, 31, 51, 54, 75

問43 頭であるキリストは、ご自分の教会のために何をしてくださいますか。

答 頭であるキリストは、聖霊によって神さまの子どもたちと共にいて、礼拝の恵みにあずからせてくださいます。母の胸に抱かれるように、私たちを養い育て、守りつつ、救いの完成へと導いてくださいます。

〈聖書テキストの解説〉

ルカ福音書のエマオの箇所を読むと、イエスの「弟子」でイエスから直接聖書の言葉を教わった者であっても、聖書の言葉に基づく救いのメッセージを理解し、受け取ることは難しさがある、ということに気づかされる。それは、教会に通い続けている私たちも同じである。それは、イエスに、「ああ、物分りが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち！」と言われてしまうような嘆かわしい状態なのだ。しかし、このとき、イエスは、理解が十分でない弟子たち（そして私たち）と歩みを共にし、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」。何度教えてもわからない子どもに、学校の教師や親は、もしかしたらイライラして、その思いをぶつけ、「もう知りません！ 勝手にしなさい」などと言い放ってしまうこともあるかもしれないが、イエスは「ああ、……」と嘆かれても、私たちの無理解を見捨てて放置することはなさらない。歩を合わせて手取り足取り教えてくださるお方なのだ。その点に注目して、当該箇所を読んでみたい。

15節「イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」

これがイエスの、神の子どもたちに対する態度であり、伝道する際のはじめの一步の態度。上から教えるのでもない。ご自分の方へ引っ張ろうとするのでもない。ある程度のレベルに達していないものを門前払いすることもない。どのくらいの

知識があるのかを見抜いて先回りして教えるのでもない。イエス「御自身」が「近づいて」くださる。「一緒に歩」いてくださる。

19節「イエスが、『どんなことですか』と言われると」。

イエスはまず、弟子に、今理解していることを言ってみるように促される。幼児期の子どもたちの成長を見守るとき、例えば立ち上がろうとする力、歩いてみようとする力など、子どもたち自身の「やってみよう」という思いを大切に育てていくように、イエスも、私たちの中から引き出すようにして、そこから正しい信仰へと導いてくださる。

26,27節「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったの(入らねばならないはず)ではないか。そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」。

26節を読んだときに、すぐにイザヤ書52,53章が思い浮かぶことだろう。しかし、イエスは「モーセ……から始めて、聖書全体にわたり」と言っておられるのを見落としてはならない。モーセ五書の中に、そのような箇所があるのを思い出せるだろうか。詩編や小預言書の中にも見出せるだろうか。イザヤ以外の預言書からも見出せるだろうか。ここで日曜学校の先生方にすぐに思い出していただけのほどには、日本の教会では礼拝において旧約聖書が十分に語られていないように思う。しかし、「キリストが私たちを礼拝の恵みにあずからせてくださり、私たちを養い育て、救いの完成へ

と導いてくださる」と言うときには、礼拝における「聖書全体」からの御言葉の養いが欠かせないということだ。このときの「聖書全体」は旧約聖書のこと。礼拝で私たちが何をもって養われるのかといえば、旧約聖書全体をもって、なのだ。日曜学校でも、それなしに子どもたちを適切に導くことはできない。

30,31節「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」

イエスがここで「食事の席に着」かれたということは、22:16で「神の国で過越（原文は代名詞「あのこと」）が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の（←原文では「過越の」とは限らない）食事をとることはない」とおっしゃっていたので、「あのことが成し遂げられた」ということを意味している。つまり、今や、イエスによって旧約聖書で約束されていた救いがことごとく成し遂げられて、神の国の宴会（13:29、14:15～24参照）が始まったのだ。その宴会の恵みを、エマオの弟子たちはここで味わった。また私たちも、毎週の礼拝でそれを味わう。その「味わい」は、聞いた御言葉について「目が開け、イエスだと分かる」という仕方でも味わえる。その感覚を味わわせてくださるのが聖霊の働きなので、カテキズムに「聖霊によって」という言葉が記されているのである。

この食事が聖餐という形で礼拝の中に取り入れられているが、イエスが聖餐式を制定されたとき、「わたしの記念として（←『リマインダーとして』という言い回し。わたしを思い起こすため、わたしについての記憶をよみがえらせるため）このように行いなさい」と命じられていたことが大切。聖書の言葉と聖餐によって、イエスの教えと救いの御業を、そのたびごとに鮮やかに思い起こせるように、主は聖餐の礼典をも定めてくださった。エマオの弟子が「わたしたちの心は燃えていたではないか」（32節）と言っていたような鮮やかさ、熱さで御言葉どおりに行われた救いの御業を思い

起こさせられるのである。礼拝でこれらに与り続けることによって、私たちは救いの完成へと導かれる。エマオの物語は、私たちの礼拝生活の縮図として描かれていると言ってもよい。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

問42,43で「頭であるキリスト」に言及している。これはキリストの体なる教会の「頭」という意味で書かれているため、体の部位としての「頭」を想像しがちであるが、言葉の上で「頭」とは、創世記の冒頭の「初めに」という言葉の語源になっているので、「初」という意味合いがこもっていることに注意したい。つまり、「頭であるキリスト」と言ったときには、「御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方」（コロサイ1:18）、「死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂」（コリントー15:20）、「救いの創始者」（ヘブライ2:10）という意味が強い言葉なのである。そしてこの救いは、旧約聖書の言葉に基づいているので、旧約聖書を離れて、この問答に記されている、頭であるキリストの業を考えるべきではない、ということに注意したい。つまり「聖霊によって神さまの子どもたちと共にい」る、というときの聖霊は御言葉とともに働く聖霊だということ、「礼拝の恵み」とは、御言葉を鮮やかに味わうという恵みであること、「私たちを養い育て」るのは、御言葉をもってであるということ。そのすべてにおいて、キリストの業を旧約聖書できちんと理解する必要があることを軽視してはならないのである。

〈子どもたちに対して〉

聖餐の事柄は、まだ与ることの少ない子どもたちには、実感がなく、わかりにくいかもしれない。しかし、聖書の意味がわかる！ という感覚は、10歳を過ぎた頃から徐々に増してくるのを筆者は自分の経験を通して知っているのもので、その感覚を鋭く持つことを促していったらよいのではないかと思う。（赤石めぐみ）

テキスト

ルカによる福音書 24章13～35節

子どもと親のカテキズム 問43

〔単元のねらい〕

問43の答えの、特に前半部、頭であるキリストが「聖霊によって神さまの子どもたちと共にいて、礼拝の恵みにあずからせてくださる」、という点について、エマオの記事から、子どもたちに少しでも実感を持ってもらえるように、御言葉の恵みを伝える。

心が燃える体験**〔カテキズムから入るとき〕**

今日学ぶ問43の答に、こうありますね。

「頭であるキリストは、聖霊によって神さまの子どもたちと共にいて、礼拝の恵みにあずからせてくださいます」。皆さんは今、イエスさまがここに一緒にいてくださっていることがわかりますか？ イエスさまのお姿は目に見えませんがわかりにくいですね。「イエスさまと一緒にいらっしゃるな」と感じられるときって、どんなときだと思いますか？ 目をつぶってお祈りしているときかな？ みんな賛美歌をうたっているときかな？

〔聖書から入るときはここから〕

今日読んだ聖書の箇所に出てくる二人は、こんなふうに言っています。24:32「二人は、『道で話しておられるとき、また聖書を説明してください。わたしたちの心は燃えていたではないか』」。イエスさまのお話を聞いているとき、それはつまり、聖書の言葉を聞いているときに、二人は「イエスさまと一緒にだった」という感覚を強く覚えたのですね。

二人の心は燃えた、ということですが、イエスさまのお話はどんなお話だったのでしょうか？ おもしろい話をしてくださったのかな？ イエスさまのお話の内容は聖書の説明だったそうですが、どうしてそれがそんなにおもしろかったのかな？

二人の弟子は、イエスさまが群衆にお話するのを聞いたことがありましたし、イエスさまが不思議な業をなさるのを見たことがありました。ですから24:19で「この方は、神と民全体の前で、

行いにも言葉にも力のある預言者でした」と言っています。そして、祭司長たちにとらえられ、十字架にかけられたことも知っていました。三日目にお墓に行った女性たちが天使から聞いた「イエスは生きておられる」という言葉も、ちゃんと伝え聞いていました。イエスさまのことをこんなに知っているし、今、「イエスは生きておられる」という言葉を聞いてきたばかりなのに、二人は暗い顔をしていました (24:17)。

イエスさまのご生涯についての物語を、みんなもいろいろ知っていると思います。でももしかしたら、「イエスさまはなぜこんなことを言われたのだろうか？」とか「イエスさまはなぜこんなことをされたのだろうか？」「イエスさまはなぜそんなことがおできになるのだろうか？」と思うようなことがいっぱいあるのではありませんか？

二人の弟子も、イエスさまについて見聞きしてきたことについて、「なぜなんだろう」「どうしてなんだろう」ということをずっと「話し合い論じ合っていました」 (24:14, 15)。でも、自分たちでいくら話し合っても、全然わかりませんでした。そして「イエスは生きておられる」という言葉を全然信じられませんでした。

イエスさまがおっしゃったこと、なされたことには全部意味があります。それは旧約聖書に全部書いてあるのです。イエスさまご自身が「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する」 (24:44) とおっしゃっています。そこでイエスさまは、『メ

シアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか』そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明され」ました(24:26,27)。

イエスさまはこんなふうに説明されたのではないのでしょうか。

『『こういう苦しみ』とはどういう苦しみかわかりますか。それはイザヤ書53章に書いてありますよ。十字架のときに見た光景を覚えていますか。それは全部、詩編22編や69編に書いてあります。『三日目に』ということは出エジプト記19章にたくさん書いてあります。わたしの十字架と復活は、新しい律法・新しい契約なのです。それはエレミヤ書31:31~34にも書いてあります。『復活することになっている』ということは例えば次のような箇所にも書いてあります。申命記18:15に『わたし(モーセ)のような預言者を立てられる』と書いてあるのはわたしのことだし、エレミヤ書23:5に『ダビデのために正しい若枝を起こす』と書いてあるのもわたしのことです。ゼカリヤ書6:12,13に書いてあることもわたしのことです。他にも旧約聖書の中で『立てる』『起こす』と書いてあるのは、『復活させる』という意味なのです。『三日目に、立ち上がらせてくださる』ということはホセア書6:2にも書いてあります。『栄光に入る』ということはイザヤ書52:13にも、ダニエル書7:13,14にも書いてありますよ。でもそれはその箇所の前後に書いてあるとおり、苦しみを受けてからなのです。苦しみを受けてから受けるということはありません。この苦しみを受けることは、わたしにとってもとてもつらいことだったので、父なる神さまに、『取りのけてください』と祈らざるを得ませんでした。でも、そのあとどうしてわたしにこの苦しみを受ける決心がついたかわかりますか。それは父なる神さまが、あなたがたを深く憐れんで、このことを成し遂げてどうしてもあなたがたを救いたいと思っておら

れたからです。神さまの憐れみについてはホセア書11:8やヨエル書2:18、ゼカリヤ書1:16などに書いてありますし、なにより、イザヤ書55:7にはこう書いてありますよ。『主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば、豊かに赦してくださる。(中略)わたしの思いはあなたたちの思いを高く超えている』と。あなたがたがずっと話し合ってもわからなかったのは、このように神さまの思いがあなたがたの思いをはるかに高く超えているからなのです。……』

こんなにたくさんのごこと、一回聞いただけでは完全に理解できないかもしれませんね。でも、このように聖書には、神さまがわたしたちを憐れんでくださっているということ、だからこそ、イエスさまがわたしたちを救うために苦しみを受けてくださったことが全部ちゃんと書いてあるのです。それを礼拝で読んだり、その説明を聞いたりすると、わたしたちにそれが伝わってきます。神さまの憐れみ、わたしたちのために神さまの御心に従ってくださったイエスさまのお姿。それは本当に涙が出るほど感謝なこと・嬉しいことです。この喜びと感謝をもっともっとよく味わえるようになるために、わたしたちは毎週の礼拝に招かれているのです。週ごとに教会の礼拝で、聖書全体からの解き明かしを聞いて、一生をかけて神さまの御心を知っていくのです。聖書の言葉がわかるように、語る先生にも、聞くわたしたちにも聖霊が働いて、それができるようにしてください。このように神さまは、御言葉によって少しずつ私たちを養い育ててください、苦しいこと、つらいことに耐えられるように守ってください。わたしたちが人生の最後には、「ほんとうに神さまはわたしのことを救ってくださった」と言えるように、イエスさまと一緒に歩いて教え続けてくださるのです。(赤石めぐみ)

[今週の暗唱聖句] 詩編 131編2節

わたしは魂を沈黙させます。
わたしの魂を、幼子のように
母の胸にいる幼子のようにします。

ルカによる福音書 24章13～35節を読みましょう。

1. ふたりのでしがエルサレムからエマオにむかってあるいているときに、何がおこりましたか？

2. そしてイエスさまはかれらに何とはなしかけましたか？

3. 27せつにかかっている「せいしょ」とは何のことですか？

4. イエスさまのことがきゅうやくせいしょにかかれています。たとえばどこかわかりますか？

5. ふたりのでしはイエスさまといっしょにれいはいをしたといえるでしょう。それはどんなところでしょう？

6. イエスさまのことをきいて、こころがもえるようなことがありましたか？

ルカによる福音書 24章13～35節を読みましょう。

1. 二人の弟子がエルサレムからエマオに向かって歩いているときに何が起こりましたか？

2. そしてイエス様は彼らに何と話しかけましたか？

3. 27節に書かれている「聖書」とは何ですか？

4. イエス様が説明された「ご自分について書かれていること」の箇所では何か思いつくところがありますか？

5. 二人の弟子はこのとき礼拝の恵みにあずかったと言えます。どのようなことを通してでしょう？

6. 揮で弟子たちのように心が燃えるような経験をしたことがありますか？

テキスト

マタイによる福音書 28章18～20節

ルカによる福音書 10章25～37節

創世記 1章28節

子どもと親のカテキズム

問44

参考教理問答

ハイデルベルク信仰問答 問107

ハイデルベルク信仰問答 問111

問44 教会の交わりの中で養われる私たちの使命は、何ですか。

答 イエスさまは教会に、全世界に出て行って福音を宣べ伝えること、困っている人を助けること、大地を大切に治める使命を与えられました。私たちは神さまの子どもとして、いつでもどこでもこの使命を果たします。

〈子どもカテキズムの解説〉

『子どもと親のカテキズム』では、教会の交わりで養われる私たちの使命が、3つあげられています。

- ①「全世界に出て行って福音を宣べ伝えること」
いわゆる大宣教命令です。
- ②「困っている人を助けること」
教会における執事的働きです。
- ③「大地を大切に治めること」
これは文化命令です。

〈聖書テキストの解説〉

今回は聖書箇所を一つに絞ることができませんでした。それは問44の内容を一つの聖書の箇所でもカバーできなかったからです。

1) 「全世界に出て行って福音を宣べ伝えること」

第一の使命は大宣教命令の内容です。主は全世界の人びとの造り主です。ゆえに、主の十字架による罪の赦しという福音は、造られた全ての人に宣べ伝えられなくてはならないのです。イザヤ45:22には「地の果てのすべての人々よ、わたしを仰いで、救いを得よ」と記されています。そして、私たちこそ「国々の光」「救いを地の果てまで、もたらす者」（イザヤ49:6）なのです。

マタイ28章19、20節

18節には「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」とあり、主御自身が自ら絶対的権威をお持ちの御方であることが宣べられています。

「19: だから、あなたがたは行って、すべての民

をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊によって洗礼を授け、「20a: あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」全ての民を弟子にすること、全ての人を主イエスに導くようにと主は命令されています。父と子と聖霊の名による洗礼を授け、主が御命じになったことを全て守るように教えることも命令されています。主のご命令なのでこれが教会の使命なのです。この時この言葉を第一義的に聞いたのは11人の弟子でした。そして弟子達は主の約束の聖霊によって強められて、宣教によって教会が生み出されます。教会はこの主の命令を忠実に守り続けています。御言葉に基く説教と聖礼典（すなわち洗礼と聖餐）は教会の印です。それはこの主の命令に従ったことによるものです。

「20b: わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」宣教を命じ、宣教を通して御自身の教会を形づくられる主は、世の終わりまで私たちと共においてくださいます。福音を宣べ伝える時に、反対されたり、困難なことに遭遇したりするかもしれません。しかし、主はいつも私たちと共においてくださると約束しておられます。

2) 「困っている人を助けること」

第二の使命は愛にもとづく慈善行為です。教会の職務に教師、長老、執事があるように、教会は愛にもとづく慈善行為を執事職の使命としてきました。

慈善行為とは何かをよく表しているのがルカ

10章25～37節の『善いサマリア人』の譬え話です。律法学者が「隣人とは誰ですか」と自己弁護したのに対し、主は「行ってあなたも同じようにしなさい」と愛の行為を求められます。永遠の命を受けつぐ道は、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」という戒めを守ることだ、と主は教えられました。ガラテヤ5:14には「律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされる」とあります。この「隣人を自分のように愛する」とはどういうことでしょうか。追いはぎに襲われ着物をはぎ取られ半殺しにあった人をサマリア人は「隣人を自分のように愛しました」。その動機は「憐れに思う」心です。心がなければ行動も生まれません。しかし、思っただけではなく、実際に行動したことが重要なのです。善きサマリア人の愛は、①敵をも愛するもの、②損害をも引き受けるもの、③必要に対して自腹を切る具体的なもの、そして④主体的なものでした。主はこのような憐れみの心を持って「隣人になる」ことを求めておられるのです。

3) 「大地を大切に治めること」

第三の使命は文化命令の御心に適った執行です。コロサイ1:16には「万物は御子によって御子のために造られた」とあり、創世記1章28節では、その御子の創造なさった世界を管理することが命じられています。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」

人間の任務は創造の時から、全地とその中の生き物を「治める」仕事、「従わせる」務めでした。「大地を大切に治める」使命は、「産む」こと「増える」こととセットで記されています。人口が増加することによって、この務めはより良くなります。天地創造の時から産児と勤労は神の祝福であり、人間の使命であったのです。このカテキズムには「大切に治める」という言葉があります。創造の時に「極めて良かった」とされている世界を、墮落した人間が自分勝手に、御心によらずに支配するようになってしまいました。主が再臨される時、新しい天と新しい地とされます。しかし、文

化命令は変わらず私たちの使命なのです。

〈黙想〉

- 1) 主イエス・キリストの贖いの業により、私たちは神の子としていただきました。憐れみ深い神は、御子によって罪を赦し、救ってくださいました。この福音は全世界の人びとに宣べ伝えられなければなりません。それは主からの命令であり、委託、私たちの使命です。主によって、「国々への光」とされており、主が共にいてくださるのだから、恐れず大胆に語っていく必要があります。
- 2) 憐れみの心を持ち、御心になつた愛による慈善の業のために躊躇せず、主体的に行動する者となること。そのようにして命を救うことは、主のご命令であると覚えておきたいと思います。

先の東日本大震災の被害とさまざまな災害によって被災された人びとへの思い、そして原発事故によって地が元に戻らなくなった恐怖を忘れないでおきたいと思います。

- 3) 私たちはまた、創造の時の文化命令を神からの命令として受け留めたいと思います。今や人間の罪によって環境破壊、人間の能力を超えた原子力とその処理の問題、地球温暖化と異常気象の問題、生物の絶滅等多数の問題がおこっています。私たちは文化命令に応えてこれらの問題に声をあげ、取り組まなくてはなりません。また、クリスチャンホームの形成、産児、この世での勤労を通して地を大切に管理し、主の創造の御目的に寄与することが使命であることを、子どもたちと共に覚えたいと思います。

共に痛みを共有しながら、宣教、執事的活動、日々の労働と信仰に基くさまざまな闘いを、主の御心に従って果たしていきたいものです。

〈子どもたちに対して〉

子どもたちも教会に集う一員として、宣教、愛による慈善の業、地の管理が使命であることを自覚しましょう。そして、主が私たちの小さな一步を祝して、ご自身の神の国の建設のためにお用いになられることを覚えましょう。私たちこそ「国々の光」「救いを世界の果てまでもたらす者」とされた神の子どもたちなのです。（袴田清子）

テキスト

マタイによる福音書 28章18～19節

ルカによる福音書 10章25～37節

創世記 1章28節

子どもと親のカテキズム 問44

(単元のねらい)

教会に集う大人も子どもも、主から大切な使命を与えられていることを知る。

その使命が語られている御言葉を確認し、主の命令を聞く。

主の命令に従って、信仰による応答をささげるように子どもたちを導き、励ます。

私たちの使命

子どもと親のカテキズム44問では、教会の交わりの中で養われる私たちの使命について3つの点を学びます。

第一に、「全世界に行って福音を宣べ伝えること」です。これは主イエスの大宣教命令と呼ばれ、マタイ28章18,19節に記されています（聖書を開かせる。教師が読む）。

主イエスは全世界の造り主です。全ての人間の造り主である主は、ご自身によって成し遂げられた救いを、宣べ伝える使命を私たちに委ねておられます。宣教は主からの委ねられた務め、そして主からの命令です。主がご自身を十字架に献げて、歴史の中で、たった一度、罪の赦しの生贄として十字架におかかりになられ、復活された後にこの命令が弟子達に与えられました。神ご自身でもある神の御子主イエスが、十字架にかかって罪の贖いの供え物となってくださったのです。主の御苦しみと死と復活によって、主が与えられる、罪の赦しという福音は、弟子達を通して、全ての人に宣べ伝えられなくてはなりません。イザヤ書に45章22節にも「地の果てのすべての人々よ、わたしを仰いで、救いを得よ」と神さまの招きが語られています。この主イエスによる以外に救いの道は人間には与えられないからです。人間は、この主イエス・キリストを仰ぐことによってのみ救われるのです。弟子たちは主イエスご自身が与え

られた力に満ちた宣教の業によって、神の権威を帯びて伝えられ、教会が建て上げられていきました。私たちも主の小さな弟子たちとして、御言葉を真摯に聞き、主の福音を全ての人に伝えること、それが、主から与えられた使命です。主は天と地の一切の権能を授かっておられます。その主が「すべての民をわたしの弟子にしなさい」と命じておられます。主は世の終わりまで私たちと共にいてくださいます。この主の命令に従い、恐れず大胆に福音を語っていきましょう。

第二の使命は、「困っている人を助けること」です。この使命は愛に基く慈善行為にあたります。教会においても3つの役職、すなわち教師、長老、執事があります。教会においては執事の働きが、愛に基く慈善行為の使命を担い、行ってきました。

聖書には、主が求めておられる愛の慈善行為が非常に分かりやすく記されている箇所があります。ルカ10章25～37節の善いサマリア人の譬え話です（紙芝居、絵本などの視聴覚も良い）。

ある人がエルサレムからエリコへ行く途中で、追いはぎに襲われました。着ていた服も全部はぎとられ、殴られて、半殺しにされ、道端に倒れていました。聖書の教えを良く知っている祭司、そしてレビ人はその場所に来ましたが、倒れている人を見ると避けて通って行きました。しかし、旅の途中のあるサマリア人は、その人を見て、「か

わいそくだ」と思いました。酷く殴られ、起き上がる事もなく、服までも奪われた人を見て、「憐れに思い」、そして、近寄りました。持っている自分のぶどう酒で傷を消毒し、油を塗って、包帯をしてあげました。それだけではなく、自分の口バに乗せ、宿屋に行って介抱してあげました。次の日になると、お金を宿屋の主人に渡して、代わりに介抱してくれるように頼み、「お金がもっとかかったら帰りがけに払います」とまで言いました。自分が損をしても、半殺しの目に遭った人の命を助けようとしたのです。それは、自分も損害をうけ、自分の財産を犠牲にする行為でした。しかし、サマリア人は自分から進んでそうしたので。このような慈しみと憐れみに満ちた（困っている）隣人を自分のように愛する行為こそ、主の求められるものです。主イエスは、私たちにも、行って同じようにするように命じておられます。

私たちが世界に目を注ぐ時、至る所で子どもたちや、貧しい人達が飢餓のためなくなっています。日本においても東日本大震災や様々な災害で、愛する家族、家、財産等を失って大変な状況の人もまだ多くおられます。私たちは、「行ってあなたも同じようにしなさい」との主の御命令に従って来たでしょうか。困っている人に、憐れみの心で、自分が損害を被っても、財産を犠牲にして助けたでしょうか。主の御前に反省し、再びこの使命に応えなくてはなりません。私たちの力は小さくても、それを合わせて、主が喜ばれるような憐れみに満ちた行為を使命として施す者にされたいと思います。

第三の使命は「大地を大切に治めること」です。この使命は文化命令と呼ばれています。創世記1章28節にこのようにあります（聖書を読む）。

すべての物は、「御子において、御子のために造られた」とあります。そして、人間の使命は人

間造られた最初から、全地とその中の生き物を「治める」務めでした。天地が造られた時から、人間は結婚して、子どもをもうけ、「産み」「増える」こと、そして、労働を通して神さまに仕え、御心に従って大切に地を治めることが、組み込まれた使命だったのです。それは人間が罪を犯す前は祝福に満ちた使命でした。それは今も変わりなく、私たちの使命です。神さまが世界を創造なさり6日目に天地万物を完成された時、それは「極めて良かった」と、創世記1章31節には記されています。その「極めて良い」世界の管理を人間は喜びと賛美、感謝に満ちて成す者です。

主イエス・キリストはやがて天地を全く新しくされます。それは黙示録に預言されていることです。神の国が完全な形で到来するまで、地を御心に従って治める務めは、いぜんとして変わることなく、私たちの使命です。

最近では、人間が好き勝手に地に扱ったことから来る環境破壊、人間が扱える範囲を遥かに超える原子力の問題、二酸化炭素の多量排出による地球温暖化と、それに伴う異常気象や国の水没、絶滅品種と呼ばれる生物の問題など、多くの問題があります。そのような中「大地を大切に治める」使命をいただいている私たちは主に力と知恵を祈り求め、その使命に応えるように生きていきます。

私たちが将来する仕事、それはこの「地を大切に治める」文化命令に応えることに他なりません。「地を治めよ」との神さまの命令に応える人間による労働の無い地はあり得ないのです。私たちはどんな仕事であれ、6日間の間の働きを通して、主の「地を治める」という使命に、信仰によって応えるように召されています。喜びと感謝に満ちて、主の祝福と主から与えられる力と知恵に満たされて、神さまに伝えて生きるように神さまによって召されているのです。（袴田清子）

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 28章19,20節

あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。

彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、

あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

カテキズム44を読みましょう。

1. わたしたちのすべきことは何と、カテキズムにはかいてありますか？

2. マタイ

イエスさまのごめいれいは何ですか？

3. ルカ

37せつでイエスさまは「行ってあなたもおなじようにしなさい」といわれました。どんなことでしょうか？

4. はじめにりっぼうのがくしゃがこたえたことは何でしたか？

5. そのこたえをきいてイエスさまは何といわれましたか？

6. 創世記

だいちをたいせつにすることはどんなことだとおもいますか？

7. きょうまなんだしめいについて、何をはじめることができるでしょうか？

カテキズム44を読みましょう。

1. 私たちの使命は何だとカテキズムは教えていますか？
2. タイによる福音書28章18～20節を読みましょう。
3. イエス様のご命令はどんなものですか？
4. ルカによる福音書10章25～37節を読みましょう。
5. 37節でイエス様は「行ってあなたも同じようにしなさい」と言われました。それはどんなことでしょうか？
6. はじめに律法の専門家が答えた永遠の命を受け継ぐためにはどうしたらいいかとうことは何でしたか？
7. の答えを聞いてイエス様は何と言われましたか？
8. 世記1章28節を読みましょう。
9. 大地を大切に治めることとはたとえばどんなことだと思いますか？
10. 日私たちの使命について学びましたが、今日これから何を始めることができますでしょうか？

テキスト ヨハネによる福音書 20章19～23節
子どもと親のカテキズム 問34, 35
参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問29～31

〈聖書テキストの解説〉

【週の初めの日の夕方】

復活の主イエス・キリストが弟子たちに、その復活の姿を現わされたのは、週の初めの日の夕方でした。

週の初めの日の朝早くに、十字架におかかりになり、死んで、葬られた主イエス・キリストは復活されました。その同じ朝早くに、女性の弟子たちに、復活の主イエス・キリストはご自身が復活されたことをお示しになりました。その女性の弟子たちは、恐れつつも喜びに満たされて、男性の弟子たちにその復活の出来事を知らせました。

エマオに向かう二人の弟子たちにも、復活の主イエスは共に道を歩まれつつ、ご自身を現わされました。これも週の初めの日の午後、夕暮れ近くのことです。

主の復活の事実をいくつかの場面で、復活の主イエス・キリストは弟子たちに現わされましたが、弟子たちがあつまっているそのただ中にご自身を現わされたのは、その週の初めの日の夕方でした。週の初めの日の朝から夕方にかけて何度も、ご自身が復活されたことを主はお示しになりました。でも、決定的にお示しになったのは、その日の夕方、弟子たちが一つの家の部屋に集まっていた時でした。

こうして、週の初めの日に、しかもその夕方に複数の弟子たちが集まっているただ中にご自身の復活の御姿を現わされることにより、復活の事実を決定的にお示しになりました。

【ユダヤ人たちを恐れて】

弟子たちはユダヤ人たちを恐れて、部屋に鍵をかけて隠れるようにして、その時を過ごしていました。主イエスの十字架、死、葬りという事実が、彼らの心に恐怖を生んだからです。恐ろしいまでの厳粛な事実を弟子たちは目の当たりにしたので

す。それが、主の十字架、死、葬りという事実でした。その恐怖の中で、ユダヤ人たちが自分たちをも捕まえに来るのではないかという恐怖に包まれて、鍵をかけた部屋にみんな隠れて過ごしていました。

【あなたがたに平和があるように】

恐怖のただ中に弟子たちが置かれていることを、復活の主イエス・キリストはよくご存じでした。ですから、弟子たちのただ中に現れられたとき、すぐにこうおっしゃいました。

「あなたがたに平和があるように」と。

この挨拶はユダヤ人たちの通常の挨拶でもあります。「ご機嫌いかがですか。お元気ですか」というごく一般的な挨拶です。でも、ご自身の手とわき腹とをお見せになったのち、再びおっしゃいました。「あなたがたに平和があるように」と。

ですから、単なる挨拶以上に、「あなたがたに平和があるように」という言葉には、弟子たちに平和、平安、喜びを与える力がありません。

復活の主イエス・キリストが、あの十字架にかかって、死んで、葬られた御方であることを、弟子たちは、その傷を見ることによって確認されました。その御方が今日の前におられる。そして、「あなたがたに平和があるように」と言って御自身の復活の御姿を現わしておられる。その事実に触れ、弟子たちは喜びました。

イエス様の復活のお体は、不思議な体です。鍵をかけた部屋のただ中に入ってくることのできる不思議な体です。でも、触ることもできる体ですから、幻のような体ではありません。エマオにいらしたかと思うと直ちにエルサレムに現れることができる栄光の復活の御体です。

【聖霊を受けよ】

復活の主イエスは、弟子たちに息を吹きかけ、

「聖霊を受けなさい」とおっしゃいました。もちろん、最終的に聖霊が天から送られ、弟子たちが聖霊に満たされるのは、五旬祭の日、すなわち、ペンテコステの日です。しかし、その日が来る前に、復活の主イエスは、聖霊が送られ、弟子たちが聖霊に満たされて、復活の主と共に働くことを予告されます。

【主イエスから送られてくる聖霊】

主イエスから、その聖霊は送られてくることをここで主は教えておられます。ヨハネ14:16,17で、主はこうおっしゃっています。「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。この方は、真理の霊である」と。また14:18では、「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」ともおっしゃっています。父と御子から送られて来る聖霊は、見えざる聖霊というお姿で、再び弟子たちのところにいらっしゃる、イエス様そのものでもあるのです。息を吹きかけ、聖霊を受けよ、と主がおっしゃったのは、聖霊はご自分から送られてくること、さらには、聖霊とはご自分の息、ご自分そのものであられることを示しておられます。

【弟子たちの使命】

聖霊を受けよと、息を吹きかけられた弟子たちですが、二つの使命が言い渡されています。

一つは、「わたしもあなたがたを遣わす」という派遣される使命です。

もう一つは、「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される」という、罪の赦しを伝え、信じる者に罪の赦しを宣言する使命です。

この使命はキリスト者個々人に与えられているものであると同時に、教会に与えられている使命であると考えられます。

この使命については、復活の主イエスは、ルカ福音書24:46以降でもこう言われています。

「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受

け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に述べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」。

私たちが主イエスから頂いたものは、罪の赦しです。罪赦されて、父なる神様との間柄が回復され、永遠に父子の間柄の中を生き続ける、永遠の関係・交わりが与えられました。それを私たちは、「罪の赦しと永遠の命」と、表現しています。

「罪の赦しと永遠の命を与えるために世に来て、十字架にかかり、死んで葬られ、三日目に死人のうちから甦られた、このイエス様ご自身を証言する力を、聖霊によって与える」。そのようにイエス様は約束されました。聖霊を受けた私たち、出て行って、「イエス様による罪の赦し・体の甦り・永遠の命を信じます」というメッセージを伝える。これが、私たちキリストの教会に与えられている使命です。教会は、この使命に応えるものとなり、全世界にこの使命を伝える者となる。これがイエス様の御約束です。使徒言行録1:8で、こう主はお約束されています。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたし（イエス）の証人となる」。

〈黙想〉

キリストの教会とそれにつながる、私たち一人一人は、聖霊を受け、身近なところから始まって、世界中に出て行って、イエス・キリストの福音を伝える者とされています。この使命に生きる時、教会は、また、それにつながる私たち一人一人は、存在の意義を発揮し、輝かすことができます。出て行って、「罪の赦しと永遠の命を受けなさい」と、十字架と復活の主イエス・キリストを証しする者となりましょう。 (芦田高之)

テキスト ヨハネによる福音書 20章19～23節
子どもと親のカテキズム 問34, 35

【単元のねらい】

聖霊を受けたわたしたちキリストの教会は、十字架につけられ、死んで、葬られ、三日目に死人のうちから甦られた、復活の主、イエス・キリストを証言する者です。

この使命に応じて生きる者となることを伝えたい。

聖霊を受けなさい

【週の初めの日の夕方】

週の初めの日の朝早くに、十字架におかかりになり、死んで、葬られた主イエス・キリストは復活されました。その同じ朝早くに、女性の弟子たちに、復活の主イエス・キリストはご自身が復活されたことをお示しになりました。その女性の弟子たちは、恐れつつも喜びに満たされて、男性の弟子たちにその復活の出来事を知らせました。

でも多くの男性の弟子たちは、女性の弟子たちの言うことを信じられませんでした。そんな男性の弟子たちも集まっているところに、イエスさまは、復活の御姿を現わされたのです。

そのとき、弟子たちはユダヤ人たちを恐れて、部屋に鍵をかけて隠れていました。主イエスの十字架と死を目の当たりにした弟子たちは、恐怖の思いでいっぱいになっていたからです。

【あなたがたに平和があるように】

そのように恐怖のただ中に弟子たちが置かれていることを、復活の主イエス・キリストはよくご存じでした。ですから、弟子たちのただ中に現れたとき、すぐにこうおっしゃいました。

「あなたがたに平和があるように」と。

この挨拶はユダヤ人たちの通常の挨拶でもあります。でも、ご自身の手とわき腹とお見せになったのち、再びおっしゃいました。「あなたがたに平和があるように」と。

ですから、単なる挨拶以上に、「あなたがたに平和があるように」という、復活のイエスさまの

言葉は、弟子たちに平和、平安、喜びを与えました。

イエス様の復活のお体は、不思議な体です。鍵をかけた部屋のただ中に入ってくるのできる不思議な体です。でも、触ることもできる体で、幻のような体ではありません。エマオにいらしたかと思うと直ちにエルサレムに現れることができる栄光の復活のお体です。

【聖霊を受けよ】

弟子たちに現れてくださった、復活の主イエスは、弟子たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい」とおっしゃいました。もちろん、最終的に聖霊が天から送られ、弟子たちが聖霊に満たされるのは、五旬祭の日、すなわち、ペンテコステの日です。しかし、復活の主イエスは、聖霊が送られ、弟子たちが聖霊に満たされて、復活の主と共に働くことをあらかじめ予告されます。

ここでイエスさまがお教えになりたいことは、主イエスさまから、その聖霊は送られてくることです。ヨハネ14:16,17で、主はこうおっしゃっています。「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である」と。また14:18では、「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」ともおっしゃっています。父と御子から送られて来る聖霊は、実は、目に見えない聖霊というお姿で現れるイエスさまなので

す。

【弟子たちの使命】

聖霊を受けよと、息を吹きかけられた弟子たちには、二つの使命が与えられました。

一つは、「わたしもあなたがたを遣わす」という派遣される使命です。もう一つは、「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される」という、罪の赦しを伝え、信じる者に罪の赦しを宣言する使命です。この使命はキリスト者個々人と、教会に与えられている使命です。

この使命については、復活の主イエスは、ルカ福音書24:46以降でもこうおっしゃっています。

「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に述べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」。

私たちが主イエスから頂いたものは、罪の赦しです。罪赦されて、父なる神様との間柄が回復され、永遠に父子の間柄の中を生き続ける、永遠の関係・交わりが与えられました。それを私たちは、「罪の赦しと永遠の命」と、表現しています。

「罪の赦しと永遠の命を与えるために世に来て、十字架にかかり、死んで葬られ、三日目に死人のうちから甦られた、このイエスさまご自身を証言する力を、聖霊によって与える」。そのようにイエスさまは約束されました。

【教会の使命】

出て行って、「イエスさまによる罪の赦し・体の甦り・永遠の命を信じます」というメッセージを伝える。これが、私たちキリストの教会に与えられている使命です。教会は、この使命に応えて、

全世界にこの使命を伝える者となる。これがイエスさまの御約束です。使徒言行録1:8で、こう主はお約束されています。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたし（イエス）の証人となる」と。

【世界の果てまで】

キリストの教会とそれにつながる、私たち一人一人は、イエスさまから聖霊をいただいています。聖霊という見えない姿のイエスさまが、私たちのうちに住んでくださっています。

そんな私たちは、私たちの身近なところから始まって、世界中に出て行って、イエス・キリストの福音を伝える者とされています。

近い所では、まずおうちからです。おうちの中にまだイエスさまのことを信じていない人がいたら、伝えてあげましょう。「私がイエスさまを信じるのは、私の罪が赦されるためなの。罪が赦されると、安心して天地の造り主である父なる神様にお話ができるようにされるの。罪赦されて、いつまでも神様の子どもにされるからなの。病気になっても、何か失敗しても、死ぬ時が来ても、死んだ後でも、イエスさまによって、父なる神様と私の親子関係はずっと続くの。だから私は、イエスさまを私の救い主として信じているの」と。

もう少し離れたところでは、学校のお友だちにもそのことを伝えてあげましょう。そして、もっと大きくなったら、日本の中だけでなく、世界中に出て行って、このことを伝えてあげましょう。そのために私たちは、イエスさまを信じて、イエスさまから聖霊をいただいています。目に見えない聖霊という姿のイエスさまが私たちのうちに住んでいて、「罪の赦しの福音を世界中に知らせなさい」と励ましてくださっています。（芦田高之）

【今週の暗唱聖句】 ヨハネによる福音書 20章21～23節

父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。

……聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。

ヨハネによる福音書 20章19～23節を読みましょう。

1. そのひとはなんようびですか？

2. でしたちはなぜユダヤ人をこわがっていたのでしょうか？

3. そこへイエスさまがあらわれて何といわれましたか？

4. でしたちはイエスさまにお会いしてどうおもいましたか？

5. イエスさまはでしたちにいきをふきかけてくださいました。そのいきとは何ですか？

6. イエスさまがあたえてくださったしめいは何ですか？ (2つ)

ヨハネによる福音書 20章19～23節を読みましょう。

1. その日（週のはじめの日）とは何曜日ですか？

2. 弟子たちはなぜユダヤ人を恐れていたのですか？

3. そこへイエス様が現れて何と言われましたか？

4. 弟子たちはイエス様にお会いしてどう思いましたか？

5. イエス様は弟子たちに息を吹きかけてくださいました。それは何だと書かれていますか？

6. イエス様が与えてくださった使命は何ですか？（2つ）

テキスト	ヨハネによる福音書 20章19～23節
子どもと親のカテキズム	問45
参考教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問59 (ハイデルベルク信仰問答 問90)

問45 礼拝に集まるのは、どうして週の初めの日曜日なのか。

答 その日にイエスさまが復活されたからです。神さまにまねかれ、毎週この日に集まることによって、今も復活のイエスさまが聖霊において私たちと共にいてくださることを確信させていただきます。

〈聖書テキストの解説・黙想〉

主イエスの十字架のあと、弟子たちは一つの家に集まっていた。「週の初めの日の夕方」(20:19)、彼らの真ん中に、復活の主イエスが立たれる。

I 弟子たちの恐れ

その時、弟子たちはひどく恐れていた。その恐れが「家の戸に鍵をかける」(20:19)という姿にあらわされている。彼らの心は、夕刻になり薄暗くなる家の周囲のように、闇へと向かっていた。

彼らは何に恐れていたのか。福音書には、「ユダヤ人を恐れて」と記されている。主イエスを十字架に架けたユダヤ指導者たちが違わしてくるかもしれない追っ手を弟子たちは恐れていた。弟子たちは、主イエスの十字架も、そこで露わにされた自分たちの弱さも、これからの未来への希望のなさをも受け止めきれず、扉の向こう側からやってくる暴力的な脅威に恐怖し続けていた。

II 「あなたがたに平和があるように」

その閉じこもる弟子たちの真ん中に、復活の主イエスは立たれ、一つの言葉を放たれる。「あなたがたに平和があるように」。

主イエスのご受難は、弟子たちから「真ん中」・中心が見失われる出来事であった。弟子たちがこれまで信じてきたこと、その信仰のかたち、そして、主イエスのご存在そのものが狂気において奪われてしまうような出来事であった。中心が失われた共同体はもろい。弱い。そのままでは、弟子たちの集まりが消えてなくなってしまうのも時間の問題であったかもしれない。その「真ん中」に復活の主イエスは立たれ、言われた。「あなたが

たに平和があるように」。この言葉が、弟子たちの新しい中心となる。

その言葉は、最後の晩餐の席の約束(14:25～31)を主イエスが守り果たされたしるしであり、勇気の言葉(16:33)を思い起こさせるものであり、そして、主イエスが弟子たちと共にあった日々、おそらくいつも交わしていたあいさつの言葉「シャローム」であっただろう。ユダヤの民は、「シャローム」と、「あなたがたに平和があるように」と挨拶を交し合う。

弟子たちは、十字架を前に、「さようなら」というがごとく主イエスの前から逃げ去って行ったが、その弟子たちに対して、復活の主イエスは、「こんにちは」と、「あなたがたに平和があるように」と、新しい出会いのあいさつをなされた。

それが、主イエスと弟子たち、また、弟子たち同士を一つにする言葉となる。そして、神の言葉のもとに集う人びとを一つにする言葉となる。十字架の意味を受け止めさせ、自分たちの間に巣くう闇を乗り越えさせ、ゆるしと和解に立たせる言葉となる。「実に、キリストはわたしたちの平和であります」(エフェソ2:14)。

弟子たちは主イエスをあきらめたかもしれない。しかし、主イエスは弟子たちを決してあきらめられなかった。主イエスは、誰にも、私たちの弱さにも失望されない。その希望が、「あなたがたに平和があるように」という言葉にあらわされている。

III 「聖霊を受けなさい」

復活の主イエスは、約束とおり、聖霊において、

弟子たちに、新しい命を与えられ（コリントー15:45）、そこから、弟子たちのこれからの生きる意味が生み出されていく。

人間は神にゆるされ、愛され、受けとめられている存在であること。そのことを人間が本当に知るために、神の御子の十字架と復活が、人間の歴史の中にあらわされることが必要であった。

弟子たちは、彼らの真ん中に復活の主が立たれ、そのことに喜びを抱き、そして聖霊を吹きかけられることで、そのことを知る者たちになった。知った者には責任がある。

弟子たちは、これから、彼らが知った平和の福音（よき知らせ）を、自らの言葉をかけて、生活をかけて、存在をかけて、目の前に広がる日々の中で、あらわし、証ししていくことの責任を負う。それが、彼らの使命となり、生きる意味となった。

そのことが、「週の初めの日の夕方」に始まった。その時、弟子たちが抱え、直面していた暗闇の中で一つの光が輝いた。

「週の初めの日」は、私たちが抱える闇の中で、主イエス・キリストという光が輝く日。その日から、また私たちは新しく生き始める。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

Ⅰ 「週の初めの日曜日」

ユダヤの民は、第七の日（今の私たちの暦で言えば、「土曜日」）を「安息日」として、休み、主なる神に礼拝をささげる。それは、十戒の第四の戒め（出エジプト記20:8～11、申命記5:12～15）に示された教えである。

最初期のキリスト者たちは、第七の日を守りつつ、主イエスが復活された「週の初めの日曜日」に、パンを裂くために共に集まった（使徒20:7）。そこで、主イエスを思い起こした。それが、キリスト者の礼拝となっていく。

当然、その日はまだ「休日」ではない。人びとは日中に働き、その仕事を終えてから、一つの場所に集った。多くの者が疲れていたであろう。使徒言行録には、長すぎるパウロの話に眠りこけて、三階から転落したエウティコの話がでてくる（20:9）。彼もまた日中の労働に疲労がたまっていたのかもしれない。

しかし、それでも、人びとは、「週の初めの日」

に、パンを裂くために、礼拝をするために、すなわち、主イエスにお会いするために集った。広い会堂などあるはずがない。エウティコが転落したのは、座る場所がなく窓際に腰掛けていたからでもあった。しかも、そこは三階であった。人びとは狭い場所に肩を寄せ合うようにして暮らしていた。その一室が「礼拝堂」として開放され、ともし火の中で礼拝が守られた。その意味においても、暗闇の中に光が輝いていた。そこに、私たちの礼拝の原風景がある。

Ⅱ 「イエスさまが聖霊において私たちと共に」

人間は神にかたどって創造された（創世記1:27）。人間は神と共に在るべき存在であり、神を礼拝して生きるべき存在である。それが妨げられる時、そう生きえない時、人間は活き活きと命を躍動させて生きることができない。魂が枯れていく。

復活の主イエス・キリストは、私たちの命になってくださった（コリントー15:45）。今も、そして、これからも、聖霊において、私たちと共にいてくださり、私たちを活き活きと生きる者としてくださっている。その事実を、私たちは礼拝において、確認し、回復する。回復していく時、私たちのうちに豊かに働いてくださっている聖霊を実感する。その時、私たちの心が感謝に踊る、魂が喜びに震える、唇が賛美をうたう。その事態にまた主イエス・キリストが共にいてくださることを強く確信させられる。私たちはそのような日曜日へと、礼拝の場へと招かれている。

〈子どもたちに対して〉

子どもたちは、どういう時に“生きている！”と実感するだろうか。日曜日がそういう時であってほしい。喜びの日であってほしい。「死は勝利にのみ込まれた」（コリントー15:54）。日曜日に、特に、礼拝において、命の源たる主イエス・キリストの御言葉に深くあずかり、一週間へと踏み出す活力を得てほしい。聖霊なる御神が、子どもたちの魂に触れてくださり、また、御言葉を語る教会学校の教師一人一人の魂に触れてくださり、共に眼差しを主イエス・キリストにある命の輝きへと向けたい。（柏木貴志）

テキスト ヨハネによる福音書 20章19～23節
子どもと親のカテキズム 問45

〔単元のねらい〕

「週の初めの日曜日」は、復活のイエスさまにお会いする日。わたしたちは肉眼でそのお姿を見ることはできないが、御言葉を通して、お会いする。その時、わたしたちは聖霊の息吹のなかに置かれていることを知る。共に、聖霊の御守りのうちに、イエスさまにお会いしたい。共に、礼拝で賛美をおささげし、この日から、新しい一週間へと踏み出していきたい。

イエスさまにお会いできるうれしい日曜日

I 日曜日はイエスさまが復活された日

みんな、おはようございます（こんにちば）。さて、突然ですが、クイズです！
今日は、何曜日でしょう？

……簡単すぎて、すいません。日曜日だね。日曜日に、こうしてみんなで集まって、神さまを礼拝するんだね。今日も、みんなと会えて、聖書のお話できて、とてもうれしいです。

では、第2問です！今日は日曜日だけれども、では、先週は何曜日に集まったでしょう？

……はい、すいません。これも簡単でした。先週も日曜日に集まったのでした。毎週日曜日に、みんなと会うことができます。お休みの時は会えなくて残念だけれども、ちゃんと教会ではお休みした人のためにお祈りをしていますからね。

では、次の問題は少し難しいものにしましょう。第3問です！では、どうして、みんなは毎週日曜日に、こうして教会に集まって、礼拝を一緒にするんでしょう？学校がお休みだからかな？お父さん、お母さんが行こうと言うからかな？

……はい、実は、日曜日に、こうしてみんなで集まるのはね、ちゃんと聖書に書いてあることなんです。教会の人たちは、もうずっと昔から、日曜日に集まって、礼拝をしていました。昔々、日曜日がまだお休みでなかった時も、みんな、お仕事が終わってから、一つの場所に集まって来て、それで、礼拝をしていました。そうして、みんながこの日曜日を大切にしたんだね。

それでね、どうして、土曜日ではなくて、金曜日でもなくて、日曜日を大切にしたかと言うと、聖書に、この日曜日に、イエスさまがご復活をされた！と書いてあるからなんです。「週の初めの日」という言葉だけれどね。

イエスさまが、十字架に架かれたのは金曜日。その金曜日から、金、土、日、その三日目の日曜日の朝に、イエスさまはご復活されたんです。そして、その日を大切な日として守るために、みんな、日曜日に集まって礼拝をしました。

II 「あなたがたに平和があるように」

では、その日曜日にご復活されたイエスさまは、いったいどんなことをされたかな？

……そうだね。いろいろなお弟子さんたちに会っていかれました。マグラダのマリアという女の人に、「どうして泣いているのか」と声をかけられたり、エマオに向かう二人のお弟子さんと一緒に歩かれたり、聖書のお話をされたりもしました。

それから、お弟子さんたちが集まっていた一つのお家、そこにもご復活されたイエスさまは来られ、そして、こう言われたのでした。「あなたがたに平和があるように」。すてきな言葉だね。

でも、突然、この言葉を聞いて、お弟子さんたちはどんなふう思ったろう？

……びっくりしたかな。なんじゃそりゃと思ったかもしれないね。でも、聖書には、「弟子たちは、主を見て喜んだ」（ヨハネ20:20）と書いてあり

ます。お弟子さんたちは、みんな嬉しかったんです。やったあとと思った。

なんでかと言うとね、イエスさまが十字架にかかる時、お弟子さんたちはみんなどうしたかな。

……そうだね、みんな逃げちゃった。ペトロさんなんかは、イエスさまのことを「あんな人、関係ない。自分は弟子なんかじゃない」とまで言っちゃって、悲しい悲しい気持ちになってしまいました。他のお弟子さんたちも悲しんでいました。それから、恐くなってもしました。イエスさまを十字架にかけた人たちが自分たちも襲ってくるんじゃないか。そう思って、お弟子さんたちはぶるぶる震えるようにして、お家の中に隠れていました。そういうお弟子さんたちの真ん中に、ご復活されたイエスさまはあらわれたんです。それは、やっぱり嬉しいよね。やったあとと思うよね。

しかも、「あなたがたに平和があるように」とイエスさまは言うてくれました。イエスさまは、お弟子さんたちが逃げてしまったことを全然、怒っていなかったんです。これからもずっとお友だちだよって、言うてくれた。

お弟子さんたちは、本当に本当に嬉しくなりました。イエスさま、ありがどうって思えた。日曜日はね、お弟子さんたちにとって、イエスさまにもう一度、会えた日なんです。そうして、「あなたがたに平和があるように」って、これからもよろしく！ がんばろう！ って励まされた日なんです。

お弟子さんたちは、イエスさまに悪いことをしてしまったなあとって、本当に悪いなあとって、ゆるしてほしいなあとっていたんだよね。それが、そんなふうにしてきな言葉を言われたから、ああ、よかったって、とてもとても嬉しくなりました。それだけじゃないよ。イエスさまはお弟子さんたちに、大事な大事な“使命”を託されます。「わたしもあなたがたを遣わす」って。

その“使命”というのは、なんといっても、イエスさまの言葉を、たくさんの人に伝えていく“使命”だね。「あなたがたに平和があるように」って、みんなが、神さまに愛されているんだから、みん

な、仲良くしていかなければいけないんだって伝えていく“使命”だね。

でも、この“使命”はなかなか大変そうです。お弟子たちにできるかな。できるんです。できるように、イエスさまは「聖霊を受けなさい」と言われました。聖霊の神さまの力に守られたら、どんなに大変なことでも乗り越えられちゃう。

III わたしたちの日曜日

みんなもそうです。一週間、いろいろなことがあると思います。学校で、お友だちと遊ぶのは楽しいけれども、時々、ケンカをしてしまうこともある。他にもどうだろう。たくさん宿題がでて、ピンチって時があったり、何だかよく分からないうちに学校の先生に怒られたり、お家でも、お父さんやお母さんとケンカをして、言わなくてもいいことを言うてしまって、あとで「あんなことを言わなければよかった」と後悔することもあるかもしれない。一週間のうちには、本当にいろいろなことがあるよね。ケガや病気をしてしまうこともある。お友だちがそうなる時もある。そうすると、みんなの心はザワザワします。悲しくなったり、イライラしたり、心臓がドキドキします。

日曜日は、そういうみんなのザワザワやドキドキをイエスさまの言葉で、そして聖霊の神さまの力で吹っ飛ばす日です。なんたって、日曜日は、イエスさまにお会いする日なんですから、がんばろう！ って、君に何があっても友達だ！ って、イエスさまに励まされる日なんですから。

あのお弟子さんたちに「あなたがたに平和があるように」って励まされたイエスさまは、同じように、今日も、この日曜日にも、みんなを励ましてくれています。みんなで、イエスさまにお会いしましょう。どこに、どこに、探す必要はありません。目に見えないイエスさまが私たちの真ん中にいてくださいます。聖霊なる神さまが、そのイエスさまを、聖書を通して、このお話を通して、私たちに見せてくださいます。安心して、新しい一週間へと向かっていきましょう。「あなたがたに平和があるように」。(柏木貴志)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 20章19節

そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

ヨハネによる福音書 20:19~20をよみましょう

1. いつのできごとですか？

2. でしたちはだれをおそれて自分たちのいる家の戸にかぎをかけましたか？

3. イエスさまはきてどこに立たれましたか？

4. イエスさまはでしたちになんと言われましたか？

5. でしたちは主を見てどうしましたか？

ヨハネによる福音書 20:21~23をよみましょう

6. イエスさまはでしたちになにをふきかけられましたか？

7. イエスさまはでしたちになんと言われましたか？

ヨハネによる福音書 20:19~20を読みましょう

1. いつの出来事ですか？

2. 弟子たちの精神状態はどうでしたか？

3. イエスは来てどこに立ちましたか？

4. イエスは弟子たちになんとかしかけられましたか？

5. 主を見た弟子たちの精神状態はどうになりましたか？

ヨハネによる福音書 20:21~23を読みましょう

6. イエスは弟子たちに何を吹きかけられましたか？

7. イエスが弟子たちに言われたことはどんなことでしたか？

テキスト	ルカによる福音書 21章1～4節
子どもと親のカテキズム	問46
参考教理問答	中高生のための教理入門「主は羊飼い」41, 42 ウェストミンスター小教理問答 問88

問46 教会の礼拝で、私たちは何をしていますか。

答 教会の礼拝で、私たちは神さまと交わり、神さまをあがめ、神さまを喜び、賛美します。

聖書朗読と説教をきき、聖礼典をおいわいします。

また、お祈りをし、賛美歌を歌い、信仰を告白し、献金をささげて教会の働きに仕えます。

主日礼拝を構成する要素がここに列挙されていますが、これらの詳細については問48以下にある「恵みの手段」論に引き継がれます。

礼拝が神との交わりの場であることは、旧約聖書の御言葉全般に関わります。創世記においては早くも4章でカインとアベルが神へのささげものをなし、それが御前に受け入れられるか否かとの評価を受けます。祭壇で犠牲をささげる行為はノアから族長に至る信仰者たちが示す恭順の証しでしたが、モーセの律法には契約の掟として祭儀条項が詳細に加えられ、イスラエル共同体の礼拝の形が整備されました。そうして律法に規定された祭儀は、神が御言葉によってイスラエルの内に礼拝という交わりの場を置かれたことを表し、神の臨在がそこに保証されました。

神が定めた聖所（神殿）における礼拝制度は出エジプト記、レビ記、民数記において確立され、それと相俟って申命記では呪術・魔術の類が異教的要素として丁寧に排除されます。

こうして聖書の神礼拝は、人間が神をあがめるために考案した諸制度ではなく、神がご自身とイスラエルのために備えた賜物であって、その恵みによってイスラエルの命は神との結びつきの中に保たれることを表しています。

新約の福音の下で祭儀に関わる律法がすでに実践的な効力を持たないとはいえ、選びの民による神礼拝が途絶えたわけではないことは、主イエスもまた洗礼を受け、神殿へ詣でた礼拝者であったことから分かります。そうして、神礼拝の精神はそのまま旧約から新約へと受け継がれて今日の

教会にまで継承されています。

礼拝への招きを歌う詩編100編では、神の民に知られるところの全世界の創造主が讃えられ、神と人との間に実現する完全な喜びの交流が、シオンの神殿における礼拝に期待されます。招きの詞を大声で呼ばれる詩人は実質的に司式者ですが、その呼びかける詞のうちに神の喜びと人の喜びとが見事に一致して表現されています。

この詩編の中でも繰り返される「感謝」は「賛美」とも訳出することができ、特定の状況に束縛されない自由な広がりをもちます。神に感謝することとは「お礼を申し上げる」こととは違って、その有り難さに感激して神の素晴らしさをほめたたえることを意味します。そうした賛美の源となるのが5節にある神の善（トープ）と愛（ヘセド）と信実（エムナー）です。神の憐れみと信頼性は不変であり、その真実の御旨はキリストの十字架に余すところなく示されます。神を賛美する礼拝共同体は、ヨハネの黙示録の幻では終末を目指す神の民の特徴です（7章9～17節）。

聖書の朗読と説教、および洗礼式と聖餐式とから成る聖礼典は、それによって教会を教会たらしめている礼拝式の中心的な要素です。神の会衆が一つになって御言葉を拝受する場面は、シナイ山の麓での律法授与を典型とする契約締結の機会に現れます（出エジプト記19章参照）。申命記の冒頭ではモーセがモアブですべてのイスラエル人に対して律法の説き明かしをしています（1章5節）。つまり、神の言葉である律法をモーセのような預言者が説教することによって会衆が御言葉を聴

く、という型がここに見出されます。モーセの後継者であるヨシヤはシケムでの契約締結においてこれを踏襲し、サムエルも告別の辞を述べる際にその役割を果たします（サムエル上12:7）。

第二神殿時代の開始を感動的に描くネヘミヤ書8章では、悔い改めたイスラエルが「一人の人のようになって」（8章1節）主なる神との再契約に臨み、書記官エズラの朗読する律法の書に耳を傾けます。その際、レビ人が会衆のために通訳をして「意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した」（8節）、そして、その通訳は律法の説明をも含んでいた（9節）とあり、聖書朗読と説教の関係を具体的に描きます。さらに12節にも加えられる、「民は……教えられたことを理解した」との記述からは説教の重要さが伺われます。

このように描かれた「契約の民」の姿は、新約の時代に至って新しい民である教会に引き継がれます。使徒言行録2章に記された聖霊降臨の出来事は、「心を一にした」契約共同体の新たなスタートであり、そこに「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ること」という礼拝の主要要素が挙げられています。特に「パンを裂くこと」と言われる聖餐式の原型に当たる行為は、主イエスが教会に命じたこととして、洗礼式と共に教会の聖礼典になります（問50～54）。聖餐式は主イエスと弟子たちによる最後の晩餐の席を思い起こすばかりではなく、主と弟子たちが共に祝った新しい過越でもあります。イスラエルの信仰の原点にある出エジプトは、主の過越と葦の海の出来事によって果たされました。主イエスは新しい過越の犠牲としてご自身を十字架にささげ、水をくぐって命に至る道をご自身の復活において示されました。聖餐と洗礼はどちらも聖書に啓示された神の救済を象徴化した行為として、御言葉と密接に結びついています。聖礼典をお祝いするとは、御言葉を体験することです。

祈りと賛美と信仰告白は、御言葉を受けた会衆の側からなされる積極的な応答として行われま

す。礼拝の本質は会衆の心が神と結びつくことですから、語られた御言葉と共に生きて働く聖霊の促しによって、これらの応答が可能になります。詩編がよい模範になりますが、「祈り」「賛美」「信仰告白」の間には明確な境界がありません。それらの形式的な区分はあまり重要ではなく、むしろ言葉に明確に言い表して神に応えるのが目的です。強いて言えば「歌」つまり「節をつけて唱える」方式が特徴的ですが、これは共同体が一致するための工夫から生じたものと捉えるべきでしょう。

献金は神へのささげものです。ささげものによって神を礼拝する方式は旧約の律法の内にも確立していますが、新約ではその内面性と、献金の用途に特別な注意が払われています。

もとより、旧約聖書ではささげものに対する無配慮が信仰の劣化の証しとして預言者によって糾弾されています（マラキ書1章参照）。また、形式的なささげものが真の証しにならない点についても同様です（ミカ書6章6節以下、アモス書5章21節以下、等）。それら預言者たちの指摘に倣って律法学者・ファリサイ派の形式主義を非難し、貧しいやもめのレプトン2枚を最大限に評価したのが主イエスでした（ルカによる福音書21:1～4）。神が民に期待する感謝の応答は、民自身の心からの献身です。

新約の教会では、神へのささげものが貧しい人びとに分配されました。使徒言行録4:34に「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった」とあるのは衝撃的です。パウロの書簡によれば、後に教会は主の日ごとに献金を集めて教会相互の扶助に役立てています（『コリントの信徒への手紙一』16章1,2節）。こうして見れば、献金においても働いているのは主イエスの恵みであって、礼拝にあっては徹頭徹尾、神が御言葉と聖霊によって会衆を支配し、ご自身の御業を果たされることが分かります。だからこそ、心を込めてこのすべてを行うことが礼拝の要になります。

（牧野信成）

テキスト ルカによる福音書 21章1～4節
子どもと親のカテキズム 問46

〔単元のねらい〕

教会の礼拝は、神が中心になって行われる、神と民との交わりの特別な機会です。神ご自身が準備された礼拝に真心を持って集うことが信仰を保つためには欠かせないことを知しましょう。

礼拝って何をするの？

私たちの信じる神さまは目に見えない神さまです。神さまの方では私たちのことを何でもわかっておられるのですけれども、私たちにはわかりません。だから、神さまと一緒にいる、なんて信じることは、本当は簡単なことではないはず。

でも、聖書を読んでいると、昔の人は神さまの姿が見えなくても、ちゃんと信じているのがわかります。なぜわかるのかと言えば、神さまが話しかけてくれるからです。例えば、創世記の初めに、アダムとエバのことが出てきます。二人とも神さまの姿がどんなふうかは知らないのだけれども、エデンの園で神さまと会話をしている。だから二人は、神さまは本当にいるのだろうか、なんて悩むこともなかった。

そんなふうに、神さまは初めから人間に話しかけることで、人間と交わりをもっているお方だ、と聖書は教えてくれます。今の私たちは聖書の中に出てくる人たちのように直接神さまの声を聞くことはありません。けれども、今も神さまは教会の礼拝の中で、聖書の昔と同じように、私たちと交わりをもってください。神さまは目に見えないお方だけれども、聖書から私たちに語りかけます。それを信じる私たちもまた、神さまの言葉に答えて、歌やお祈りで返事をします。そうやって、私たちは見えない神さまと交わりをもちます。イエスさまは言いました。「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶこ

とができない」(ヨハネによる福音書15:4)。教会の礼拝は、イエスさまにつながっている私たちが、父なる神さまと交わりをもつことによって、命を養っていただくための場所です。

礼拝は神さまのためにあります。神さまは私たちから離れたくないからです。イエスさまにつながっている私たちは神の子です。本当の親はいつでも子どもの顔を見ていたいものです。父なる神さまもまた、自分の子どもである私たちがいつも元気であるのを見ていたい。だから礼拝の場所を用意して、命の言葉をくださいます。

それだから、礼拝は私たちのためのものでもあります。私たちは神さまから命の言葉をいただいて、罪を悔い改める心を新しくして、イエスさまにつながって本当によかったと感謝して、元気付けられて、神さまのよい御旨が世界に現れるために、毎日の生活に送り出されます。

教会の礼拝は、旧約聖書のイスラエルの人びとも、イエスさまも弟子たちも、ずっと続けてきたことです。神さまはそうして人間との交わりを昔も今も将来も、ずっと続けて行かれます。教会の礼拝には、イエスさまにつながるみんなが集まります。みんなで一つになって、私たちの神さまは素晴らしいと、心から喜んで、賛美をささげます。

礼拝の中で、神さまは、私たちが生きるのに必要な御言葉をくださいます。聖書が読まれたり、先生が説教するのは、神さまが語りかけてくれるのと同じです。「聖礼典」が時々行われます。「聖礼典」とは、洗礼式と聖餐式のことです。洗礼式では、イエスさまを初めて信じた人が、頭に水を

注いでいただきます。それは、聖書に書いてあるとおり、自分の罪や悪い心が、イエスさまの十字架によって赦されて、洗い清められたことを意味します。洗礼を受けるとき、私たちは聖霊なる神さまが、確かに私とイエスさまを結んでくださったと感じ取ることができます。

聖餐式もそれと似ています。パンと杯をみんなと一緒に食べます（信仰告白をしていないみんなはまだだけど）。イエスさまが最後の晩餐の席でおっしゃったように、パンはイエスさまの体です。杯のぶどう酒はイエスさまの血です。それをみんなで分け合って食べることで、聖書に書いてあるとおり、私たちはイエスさまにつながっているとわかります。

そうやって、神さまは私たちと交わりをもってくださいます。私たちがいただくばかりではありません。私たちが神さまに答える仕方も礼拝の中にはちゃんと備わっています。御言葉をいただいたので、お祈りして答えます。「あなたの御言葉とおりにになりますように」とマリアが答えたように、神さまの言葉が私たちの心のうちにとどまって、私がイエスさまといつも一緒にいられるようにと願います。私たちだけでなく、他のたくさんの人、神さまの御旨になんて幸せでありますようにとお祈りします。

また、一つになって賛美歌を歌います。賛美歌にはいろんな歌がありますけれど、声を合わせて神さまをたたえます。私たちの声を歌にして、神さまにささげるわけです。

そして、私たちは神さまをこう信じます、と言葉に言い表します。聖書に書いてあるとおり、私たちは三位一体の神さまを信じています、とみんなですべてははっきり言います。「使徒信条」や「十戒」は、もう覚えてしまった人もいるでしょうね。

それから、献金をささげます。いくら献げたらいいのかは自分で決めます。けれども、大切なのはささげる心です。みんなにもわかるはずですよ。お父さんやお母さんからお小遣いをもらおうでしょう？ 100円か500円か1000円かわからないけれども、1円や5円じゃないと思います。なぜなら、

お小遣いをあげるのも、お父さんやお母さんの気持ちの表れだからです。お金が余ったからくれるのではないでしょう？ 必要だと思うからくれるんですよね？ みんなだったらどうしますか？ 神さま、いつも私を守ってくれてありがとう。今週一週間も元気にいられました、と、心からの感謝を表すために献金をささげます。

今日はルカによる福音書から、献金をささげた女の人のことを読みました。ささげた金額はいくらだったでしょう？ レプトン銅貨2枚でした。今でいうと100円くらい。他の人たちはもっとたくさんしていたようです。でも、イエスさまは、その貧しい女の人のほめました。なぜなら、それはその女の人の持っている全財産だったからです。本当はそんなお金も献金してしまえば、女の人は困っただろうと思います。パンも買えなくなりますから。でも、おそらくその人は、神さまを信じて、自分自身を全部おささげしてしまったのです。献金は、だから、心です。これくらいささげておけばよいだろう、という計算じゃない。自分がどれほど神さまに感謝しているか、また、どれほど神さまを喜ばせたいか、と真面目に考えて、それで金額を決めたらよいでしょう。勿論、無理をしなくていい。誰かに見せるものでもない。そうやって、神さまを礼拝する方法の一つが献金です。ささげものをして、自分自身を神さまにささげる。その心が何より大切です。

献金だけではなくて、礼拝の全体が、この貧しい女の人のように、心からのものでなくては、神さまとの交わりができません。心からのものでないと、見えない神さまが、見えないままで終わってしまう。神さまを本当に信じることもできません。けれども、心を込めて、このすべてのことを行うならば、礼拝の中で私たちは神さまと出会います。イエスさまとの結びつきを感じます。見えない聖霊が心の中に住んでくださる、ということもわかります。御言葉を聞いて、賛美をささげて、私たちはみんな一つになってイエスさまにつながっている、ということが、本当だわかります。

(牧野信成)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 4章24節

神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。

ルカ 21:1~4をよみましょう

1. イエスさまはだれとだれがけんきんをするのを見ておられましたか？

2. イエスさまはだれがけんきんをたくさん入れたと言われましたか？

3. まずしいやもめにとって、レプトンどうか2まいはどのようなお金ですか？

ルカ21:1~4を読みましょう

1. イエス様はなにをみておられましたか？

2. イエス様は「……この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。」(3節)とおっしゃいました。
それはどういう意味ですか？

3. 貧しいやもめはどうして乏しい中から持っている生活費を全部いれたと思いますか？

テキスト

使徒言行録 2章41～47節

子どもと親のカテキズム 問47, 48

参考教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問88

問47 今も生きておられる復活のイエスさまは、どのようにして礼拝において共にいてくださるのですか。

答 復活し、天におられるイエスさまは、特にご自分の恵みを与える方法を用いて、聖霊において共にいてくださいます。

問48 恵みを与える方法とは何ですか。

答 御言葉と礼典と祈りです。イエスさまは、特にこの三つの方法を用いて、聖霊において私たちと共にいてくださり、救いの祝福を豊かに与えてくださいます。

〈聖書テキストの解説〉

使徒言行録2章41節から47節には、聖霊降臨後になされたペトロの説教に続く、最初期の教会の様子が記されています。

41節から42節では、ペトロの説教を聞いて洗礼を受けた人が三千人ほどいたこと、教会を形成していた人びとが、「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」ことを明らかにします。

「パンを裂くこと」は、聖餐式（主の晩餐）を指すルカの表現です（ルカ24:30,31）。「洗礼」を受けた者たちは、聖餐式に与って、主の成し遂げられた救いを喜び祝ったのです。

「洗礼」において私たちは、キリストとひとつに結ばれている者が、主の十字架の死の中に、そして復活のお命の中に、沈み込められるという主の御力を仰ぎ見ます（ローマ6:3～11）。

「パンを裂くこと」（聖餐式）でも、同様です。聖霊において礼拝のただ中にいましたもうキリストは、ご自分の肉を食べ、杯から飲むように招いてくださいます。パンと杯は、それ自体では単なるパンとぶどうジュース（ぶどう酒）に過ぎませんが、聖霊のお働きによって、私たちはパンと杯とが自分の肉となるように、キリストが私たちをご自分とひとつにしていってくださることを、リアルに実感します。

そこで礼拝の中心に位置するのは、「使徒の教え」、すなわち、聖書朗読と説教です。聖書朗読

と説教によって、私たちは、神がどのようなお方であるかを知り、キリストが私たちのために何をしてくださったかを知ります。

「相互の交わり」とは、神の御言葉に共に与るお恵みのことであり、洗礼と聖餐という同じ礼典に与るお恵みのことです。教会に属する者、キリストとひとつに結び合わされていることを告白するキリスト者にとって、これよりも大きく深く深い交わりは他にはありません。

相互の交わりが具体的な形を取る場合、それは「祈ること」（42）、「賛美をすること」（47）に集中してあらわれます。互いのための執り成しの祈り、主への感謝、信仰の告白が、祈りと賛美の中で主に献げられます。

このように、教会にとって不可欠な要素として、初めから主が備えておられたのは、御言葉と礼典と祈りです。この中で、主はご自分の存在を知らせ、恵みへと招き、教会をご自分の身体として養ってくださいます。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

「御言葉と礼典と祈り」を、ウェストミンスター小教理問答は、「キリストがあがないの祝福を伝えるのに用いられる外的な手段」と呼びました。子どもたちに届く言葉を求めて、「子どもと親のカテキズム」は、その言い回しを「恵みを与える方法」と言い換えました。

そして何よりも、礼拝においてキリストと共に

いてくださるという恵みが、集中してあらわれ出る「恵みを与える方法」であることを明らかにしたのです。

もちろん主は、礼拝の全体を通して、私たちと共にいてくださいます。しかし、御言葉と礼典と祈りという方法を通して、ご自身が共にいてくださるというお恵みを、私たちに聞こえ、見える仕方、はっきりさせてくださるのです。

恵みを与える方法としての、御言葉、礼典、祈りについては、続く問49から55までで丁寧に取り扱われます。

〈黙想〉

「恵みを与える方法」としての御言葉、礼典、祈りのすべてに、子どもたちが与えられるわけではありません。

日曜学校に来ている子どもたちの多くは、特に礼典を見る機会がないのではないかと思います。

せめて、日曜学校の礼拝の場で、聖餐式（主の晩餐）で用いられる用具や、洗礼盤などを、実際に見せつつ説教ができれば、と思います。

また日曜学校の礼拝で、イエスさまが語りかけてくださる御言葉を、分級で深めることができ、短くても自分たちの祈りが献げられれば素晴らしいと思います。

「御言葉と礼典と祈り」について、御言葉が語られ聞かれ、礼典が執り行われる時、最も深い意味での相互の交わりが成立しており、それは互い

に祈り合う交わりとして姿をあらわすと、「聖書テキストの解説」で、記しました。

私は、この点で、深く恥じ入った、ひとつの思い出があります。以前に仕えていた教会の礼拝に、日本に来ている韓国の神学生たちが参加して下さったことがあります。

言葉の壁を越えながら、どのようにして相互の交わりを作るか。愛餐会はどうか。色々と思いつらせながら準備をしていた時、一人の長老がこのように言われたのです。

「私たちにとっての最大の交わりは、聖餐式です。聖餐式をしましょう。言葉が通じなくても聖餐式の恵みの交わりは必ず通じます」。

私は本当にその通りだと思いました。けれども同時に、私の心の中にはなお、愛餐会の交わりを、聖餐式の交わりよりも、親密な、豊かな交わりだと考えてしまう愚かさが残っていることをも思わずにはおれません。

子どもたちにとって、日曜学校はどのような場所でしょうか。子どもたちにも、愚かな私のような心が生まれることがあるのだと思います。主が共におられる交わりよりも、お楽しみが嬉しい、という心です。

御言葉を共に聞き、共に祈り合うことで、子どもたちの真実な主にある交わりを創り出す責任を、教師たちは負っていることを覚えます。

（安田直人）

テキスト

使徒言行録 2章41～47節

子どもと親のカテキズム 問47, 48

〔単元のねらい〕

イエスさまが共におられる。そのお恵みを知る、最も確かな方法は、イエスさまご自身が造り出してくださる礼拝にこそあります。そのことを教える、問47から問55までの問答の、最初の部分を扱います。礼拝のお恵みに喜んで生きているか、自分自身を問いながら、子どもたちに伝えたいと思います。「日曜学校の礼拝によってこそ、イエスさまが共にいてくださることが分かるよ」。

イエスさまが与えてくださる恵みの「方法」

私たちは、イエスさまを信じる信仰を与えられて、イエスさまにひとつに結び合わされている神さまの子どもです。

イエスさまは、私たちの救い主でいらっしやいます。イエスさまは、私たちの希望です。私たちは、イエスさまのことを、もっともっと深く知りたいと願っています。

何事にも、「方法」は、とても大事です。

小さな頃、先生は、川で魚をとるのが、大好きでした。

竹で編んだカゴを前の日から仕掛けておくと、朝にはたくさん的小魚が入っています。このカゴは、仕掛ける「方法」がとても大事です。水の流に逆らわないようにしなければなりません。

何と言っても、自分の手で、つかみどりすることほど楽しいものはありません。大きな石の陰に隠れている魚をびっくりさせないように、そーっと近づいて、石の陰を両手でふさぎます。手に入ってきて、跳びはねる魚。

きっと、みんなも、とても好きなことがあって、それをするのには、「方法」が必要だっていうことを知っていると思います。

ゲームが好きな人は、ゲームの攻略本を見ながら、「全クリ」するための方法を探すでしょう。

さて、それなら、イエスさまがいつも一緒にいてくださることを知り、イエスさまのことをもっ

ともっと深く知るためには、どんな「方法」があるのでしょうか。

聖書を読むこと。そうですね、それはとても大切なことです。お祈りをする。そうですね、それもとても大切なことです。

それでは、聖書に聞いてみましょう。イエスさまがいつも一緒にいてくださることを知り、イエスさまのことをもっともっと深く知るための「方法」に、どのようなものがあるか。

先ほど読んだ聖書の箇所には、ペンテコステの後、(新約の)教会が生まれた時の様子が書かれていました。

ここを読むと、最初の教会がしていたことが、良くわかります。それは、「洗礼」「使徒の教え」「相互の交わり」「パンを裂くこと」「祈ること」「賛美すること」でした。

「洗礼」と「パンを裂くこと」とは、洗礼式と聖餐式のことです。みんなの中にも、共同礼拝で見たことのある人がいるかもしれません。自分が赤ちゃんだった頃に、洗礼を受けた写真を見たことがある人もいるかもしれません。

洗礼は生涯一度きり、授かるものですが、この洗礼によって、私たちは十字架と復活のイエスさまの中に沈み込められたお恵みを味わいます。洗礼の元々の言葉は「沈める」という意味だからです。そして、水で身体を洗うと、ピカピカになるように、私たちは洗礼によって、罪が赦されて真っ

白にされたことも分かるのです。

聖餐式では、パンを食べ、ぶどうジュース（ぶどう酒）を飲みます。パンとぶどうジュースは、特別に変化するわけではありませんが、食べて飲むと、小さいものですが、自分の身体になることが分かります。そのように、聖霊によって、聖餐式の真ん中におられるイエスさまが、「私とあなたはひとつですよ」と呼びかけてくださり、信じる心を確かにしてくださるのが、聖餐式です。

「使徒の教え」とは、聖書朗読と説教のことです。この時には、新約聖書がまだありませんでしたから、旧約聖書を聞いて、イエスさまがどのような方が、解き明かされたのです。

復活されたイエスさまが弟子たちに聖書を解き明かしてくださった時、弟子たちの心は燃えたと記されています（ルカ24:13～49）。礼拝で起こることも同じです。イエスさまが教会学校の先生を用いてお語りくださり、聖霊が心の目を開いてくださって、イエスさまの御声が響くのです。

洗礼式と聖餐式。御言葉。イエスさまの御声が響き、十字架の死と復活によって、救いを成し遂げてくださったイエスさまとひとつに結び合わされていることを知る。

その時、私たちは、イエスさまを中心とする交わりに与っています。教会に集まる人びとが、他のどんなことにもまして、一緒にイエスさまの御声を聞き、イエスさまとひとつにされていることを知ることを、交わりと呼ぶのです。

そこから、私たちは祈り合うようになります。同じイエスさまと結び合わされて、罪赦されて、神さまの子どもとされている喜びを、祈りの中で感謝します。兄弟姉妹とされている教会に集まる人たちへの、執り成しの祈りも始まります。イエスさまがなさってくださった救いの御業をほめたたえる歌も生まれます。

私たちを、毎週、日曜学校の礼拝に、共同礼拝に、招いてくださっているイエスさまは、今日も、呼びかけてくださいます。「私がいつもあなたと一緒にいることを知りなさい」。「私があなたのために何をしたか、何をしているか、もっともっと深く知るようになりなさい」。

そしてイエスさまは、礼拝の中に、「御言葉と礼典と祈り」という、そのための確かな「方法」を用意して私たちを待っておられるのです。

（安田直人）

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 2章42節

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

しと 2:41～42をよみましょう

1. ペトロのことばをうけ入れたひとびとはなにをうけましたか？

2. その日^ひにやくなんにんのひとがなかまになりましたか？

3. かれらはなににねっしんでしたか？

しと 2:43～47をよみましょう

4. しんじゃたちがまい日^{にち}おこなったことはなんですか？

5. みんな^{ぜんたい}しんじゃたちをどうおもっていましたか？

6. すくわれるひとびとを日々^{ひび}なかまにくわえ一つにされたのはだれですか？

使徒 2:41～42を読みましょう

1. ペトロの言葉を受け入れた人々はどうしましたか？

2. その日におおよそ何人の人が仲間に加わりましたか？

3. 彼らは何に熱心でしたか？

使徒 2:43～47を読みましょう

4. 信者たちが毎日ひたすら心を一つにして行っていたことは何ですか？

5. 信者たちの行ないによって、民衆全体は信者たちに対してどのような思いをよせていましたか？

6. 救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのはどなたですか？

テキスト 使徒言行録 8章26～40節
 子どもと親のカテキズム 問49
 参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問89

問49 恵みを与える方法としての御言葉とは何ですか。

答 聖書の朗読と説教です。これらを用いて、イエスさまは、聖霊によって私たちに語りかけてくださいます。ですから、よく備えて礼拝に出席し、御言葉を受け入れ、心にたくわえ、毎日聖書を読み、御言葉に従うことが大切です。

〈子どもカテキズムの解説〉

問49は「恵みを与える方法」の1つ目である。恵みとは、問48で言われている「聖霊において私たちと共にいてくださり、救いの祝福」に与ることだと理解できる。御言葉と礼典と祈りを通して、私たちは主イエスと共にいることを深く実感し、救いに与っていることに感謝をする。

この救いを与える方法の一つ目が御言葉である。御言葉とは、狭い意味においては聖書のことである。しかし、問49で言われているようにただ聖書を読むことだけではなく、聖書の朗読と説教も含まれる。これは、恵みを与える方法が教会と堅く結ばれているからである。御言葉も礼典も祈りも教会という文脈から離れて考えることはできない。

第二テモテ3章16節によれば聖書とは靈感された書物である。この靈感とは、神の息が吹きかけられたという意味である。こうした言い方からも聖書がただの文字で記された書物ではなく、神の思いが込められた書物群だということが理解できる。その思いとは聖書を通してイエス・キリストを知ることにある。聖書を読むときに聖霊なる神様が働かれ信仰に至り、信仰がより豊かなものになっていく。

神の言葉を人びとに伝える方法にはいくつかのモードがある。旧約聖書の初期の時代には、神様は直接に人に語られた。預言者が登場してくると、預言者によって語られ、神の言葉であるイエス・キリストの到来によってますます明らかになっていく。そして、キリストが昇天された後には、キリストの霊である聖霊と御言葉により、キリスト

への信仰は確かなものとされる。こうして、御言葉が読まれ、説教される時に聖霊が働かれて説教は神の言葉となる（テサロニケニ2:13）。現代はまさに聖霊と御言葉により神の言葉が伝えられる。礼拝における説教への熱心さを覚えたいのは説教の時にまさに神の言葉が語られるからだと言える。

それと同時に、日々の聖書朗読及びデポジションの大切さを子どもたちに伝えたい。聖書は神の言葉であり、聖書を読むということは神様からのメッセージを受け取るということである。そうであるならば、日々聖書を読むことが大切なのは言うまでもない。また、聖書を読むという行為は、本来はおもしろく、ワクワクするものではないだろうか。そうした御言葉体験を子どもたちに味わってもらうために、個人礼拝の指導やリジョイスの「いのちのパン」を活用したい。

〈聖書の解説〉

序 大まかな流れ

神様の言葉が人びとに救いをもたらす好例として使徒言行録8章26～40節を扱う。この箇所はエチオピアの高官（宦官）の記事として有名なものである。全体の流れとしては、ステファノの殉教（7章54～60節）によって始まったエルサレム教会への迫害は教会に集っていた人びとをバラバラにした。しかし、神はそのような迫害という状況すらも良い方向へと用いてくださり、散った先々で人びとをキリストの救いへと導いた。その代表がエチオピアの高官である。

〈第一の鍵〉 テキストを語る

○第一段階 聖書本文を読む

使徒言行録8章26～40を繰り返し読む。但し、37節は欠落している。

○第二段階 この箇所テーマは何か？

神は、聖霊なる神の導きと御言葉の解き明かしを通してあらゆる人を救いに入れられる。

○第三段階 テーマをどのように展開しているのか

神様はあらゆる人びとを救いへと招いておられる。この聖書箇所においてその具体例としてエチオピアの高官の救いを描く。救いに至らせるために聖霊なる神の導きと御言葉をお用いになった。そして御言葉を具体的に解き明かす助け手としてフィリポを用いられた。

〈第二の鍵〉 神の福音を語る。

○第一段階 この聖書箇所において神様は何をなさっているのか。

神様は、異邦人であるエチオピア人をも救いへと招かれた。このエチオピアの高官はエチオピア人である以上、律法を深く知ることはなかったであろうし、高官という立場である以上、ユダヤ教への改宗は難しいものであった。そのような高官を神は救いへと招いたのである。そして、その為に神の言葉を用いた。神の言葉が語られるときにあらゆる人が救いへと招かれる。

○第二段階 前後の文脈を考える

直近の文脈については序を参照。後の文脈については9章でサウロ（パウロ）の回心について語られる。エチオピアの高官では異邦人の救いが、サウロの回心ではユダヤ人に対する救いが明らかにされ、キリストの救いがあらゆる人びとに対して開かれていく様を明らかにしている。また、使徒10章の9節から33節で語られているペトロがヤッファでみた幻も異邦人に対

する救いが神様の決意であることを示している。

○第三段階 聖書全体を通してこの箇所がどのように展開されているか。

9章32節と33節は旧約聖書のイザヤ書53章の7、8節からの引用である。イザヤ書のこの箇所は「苦難の僕」と呼ばれる箇所である。人びとの罪の故に苦難の道を歩んだ主の僕は最後には死を遂げる。しかし、その死は人びとの罪を担ったことによる代償の死であった。このイザヤ書の預言はイエス・キリストのことであることは初期の教会に集うものにとって明白であった。しかし、高官がこのことを知る由もない。そこで神様はフィリポを用いられた。エチオピアの高官はフィリポの解き明かしによってこの聖書の意味を理解した。まさに、ローマ10章13節が記すように「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のである。こうして、この高官は洗礼の恵みに与った。洗礼は主イエスが行うように命じたものであり（マタイ28:16～20）救いに入れられていること確かな証拠であった。

〈第三の鍵〉 子どもたちの生活や信仰のために

今回の聖書箇所は最初期の様子を記すものであるが、現代においても御言葉と聖霊を通してイエス・キリストが示され、救いに入れられるという神の救いの秩序に変化はない。御言葉は救いの方として現代でも用いられている。エチオピアの高官のように聖書を聞き、御言葉に聞くことの大切さを覚えよう。それと同時に高官のようにただ聖書に聞くだけではなくて、フィリポのように必要としている人に御言葉を語れるように励ましたい。

（この聖書研究はテモテ指導者訓練会の「聖書的説教論」に基づいています） （小宮山裕一）

テキスト 使徒言行録 8章26～40節
子どもと親のカテキズム 問49

〔単元のねらい〕

御言葉が語られる時、確かに聖霊なる神が働かれることを覚えたい。そして聖霊は時に人を用いられる。フィリポは聖霊に用いられたのである。そして、御言葉はキリストを指し示すものとして読むことが大切。このようにしてキリストを見つめる時、私たちの心は喜びに満たされる。

エチオピアの高官とフィリポ

皆さん、おはようございます。

今日は、使徒言行録の8章26～40節から御言葉に学びましょう。

使徒言行録という書物は使徒と呼ばれるキリストの弟子たちがいかにして教会をたてあげていったのかということテーマにしています。前半部分はペトロを中心とするキリストの弟子、いわゆる十二弟子と呼ばれる人びとが登場してきます。この人びとは福音書にも登場してくる人物でした。

使徒言行録は最初期の教会の様子を伝えています。そして、最初の迫害の様子も描かれています。本日朗読しました使徒言行録の8章にはそのあたりの事情も描かれています。詳細は省きますが、ステファノの殉教をきっかけに、最初の迫害が始まりました。これにより、エルサレムの教会はいわば「解散」を余儀なくされました。教会にいると逮捕されるのです。それは、命の危険があったということです。そこで、人びとは各地に逃げました。

この判断は苦渋のものだったと思います。エルサレムの教会には愛着もあったでしょう。しかし、彼らはいったんエルサレムの教会を離れたのです。

しかしながら、神様は、各地にちりちりになったエルサレム教会の人びとを用いて福音を豊かに広めたのです。エルサレム教会の解散は、マイナスの出来事のように思えますが、人の思いを超えた神様のご計画をみる気がします。

フィリポは、まずはサマリアに行きました。ここでも人びとに主イエスの十字架と復活を知らせました。そして、主の天使——これは聖霊なる神様のことだと理解してよいでしょう——この天使に導かれてガザに向かったのです。

このガザで出会ったのがエチオピアの高官でした。エチオピアの位の高い人物です。この人がエルサレムに礼拝に来ていたのです。エチオピアはアフリカの国です。その国の役人がなぜ礼拝に来ていたのかわかりません。ユダヤ教や旧約聖書に興味があったのかもしれません。しかし彼はユダヤ人ではありませんから律法を深く学ぶこともできなかったでしょうし、高官という立場もありますから、ユダヤ教への改宗は難しいものだったでしょう。しかし、彼には求める気持ちがありました。だからこそ、礼拝に参加し、旧約聖書を読んでいたのでしょう。その求める気持ち。その思いに神様は豊かに答えてくださったのです。ですから神様はフィリポをこの高官の元に遣わしたのです。求めなさい、そうすれば与えられる。このように主イエスはお語りになりましたが、まさにこの高官にこそ当てはまる言葉なのではないかと思えます。

この高官はイザヤ書を読んでいたようです。具体的にはイザヤ書の53章の7節と8節です。この箇所には神様の僕が登場します。その僕が、人びとの苦しみのために死なれたのです。そしてこの僕とはイエス様のことです。ですからイザヤ書の53章はイエス様のことを預言している箇所です。

しかし、イエス様のことをこの高官は知りません。そうであるならば、いくらこのところを読んでも意味はわかりません。謎は深まるばかりでしょう。ですから、手引きしてくれる人を求めています。おそらく、この時にこの高官はのどに何かつかかえているような、そんな気持ちだったと思います。わかりそうで、わからない。

そこで、フィリポはこの高官にこのイザヤ書の意味を解説します。35節には「そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた」と書いてあります。このイザヤ書をイエス・キリストというお方を示すものとしてフィリポはこの高官に伝えました。その結果、この高官は洗礼を受けます。このイザヤ書のメッセージをキリストを示すものであると受け取ったのです。まさに、御言葉により、聖霊の働きを通してこの高官は救われたのです。そして彼は喜びにあふれて旅を続けました。

この出来事は、異邦人世界に福音が広まっていく先駆けです。福音とは距離的にも心理的にも遠いエチオピア人に福音が宣伝伝えられたのです。これは世界中の人を神様が救いにいれられるという思いの最初の一步でした。

この聖書箇所をみるとわかりますように、御言葉はただそれだけで正しく理解することはできません。イエス・キリストを伝える書物として聖書を読むことが大切です。そして、聖霊なる神様が、聖書を読むときに働いてくださって、そのことを信じるように心を造り変えてくださいます。神様は、イエス様が天に昇られた後、そのようにして人びとを御救いになるのです。ですから、聖書を

読むときに、聖霊なる神様が働いてくださるので

す。現代に生きる私たちも同じです。神様は、今も私たちに聖書を通して語りかけてくださるので。そして、聖書を読むときに聖霊が働いてくださって、聖書のメッセージがわかるようにしてくださいます。こうして、一人一人は救いに招かれます。そして、救われてからも、聖書を通して私たちは神様のメッセージを受け取ることとなります。

教会において、聖書が鮮やかに語られるのはなんといいっても礼拝においてです。礼拝において、聖書が読まれ牧師が解説をします。牧師はフィリポの働きをしているのです。ですから、礼拝に集まり、聖書のお話を聞くときに、確かに私たちの中に御言葉が蓄えられ、聖霊が働いてくださるので。

それだけではなく、日曜日以外の時も聖書にふれることはとても大切です。毎日、短い時間で良いでしょう。聖書を読む時間を見つけてみてください。リジョイスについている「いのちのパン」を読んでみてください。きっと神様のことがより深くわかります。

そして、みんなもフィリポさんのように、神様を求めている人が周りにいたら、イエス様のことを伝えましょう。聖書がなんといっているかをきちんと学んで、イエス様のことを伝えることはとても大切です。そして、イエス様を伝える時にも聖霊なる神様は確かに一緒にいてくださいます。

(小宮山裕一)

[今週の暗唱聖句] サムエル記上 3章10節

主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。

「サムエルよ。」サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております。」

しと 8:26～28をよみましょう

1. しゅのてんしはフィリポになんと言いましたか？

2. フィリポが行ったところにだれがいましたか？

3. フィリポがであった人はエルサレムでなにをしましたか？

4. フィリポがであった人は馬車ばしやにのってなにをしていましたか？

しと 8:29～35をよみましょう

5. フィリポに「おいかけて、あの馬車ばしやといっしょいっしょに行け」と言ったのはだれですか？

6. かんがんはフィリポになにをたのみましたか？

7. フィリポはかんがんになにをしてあげましたか？

しと 8:36～40をよみましょう

8. みちをすすんで、水みずのあるところときにきた時、かんがんはなんとい言いましたか？

9. フィリポはかんがんになにをさずけましたか？

使徒 8:26～28を読みましょう

1. 主の天使はフィリポに何と言いましたか？
2. フィリポが出かけて行った先にどんな人がいましたか？具体的に説明してください。
3. フィリポが出会った人は何のためにエルサレムに来たのですか？
4. フィリポが出会った人は馬車に乗って何をしていましたか？

使徒 8:29～35を読みましょう

5. フィリポに「追いかけて、あの場所と一緒にいけ」と言ったのはだれですか？
6. 宦官はフィリポに何を頼みましたか？
7. 32節の「彼」とは誰のことだと思いますか？
8. フィリポは宦官に何をしてあげましたか？

使徒 8:36～40を読みましょう

9. 水のある場所にきた時、宦官は何と言いましたか？
10. フィリポは宦官に何をしましたか？
11. 主の霊がフィリポを連れ去った後、宦官はどのような気持ちで旅を続けましたか？
12. フィリポはアゾトに姿を現した後、何をしながらカイサリアまで行きましたか？

テキスト

子どもと親のカテキズム

参考教理問答

ルカによる福音書 24章13～35節

問50

ウ小教理91～93、ウ大教理161～164

ハイデルベルク進行問答 問65～68

問50 恵みを与える方法としての礼典とは何ですか。

答 イエスさまが礼典としてお定めになった洗礼と聖餐（主の晩餐）です。

〈聖書テキストの解説〉

エマオ途上のイエスとの出会いのお話です。

終始一貫して、二人の弟子と共に歩まれるイエスをご自身名乗ることなく、共に歩み始め、ご自身から近づき話しかけ、それも、あたかもその話題を知らないかのように聞き出し、いつのまにやらご自身のほうから、聖書の言葉を説明しているという、おもしろいお話です。結局、村に近づいても、素性を明かさず、先へ先へといかれようとし、それを引き留め、一緒に食卓に着いたとき、弟子たちは、その食卓でのイエスの祈りでしょうか、パンを裂いて渡されたその姿でしょうか？あるいは動作でしょうか？よくわかりませんが、目が開けてイエスとわかります。そうして、同時に道々話していた聖書の言葉が、自分たちが体験し、目撃したイエスとその復活に結びついて、復活したイエスが共に歩み、生きておられるイエスを理解します。

この聖書のお話は、イエスが一貫して自ら素性を明かさないことがおもしろいところですから、子どもたちには、このおもしろいところをいかに楽しく、ドキドキ感を持たせて、伝えるかがポイントです。あまり詳しく探求して、どうしてわからなかったのか？「目を遮られていて」とあるところから見たくても見えなかったのだとか、イエスの復活の姿が違っていただとか、そんな細かな謎解きや解説をし始めると、この箇所の魅力がなくなってしまうかねません。

たしかに、聞く者がなぜイエスとわからなかったのか、などさまざまな関心をもつことは当然ですが、その一つひとつの疑問に答えるように物語は記されており、強いてそれを、「目が遮られ

ていて」とか、「すると、二人の目が開けて」という言葉でルカは伝えているだけです。お話は一貫して、素性を明かさないイエスが、実は私たちの歩みに一緒に歩いておられて、いつも聖書の全体の、特にご自分についてかかっていることを説明しておられること（説き明かしておられること）、また、食事の席を通して、つまり、礼拝の聖餐式を通して、約束と喜びをいつも私たちと共にしておられることを伝えたいのです。同時に、二人の弟子が旅の途上を歩んでいるように、私たちも日常生活、信仰生活の途上にあって、希望を信じてことができなくて、なかなか聖書の御言葉がわからなかったり、その言葉が証しするところの復活のイエスを見ることができなかつたりするものです。礼拝のメッセージや、礼拝での洗礼式、聖餐式といった礼典を見守り、一緒にあずかるとき、それこそ、二人の弟子の目が開けて、それをしてもらったのがイエスだとわかったように、私たちも礼拝、礼典と一緒におられる（現臨される）方がイエスだとわかるのです。

〈子どもカテキズムの解説〉

カテキズム、教理が教えていることとして、まず、私たちの教会では、礼典が二つ、洗礼式と聖餐式だということです。宗教改革以来の伝統的な理解ですが、やはりこれは大切なことです。宗教改革によって、聖書からきちんと見直された礼典は、洗礼と聖餐です。見直される以前、教会はこれをいくつも増やしていきました。その結果、聖書から離れた神秘的な儀式が生まれ、御言葉やイエスによる救いから離れた信仰へと、それていきました。そこで二つ目に、この礼典は「目に見え

る御言葉」と表現されているように、礼典は御言葉に結びつけられ、具体的には「イエス様と一つに結び合わせ」るための礼典であることを説明しています。

さらに、それが「キリストの祝福のすべてを受けていることを表し」と説明され、洗礼と聖餐のたった二つでは足りないのではないか、祝福の一部でしかないのではないかと、といった理解を退けています。洗礼を受けること、水の洗いによる罪の赦しとその救いに結びつけられたこと、聖餐によって、キリストによる救いの祝福を受けて、その食卓にあずかっていること、この洗礼と聖餐によって、キリストの祝福のすべてがきちんと、十分に提供されていることを解説しています。

最後に付け加えますが、この洗礼と聖餐という礼典は、あくまで「聖霊のお働きによって」わたしたちに与えられます。旅の途上、信仰の途上にある私たちがキリストと結び合わされ、そのキリストの祝福のすべてを受けていると信じることができなのは、聖霊なる神がこの礼典を通して「保証し、しるしづける」ことによります。エマオ途上のお話のように、途上にある私たちは、時に「目がさえぎられて」いるような状態ですから、洗礼式や聖餐式にあずかっても、自分のほうからそのことをさとり、提供していただくイエスをパッと見ることができません。聖霊なる神がこうした「目に見える御言葉」である礼典を通して、私たちにキリストと結ばれていること、その祝福のすべてにあずかっていることを信じることができるようになるのです。それはおぼろげながらわかるのではなく、「保証し、しるしづける」という、しっかりしたイエスとの結びつきです。

〈黙想〉

新約聖書では、イエスが洗礼を受けるお話と、復活のイエスの宣教命令（マタイ28:19）にある「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」を洗礼式として思い出します。

また、聖餐式については、最期の晩餐、今回のエマオ途上での弟子との食卓、さらにパウロの手紙の中にある聖餐式制定の御言葉（コリントー11:23～26）が思い出されます。

洗礼式、聖餐式を個別に教えるのではなくて、礼典というものをテーマとして伝えるために、こうした聖書のお話や教えをイエスの祝福全体としてとらえたいと思います。

〈子どもたちに対して〉

聖餐式の式辞にある「聖餐を受ける者は、自分自身を吟味し」という言葉について、信徒の方からよく質問がでます。自分はふさわしくないのではないか？ といった心配です。契約の礼典ですから、吟味が求められます。しかし、大切なのは何を吟味するかです。洗礼、聖餐という礼典で私たちが吟味するのは、自分がその祝福にふさわしいかどうかではなく、その祝福を必要とする自己認識であり、自分がイエスにちゃんと結びついていくかどうかです。

子どもたちには、特にこの点をしっかりと教え、伝えてあげたいと願います。エマオ途上のように、成長の途上にある子どもたちですから、その途上でしっかりとイエスが一緒に歩んでおられることを励みとして伝えたいと願います。また、そのイエスが御言葉を説明し、食卓でお祈りされたように、子どもたちにも礼拝、礼典にイエスが招いていることを伝えたいと願います。（村手 淳）

テキスト ルカによる福音書 24章13～35節
子どもと親のカテキズム 問50

〔単元のねらい〕

単元のねらいは、礼拝にあります。日曜学校での礼拝や、日曜の通常の礼拝に出席していても、礼拝していることの意味がわからなかったり、説教や日曜学校のメッセージがつかめなくて礼拝に来るのが嫌になってしまったりします。礼典だけでなく、礼拝そのものに臨まれるイエスをしっかりと捉えたいと思います。エマオ途上の弟子たちにイエスが伴って歩まれたお話を通して、今もなお、私たちの礼拝・礼典において、私たちに語り、一緒に食卓を囲んでいることを、覚えたいと思います。

「イエスだと分かった次第を話した。」

1. 一緒に歩き始める旅人

イエスが十字架について息をひきとった後、三日たってからのことです。弟子たちはそれぞれに自分の家や村に帰っていきました。エマオという村にすんでいた二人の弟子も家に向かって歩いていました。しかしその足取りは重く、二人とも暗い顔をして、がっくりとうなだれるように歩いていました。彼らがこんなにも重くて暗いのは、イエスが十字架でなくなり葬られてしまったからでした。それでも二人とも何の会話もなかったわけではなく、イエスを葬ったお墓から、その遺体がなくなっていたという話題を、「一体どういうことだろうか？」と思って、お互いに話しながら歩いていたのです。

そんなお話をしているものですから、二人も気づかないうちに、一人の旅人が近づいてきて、いつの間にか一緒に歩き始めていました。二人とも一緒に歩いている旅人のことなど気にもとめず、話題に夢中でした。「あの婦人たちはきっと見間違えたんだよ。お墓の中は暗いし、置いた場所も勘違いしたんじゃないだろうか?」「ひょっとすると先生を訴えてた祭司長や他の人たちが先生の遺体をもちさったんじゃないだろうか? あんなに激しく先生をののしっていたんだから」「じゃああの天使が現れてイエスは生きていたと言ったとかいう話は何だろう」「悲しすぎて、天使がみえたんじゃないか?」「それにしても先

生のご遺体は一体どこにいったんだろうか?」そんな話をしていたのではないのでしょうか? ただでさえ先生が十字架について悲しかったのに、その先生の遺体まで見あたらなくなって弟子たちはどれほど悲しかったのでしょうか?

2. あなただけがご存じなかったのですか

そんな時、一緒に歩いていたもう一人の旅人がこの二人の話題に入ってきました。

「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」

悲しくて、つらくて、先生の遺体の行方のことばかり気にしていた二人は、その話題について聞いてきた一人の旅人に気づいて、足を止めてしまいました。二人はびっくりしたのです。なぜなら、三日前エルサレムの町全体を巻き込んで起こった出来事、イエスの裁判と十字架の刑罰のことを知らない人がいたのですから。イエスのことを悪く言う人もいれば、イエスのことを尊敬している人もいます。いろいろな人がいますが、それでもエルサレムの町で起こったことでしたし、巡礼にきているあらゆる人たちがそのことを見聞きしていましたから、このことを知らない人がいること自体がびっくりです。ほんの三日前に起こったこの一大ニュースを知らないなんて!

「あなただけがご存じなかったのですか!」

3. 望みをかけていました。

目を丸くして顔を向ける弟子たちに、しかし旅

人は何も知らないようでしたから、二人は堰を切ったように話し始めました。

「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするために引き渡して、十字架につけてしまったのです」。

二人の弟子は憤りを思い出していました。そしてこのイエスにどんなに自分たちが望みをかけていたのか、どんなに期待していたのか、聞いてきた旅人に熱く激しく語ったのです。しかし熱く語るほど、深くがっかりしてしまいます。先生は十字架でなくなったのです。もういないのです！なんてひどい事をするんだ！でも自分たちもそれを止める事も反対するできなくて、自分たちの弱さにただただがっかりしてしまいます。

さらに弟子たちは直前に話していた事を旅人に話し出しました。

「仲間の婦人たちが朝早く墓に行きましたが、遺体を見つけずに戻ってきました。そして天使たちが現れ『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです」

不思議な話で弟子たちはとまどっていました。ここまで来るまでに何度もお互いに話したけれどもやっぱりよくわからない！そうそうこの旅人さんはどう思うだろうか？ちょっと聞いてみようとしても思ったかもしれません。

4. 心が鈍い弟子たち

そんな話題に移って、「あなたは どう思う？」なんて感じて弟子たちが旅人を見ましたら、今まで黙って聞いていた旅人が、彼らの顔を見返ししながら、おもむろに話したんです。

「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか！」

弟子たちはこの旅人の言葉にびっくりしました。知らなかったんじゃないのか！やっぱり知っ

ていたのか！物分かりが悪いつて！信じられないつて！俺たちのことか？ご存じないのは、あなただけとっていたけど、あなたじゃあなくて、俺たちがよくわかっていなかったのか！？あなたは知っているんですか！先生の遺体がなかったことも、その後の出来事の意味も知っているんですか？

弟子たちはこの旅人の言葉に驚きつつ、きっとこんなふう思ったんじゃないでしょうか？とにもかくにも一転立場がかわって旅人の話に耳を傾けるようになったんです。そうして旅人が話す聖書の話の話を聞いていると、先生のイエスから聞いていたお話を思い出してきて、そうそう！イエスはそう言っていた！と思えることばかりだったのです。

5. 旅人の正体

みなさんはもう分かっていますね！そうこの旅人の正体は復活されたイエスだったんです。弟子たちは旅人の話を聞きながら、生前のイエスの話をどんどん思い出していったのです。そうして村に着いたとき、先を行こうとされるこの旅人を引き留めて家に招き、食卓を囲んで祈りをされたとき、この人がイエスだとはっきりとわかりました。

イエスはずっと自分の名乗りをあげられませんでした。きっと名乗ってわかってもらうのではなくて、聖書の言葉どおりに信じてもらうこと、礼拝の中でおこなわれる聖餐式の食卓で今も一緒におられることを弟子にはきちんとわかってほしかったのではないのでしょうか？

私たちもこの弟子たちと同じように、礼拝に来ても、イエスが見えるわけではありませんし、時には、あまりにつらい事などで信じられなかったりします。しかし、イエスは聖書の言葉や聖餐式の食卓をとおして私たちに語りかけ、一緒にいてくださるのです。一緒に歩まれる旅人として、私たちに臨まれます。みんなも礼拝にくる度ごとに思い出してほしいと思います。（村手 淳）

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙一 11章24節

感謝の祈りをささげてそれを裂き、

「これは、あなたがたのためのわたしの体である。

わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。

ルカ 24:13～24をよみましょう

1. ふたりのでは、どこからどこへむかってあるいていましたか？
2. ふたりのでしがはなしあっている時、ちかづいてきて、いっしょにあるきはじめてのはだれですか？
3. ふたりのでは、いっしょにあるきはじめて人がだれだかわかっていましたか？
4. ふたりのでは、あるきながらなにについてはなしてありましたか？

ルカ 24:25～27をよみましょう

5. イエスさまはふたりのでしに、どんなことをせつめいされましたか？

ルカ 24:28～24をよみましょう

6. 村へちかづいた時、ふたりのでしとイエスさまはどうしましたか？
7. イエスさまが、パンをとり、さんびのいのりをとなえ、パンをさいて、ふたりのでしにおわたしになった時、ふたりのでしになにがおこりましたか？
8. ふたりのでしはすぐにエルサレムにもどって、あつまっていた11人とそのなかまになにをはなしましたか？

ルカ 24:13～27を読みましょう

1. どこでの出来事ですか？

2. 二人の弟子にイエス様が近づいて一緒に歩き始められましたが、二人にはその人がイエス様だと分からなかったのはなぜですか？

3. 二人の弟子が、十字架にかけられる前のイエス様に望みをかけていたことは何ですか？

4. イエス様は二人の弟子に何と言われましたか？

ルカ 24:28～35を読みましょう

5. 村へ近づいた時、二人の弟子とイエス様はどうしましたか？

6. イエス様が、パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、二人の弟子にお渡しになった時、ふたりにどんなことが起こりましたか？

7. 二人の弟子はその後どうしましたか？

テキスト

マタイによる福音書 28章19節

子どもと親のカテキズム

問51

参考教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問94

ハイデルベルク信仰問答 問69

問51 洗礼とは何ですか。

答 父・子・聖霊なる神さまの御名によって行われる水の洗いです。洗礼は、イエスさまと結び合わされ、罪赦され、永遠の命が与えられ、神さまの子どもとされたことを示す礼典です。

〈聖書テキストの解説〉

マタイによる福音書28章19節は、洗礼の目的と方式を語っている。まずこの主イエスの御言葉は、「すべての民をわたしの弟子にきなさい」という言葉によって、洗礼を新しいグループに所属するための入会の節目と捉えている。その新しいグループへの所属とは言うまでもなく、イエス・キリストを介して父なる神に結び付くことであり、その所属変更を可能にさせる洗礼は、「父と子と聖霊の名による」執行によって有効化されるとしている。そしてこの、三位一体の神の名に基づく聖霊による、すべての民の弟子化こそが、マタイ福音書の結びに置かれている、復活の主からの弟子たちに対する至上命令であり、弟子たちがその使命に生きる時、同時に主イエス・キリストがいつも共にいて働き支えてくださることが確約されている。

ローマの信徒への手紙6章3,4節には、洗礼の内容が語られている。そこでパウロは、キリスト者たちがすでに罪に対して死んだということを分からせるために、キリスト者たちが洗礼を受けている者たちであるという事実を引き合いに出して語る。そしてその洗礼の内容とは、一言で言えば、3節にあるように「キリストに結ばれ、その死にあずかること」である。この「結ばれる」また「あずかる」と訳されている言葉は、聖書原文では全く同じ言葉の繰り返しであり、それは英語で言えば「Baptized into」という言葉の繰り返しである。つまり「キリスト・イエスの中に入って行く」ということが、洗礼の内容である。それはキリスト

と私たちが、精神的・肉体的・経験的に一体化することであり、より具体的にはキリストが経験された死と復活が、そのまま私たちの経験となるということであり、キリスト者とは、キリストと共に罪に死に、また新しい復活の命に生かされている者なのである。その事実の証しがキリスト者があずかる洗礼である。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

子どもと親のカテキズム問51の答えは、まず洗礼が、父・子・聖霊なる神様の御名によって行われることで成立することを明言している。また「水の洗いです」という言葉によって、洗礼が持つ「罪からの洗い清め」という要素が、踏まえられている。ギリシャ語の「バプティゾー」という言葉自体は、「浸す」という言葉であるが、それはキリストの存在の中に人を浸して、以前の罪ある状態から新しく生まれさせるものであり、また聖書自身も「洗礼を受けて罪を洗い清めなさい」（使徒言行録22:16）と語っていることから、教会は洗礼を、水を用いた罪の洗い清めと、人間の全人的な刷新を表す礼典として守ってきた。

また、問51の答えの後半部分は、洗礼が何をもたらすのかを列挙する。そこで洗礼がもたらすもののリストの先頭に来るのが、「イエス様と結び合わされる」と語られている、ローマ書6章にも語られているキリストとの結合である。それが洗礼の内実の中心であり、このキリストとの結合から、以下の、罪の赦し、永遠の命の付与、神の子どもとされるという、洗礼がもたらすさまざま

な恵みがもたらされる。列挙されているこれらの恵みの数々は、イエス・キリストがなされた救いの御業の追体験でもある。洗礼は、ただ胸にバッチを付けるような、外側だけの变化や付加を意味しない。洗礼によって表されるキリストとの一体化は、それにあずかる者の内も外も含めた全体を新しくし、受洗者を父なる神の大きな愛顧を受ける神の御子の身分に等しくさせることで、受洗者の神様との関係性をも新しくする。そのような罪の洗いと新生の証しが洗礼である。

〈黙想〉

洗礼について語ることは、キリスト者が何者であるのかという、その根本的なアイデンティティーを語ることでもある。我々が何者で、何を受け、何によって立ち、何を希望に据え、何を目的に据えて生きるべきか、あるいは教会とは何者の集まりで、そこには何があるのかという、非常に根本的な問題のすべてに通じる核心が、教会で行われる洗礼というひとつの事柄に凝縮されていると言っても、決して言い過ぎではない。

マタイによる福音書28章の文脈で洗礼を捉える時、それは、この世にありながらも、神によって立てられた、神の国に属する民として新生するという、洗礼のラディカルな側面が見えてくる。そこでは洗礼は、この世に属しながら、神の国に属する者となり、そういう者として生きるということの、公の表明である。そのような違いを生み出す洗礼は、受洗者たちによってさらに多くの未受洗者たちに伝えられ広められていくべき、宣教活動の一部分となっている。

またローマの信徒への手紙6章の文脈でそれを捉える時には、洗礼の内側に溢れるキリストとの瑞々しい結合が前面に出て来る。そこでは洗礼は、

無味乾燥な儀式では全くなく、それは神の懐とキリストの存在の只中に、自らが浸され、注ぎ込まれていくような事態を意味する。そのような魅力的で、恵みに溢れたキリストの一体化に、すべての人びとが、キリストご自身によって、教会を通じて招かれている。その様な生命的な事態としての洗礼の礼典の恵みを是非とも聴衆に伝え、キリストの恵みに満たされ潤される経験を、共に集う礼拝者たちと共有したい。

〈子どもたちに対して〉

礼拝には、すでに幼児洗礼を受けた子どもたちと、未受洗の子どもたちが集うだろう。洗礼の礼典は、所作としては大変シンプルな礼典であるが、その内容が奥深い。水、洗い、新しくなること、こういったシンプルな事柄から語り出し、聞き手となる子どもたちの年齢や状況に合わせて、その子どもたちが受け取ることのできるまで、洗礼の礼典が有する意義を、極力深みまで伝え、共有することができれば望ましい。

さらに、洗礼の深い意義と大きな恵みが分かったなら、それによるキリストとの結合という、洗礼が持つ瑞々しい祝福に、礼拝に集っているすべての子どもたちが招かれており、そこに子どもたちを招くことが、神様の切なる願いであることも伝えて、この礼典に子どもたちを招き、聖霊を受けていることの感謝、あるいは、その礼典にあずかる者とされたいという飢え渇きをも子どもたちの心に呼び起こしたい。

教会にはさまざまな良いものがあるが、教会にしかない最も良いもののひとつが洗礼であることを伝え、子どもたちの目が、洗礼の礼典の中にある大きな祝福に大きく新しく開かれていくことができるならば幸いである。 (吉岡契典)

テキスト マタイによる福音書 28章19節
ローマの信徒への手紙 6章4節
子どもと親のカテキズム 問51

〔単元のねらい〕

子どもたちに、洗礼の持つ意味、そこにある祝福と、その素晴らしさを伝えたい。所作としては単純な洗礼が、測りがたく大きな恵みを宿す礼典であることを子どもたちに伝え、洗礼を既に受けていることへの新たな感謝と、また未受洗の子どもたちには、洗礼を受けたいという願いをもってもらいたい。

洗礼の祝福への招き

今朝は洗礼についてお話ししたいと思います。洗礼とは何か、皆さんご存知ですか。洗礼には「洗う」という字が使われていますが、洗礼は何の汚れを落とすための洗いなのでしょうか？

皆さんは、食器洗いのお手伝いをしますか？ 食べ終わった後の食器を、そのまま食器棚に入れることはしませんね。台所の流しにまず持って行って、そこで水で流して洗います。油汚れを取ったり、ソースやご飯粒が食器からちゃんと取れて綺麗になるまで、スポンジで洗って、水で流します。そしてそのあと、食器を布で綺麗に拭けば、食器はピカピカになって、食器棚の中にしまうことができます。

洗礼式でも、実はそれと同じことをします。洗礼で使う水は、洗って汚れを取るための水です。洗礼で取る汚れとは何でしょうか？ 使徒言行録 22章16節には、「洗礼を受けて罪を洗い清めなさい」という言葉があります。罪の汚れとは、どんな汚れでしょうか？

私は、言葉や行動で家族や友達を傷つけてしまうことがあります。自分では正しい言葉を言い、間違った行動はしていないと思ってしまいますが、あとになってから、あの時のあの言葉が嫌だったと言われたり、相手を怒らせてしまったり、そういうことなどは何も言わずに、私の前からいなくなってしまった人もいます。そうになってしまうと、もう取り返しがつきませんね。一度起こってしまったことは取り戻せませんし、私も自分で自

分を責めて、心が苦しくなってしまいます。罪とは、心の中の汚れであり、病気になるような部分です。

けれどもその心に取りついた汚れを洗い流すのが洗礼です。自分では、まだ心の中に汚れが残っているのが分かりますし、病気になるような部分がまだ心の中にはあるなど思うのですが、洗礼は、神様がこの心を洗ってくださることですので、そこでは自分ではなく神様が、「あなたの心は綺麗になった。あなたの罪は赦された」と言ってくださるのです。

その証拠に、洗礼は、子どもと親のカテキズムや、マタイによる福音書の言葉にもありますように、「父と子と聖霊の名によって」授けられます。教会の牧師先生の名前によってではなく、神様の名前によって授けられるということは、神様が責任を持ってくださるということです。神様が責任を持って、私の罪を赦して、私の心を洗い清めてくださる。不思議な洗い方ですし、心を洗うことは簡単なことではないですけれども、神様にならそれはできます。

そして洗礼を受けた人は、洗ったあとに綺麗になった食器が、台所から食器棚に移されるように、新しい場所に移されます。どこに移されると思いますか？ イエス様の中に移されるのです。イエス様はどこにいらっしゃる方ですか？ イエス様は天国にもおられますし、どこにでもおられる方ですけれども、あえてイエス様はここにおられま

すと、その場所を言うならば、イエス様は、この教会におられます。聖書は、教会はイエス様の体だと語っているからです。

洗礼を受けて、教会の中に移され、教会のメンバーになって、イエス様の体の一部になって、イエス様と結び付く時には、食器が食器棚の中で、しっかりと扉の中で、割れて下に落ちることなく、ほこりをかぶることなく守られているように、私たちも、イエス様にしっかりと守っていただけるようになります。

子どもと親のカテキズムは、そのことを、こういう言葉で説明しています。問51の答の後半です「洗礼は、イエスさまと結び合わされ、罪赦され、永遠の命が与えられ、神さまの子どもとされたことを示す礼典です」。

イエス様は洗礼を受けた人を大切に守ってくださいますが、その守り方とは、まず、罪を赦してくださいることによって守ってくださいます。それによって私たちは、取り返しのない罪とその罰に心を悩ませ続けたり、また罪を犯してしまうかもしれないと思って怯えなくてもいい。イエス様がその体もろとも、私たちの罪を十字架に架けてくださったので、その赦しをいただく時、神様から罪を責められることはありません。

そして永遠の命が与えられます。永遠の命とは、尽き果てて死で終わってしまうことのない、この今の命を超えた命です。洗礼を受ける人は、死のあとにも、永遠に天国でイエス様と一緒に生きることができます。

そして洗礼によって、私たちは神様の子どもにされます。お父さんやお母さんは、自分の子どものことは特別によく可愛がってくれますし、いつも食べ物や服やプレゼントなども買ってくれますし、そうやって自分のことのように大事にしてくれます。神様は、人間のお父さんやお母さんがし

てくださるよりももっと深く、揺るがない愛で、神様の子どもとされた人たちを愛し守ってくださいます。洗礼を受けることによって、神様とのそういう親しい関係に、私たちは移されることができます。

ローマの信徒への手紙6章4節には、「わたしたちも新しい命に生きる」という言葉がありますけれども、洗礼を受けるということは、そのように、神様によって新しい命に生まれ変わるような大きなことです。実際には、ちょんちょんと水を頭に付けられるという儀式ですけれども、それによって洗礼を受けた人は、イエス様ととても親しく結び付き、父なる神様の大事な子どもとして受け入れられて、心の罪も赦されて、まるで新しく生まれ変わるようにして、心と体の全体が新しく綺麗にされます。そういう大きなことが、洗礼によって起こります。

教会には礼拝があったり、仲の良い友達がいたり、色々なものがありますけれども、教会にしかない、最も大切なもののひとつが、この洗礼です。今教会に集まっている人のほとんどは、この洗礼を受けて、父なる神様の大切な子どもとして、愛され守られ、だからこそ喜んで歩んでいる人たちです。

もう小さい頃に洗礼を受けたお友達もいるかもしれませんが。自分がそういう、神様による素晴らしい洗いを受けて、綺麗で大切な自分になっているということを、ぜひ知ってほしいですし、そのことを一緒に神様に感謝したいです。

それから、まだ洗礼を受けていないお友達もいると思います。そのお友達にはぜひこの洗礼を受けてほしいと思います。神様も、あなたが洗礼を受けて、神様、イエス様ともっと親しくなることを心から願っておられます。 (吉岡契典)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 6章4節

わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。

それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、

わたしたちも新しい命に生きるためなのです。

マタイ 28:19をよみましょう

1. イエスさまはだれをわたしのでしにしなさいといわれましたか？

2. イエスさまはだれのな名によってせんれい洗礼（バプテマス）をさずけるよういわれましたか？

ローマ 6:3~4をよみましょう

3. 「わたしたち」は、だれにむすばれるために、せんれい洗礼（バプテマス）をうけたのですか？

4. 「わたしたち」は、だれのし死にあずかるために、せんれい洗礼（バプテマス）をうけたのですか？

5. 「わたしたち」はせんれい洗礼（バプテマス）によってどのようないいのちに生かされるのですか？

マタイ 28:19を読みましょう

1. イエスさまは誰を私の弟子にしなさいといわれましたか？

2. イエスさまはだれの名によってバプテスマ洗礼をさずけるよういわれましたか？

ローマ 6:3~4を読みましょう

3. 「わたしたち」は何のために洗礼をうけたのですか？

4. 「わたしたち」は洗礼によってどのような命に生かされるのですか？

2016年7～9月カリキュラム（第62号）

— 『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
7月3日	幼児洗礼の恵み	問52	
		創世記17:1～14	創世記17:9
神さまは幼い者をも救いの約束に加えてくださる			
7月10日	聖餐の恵み	問53	
		コリントー11:23～26	コリントー10:16
キリストの十字架の恵みを忘れず、その恵みに生きよう			
7月17日	信仰告白を目指して	問54	ウ小97
		コリントー11:23～29	コリント二13:5
信仰を喜び教会を楽しみとする信仰生活へ			
7月24日	恵みの方法としての祈り	問55	子ども34～39, 47～49, 53, ウ小29, 90, 98
		ルカ11:5～13	ルカ11:13
神様は頼る者に聖霊を与えて下さる			
7月31日	感謝して歩む	問56	ウ小39、ハイデ86
		ルカ17:11～19	詩107:15
与えられた救いの恵みと感謝をもって応えることの大切さ			
8月7日	感謝の生活の規準	問57	ウ小2, 3、ハイデ86～91
		マタイ7:24～29	ヤコブ1:22
聖書に従い感謝の生活を送ることは堅い土台を据える確かな生き方			
8月14日	平和主日	問91	
		マタイ5:9	マタイ5:9
力ではなく神様を信じて神様による平和を立て上げる			
8月21日	十戒の心・ 神と人を愛する	問58	ウ小39～41、ハイデ92, 93
		申命記4:9～14	申命記4:13
神様の愛の表れである十戒に生きる者となるう			
8月28日	十戒の心・ 神と人を愛する	問59	羊飼29、ウ小40, 41
		マタイ22:34～40	ヨハネー4:11
神の愛を受け神と人を愛して歩む			
9月4日	十戒の心・ 父の愛の戒め	問60, 61	ウ小43, 44、ハイデ94
		使徒5:27～32	出エジプト20:2
十戒に示される神の愛に堅く立つ			
9月11日	第一戒 神のみを神とする	問62, 63	ウ小45～48、ウ大103～106、ハイデ95
		申命記6:1～15	申命記6:4, 5
ただ一人の神様が私たちを愛して下さっていることを信頼する			
9月18日	第二戒 偶像礼拝とは何か	問64, 65	
		ルカ20:45～31:6	ルカ21:3
目に見えない神様だからこそ私たちの心を見られる			
9月25日	第三戒 神の御名	問66, 67	ウ小53～56、ウ大111～114
		使徒3:1～10	使徒3:6
主の名を喜んで受け入れる者は主の力を得る			

2016年度 年間カリキュラム (第61～64号)

— 『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第2年—
(2016年4月～2017年3月)

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2016年 第61号	4月3日		再臨・天国を目指す歩み	問39
	4月10日		死後の祝福	問40
	4月17日		体の復活	問41
	4月24日		教会と共に歩む道・キリストの体	問42
	5月1日		母なる教会による命の養い	問43
	5月8日		教会の使命	問44
	5月15日	聖霊降臨祭		
	5月22日		主の日の祝福	問45
	5月29日		礼拝式の祝福	問46
	6月5日		恵みの方法	問47・48
	6月12日		みことばの恵み	問49
	6月19日		礼典の恵み	問50
	6月26日		洗礼の恵み	問51
第62号	7月3日		幼児洗礼の恵み	問52
	7月10日		聖餐の恵み	問53
	7月17日		信仰告白を目指して	問54
	7月24日		恵みの方法としての祈り	問55
	7月31日		感謝して歩む	問56
	8月7日		感謝の生活の規準	問57
	8月14日	平和主日		(問91)
	8月21日		感謝の道しるべ・十戒	問58
	8月28日		十戒の心・神と人を愛する	問59
	9月4日		十戒の心・父の愛の戒め	問60・61
	9月11日		第一戒 神のみを神とする	問62・63
	9月18日		第二戒 偶像礼拝とは何か	問64・65
9月25日		第三戒 神の御名	問66・67	

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第63号	10月2日		第四戒 主の日の安息	問68・69
	10月9日		第五戒 父母を敬う	問70・71
	10月16日		第六戒 殺すな	問72・73
	10月23日		第七戒 姦淫するな	問74・75
	10月30日		第八戒 盗むな	問76・77
	11月6日		第九戒 偽証するな	問78・79
	11月13日		第十戒 むさぼるな	問80・81
	11月20日		憐れみを求めさせる戒め	問82
	11月27日		神の愛の戒めを喜ぶ	問83
	12月4日	待降節	祈りの手本、主の祈り。 祈りとは何か	問84
	12月11日	待降節		
	12月18日	待降節		
	12月25日	降誕祭		
2017年	1月1日	元旦	神の子らしい祈り	問85
第64号	1月8日		祈りに生きる道・神との会話	問86
	1月15日		祈りに生きる道・主の御名による祈り	問87
	1月22日		祈りに生きる道・祈りの内容	問88
	1月29日		主の祈り・わたしたちの父よ	問89
	2月5日		主の祈り・御名を崇める祈り	問90
	2月12日		主の祈り・御国を求める祈り	問91
	2月19日		主の祈り・御心を求める祈り	問92
	2月26日		主の祈り・ゆだねる祈り	問93
	3月5日		主の祈り・赦され、赦す祈り	問94
	3月12日		主の祈り・神の子の勝利の祈り	問95
	3月19日		主の祈り・確信の祈り	問96
	3月26日		主の祈り・神の真実による祈り	問97

救済史に基づく二年サイクル

	月 日	教会暦・行事	主題	聖書箇所
2016年 第61号	4月3日		復活を疑うトマス	ヨハネ20:24～29
	4月10日		ペトロを励ます復活のキリスト	ヨハネ21:1～19
	4月17日		大宣教命令	マタイ28:16～20
	4月24日		着座・主が王となられた	詩編110
	5月1日		油が注がれた方が成し遂げられた	イザヤ61:1～4
	5月8日		霊が臨むとき	エゼキエル37:1～14
	5月15日	聖霊降臨祭		
	5月22日		イサクとリベカの結婚	創世記24:1～67
	5月29日		エサウとヤコブ	創世記25:27～34、27:1～40
	6月5日		ヤコブの夢	創世記27:41～28:22
	6月12日		ヤコブの結婚	創世記29:1～30
	6月19日		エサウとの再会	創世記32:4～33:20
	6月26日		ヨセフの夢	創世記37:1～11
第62号	7月3日		エジプトに売られるヨセフ	創世記37:12～36
	7月10日		ヨセフとポティファルの妻	創世記39:1～23
	7月17日		夢を解くヨセフ	創世記40:1～41:46
	7月24日		イスラエル、エジプトへ	創世記41:47～46:27
	7月31日		エジプトでの苦難	出エジプト1:1～21
	8月7日		モーセの召命	出エジプト3:1～4:17
	8月14日	平和主日		
	8月21日		十の災い	出エジプト5:1～12:42
	8月28日		葦の海を渡る	出エジプト14:1～31
	9月4日		十戒の心・父の愛の戒め	問60・61
	9月11日		第一戒 神のみを神とする	問62・63
	9月18日		第二戒 偶像礼拝とは何か	問64・65
	9月25日		第三戒 神の御名	問66・67

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	聖書箇所
第63号	10月2日		第四戒 主の日の安息	問68・69
	10月9日		第五戒 父母を敬う	問70・71
	10月16日		第六戒 殺すな	問72・73
	10月23日		第七戒 姦淫するな	問74・75
	10月30日		第八戒 盗むな	問76・77
	11月6日		第九戒 偽証するな	問78・79
	11月13日		第十戒 むさぼるな	問80・81
	11月20日		シナイ契約の締結	出エジプト24:1～11
	11月27日		金の子牛	出エジプト32:1～34:28
	12月4日	待降節	言は私たちの間に宿られた	ヨハネ1:1～14
	12月11日	待降節	キリストの系図・神が共にある歴史	マタイ1:1～17
	12月18日	待降節	インマヌエル	マタイ1:18～25
	12月25日	降誕祭	異邦の学者による礼拝	マタイ2:1～12
2016年 第64号	1月1日	元旦	幕屋建設	出エジプト35:4～40:38
	1月8日		地の塩・世の光	マタイ5:13～16
	1月15日		敵を愛しなさい	マタイ5:43～48
	1月22日		隠れたことを父が見てくださる	マタイ6:1～6
	1月29日		主の祈り	マタイ6:9～15
	2月5日		思い悩むな	マタイ6:25～34
	2月12日		聞いた言葉を行う	マタイ7:24～29
	2月19日		嵐を静めるキリスト	マタイ8:23～27
	2月26日		悪霊を追い出す	マタイ8:28～34
	3月5日		ペトロの信仰告白	マタイ16:13～20
	3月12日		迷い出た羊のたとえ	マタイ18:10～14
	3月19日		子どもたちを祝福する	マタイ19:13～15
	3月26日		エルサレム入城	マタイ21:1～11

子どもと親のカテキズム

神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

『子どもと親のカテキズム』の目指すもの ～「あとがき」より～

このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子ども伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格 **400**円 (税込)

書店での販売価格は540円 (税込) ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円 (税込) です。

申込先 E-mail naoto@yasudafam.com 安田直人

振込先 00130-7-485942 安田直人

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 FAX03-5250-5107
HPをご利用ください。 <http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/> 【呈・図書目録】

〈執筆・編集者よりひとこと〉

●パウロが言うようにイスラエルの信仰の「奥義」とはキリストですが、その信仰が旧約聖書の歴史の中でどのように形作られてきたのか、「イスラエルの歴史と信仰」と題して、教会学校教師の皆さんのためにわかりやすくだり直してみたいと思います。よろしくお付き合いください。

(赤石純也)

●久しぶりの教案原稿奉仕に、恥ずかしながら大変苦悩しました。なかなか思うように対応できないものです。あらためて、教案のために、ご奉仕される担当者の方々、その働きに尊敬と敬意を覚えます。ただただ、その働きが祝福され、現場で用いられ、また礼拝に集う子どもたちにメッセージが届きますように祈るばかりです。子どもたちの生きている世界は混沌と戦いの連続のように思います。聖書のメッセージを通して、わずかな光でも届いてくれれば、きっと主が助けてくれるだろうと信じます。祈りつつ。(村手 淳)

〈あとがき〉

●第61号をお届けします。諸般の事情により、発行日にお届けできませんでしたこと、深くお詫び申し上げます。

●教会学校訪問は神奈川地区バイブルキャンプの歴史をまとめていただきました。関口博一兄始め、関係の皆様へ感謝します。

●分級展開例の用い方について執筆いただきました。展開例の利用のためにお役立て下さい。

●学びや奉仕の備えのための新連載が始まりました。日本のキリスト教史について名古屋教会の木

下裕也先生、イスラエルの歴史について伊丹教会の赤石純也先生によるものです。ぜひお読み下さい。

●KGK(キリスト者学生会)の副総主事、大嶋重徳先生の「若者たちとともに」という連載を始めました。先生は神戸改革派神学校の卒業生で、現在教派を越えて広く青年伝道の働きに用いられておられます。今の若者と向き合う現場の働きからの提言をお読み下さい。

●巻末に並行して用いることができる「救済史カリキュラム」を付けてあります。それぞれの教会学校の状況に合わせて、参考にしていただければ幸いです。

●今号も、IBUKIの中村未生兄、高橋乃亜兄が表紙デザインのためにご奉仕くださいました。感謝いたします。

●教案誌編集部は、日本キリスト改革派教会の教育機関誌『リジョイス』の「いのちのパン」を提供させていただいています。こちらについてもご意見をお寄せ下さい。

●『教会学校教案誌』をぜひご購読下さい。バックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています。(一部品切はご容赦下さい)

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡下さい。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail:yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

◆教会学校自由募金のお願い

目標金額 50万円/年
送金先 郵便振替 伊藤治郎
00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき

島野美佳子 (坂戸教会新潟伝道所信徒)

巻頭説教

山中恵一 (神港教会協力牧師)

分級展開例の用い方

愛智 愛 (新座志木教会信徒)

日曜学校・教会学校訪問

関口博一 (綱島教会信徒)

絵本に心を耕されて

望月鈴子 (浜松伝道所信徒)

教会・国家・平和・人権

木下裕也 (名古屋教会牧師)

イスラエルの歴史と信仰

赤石純也 (伊丹教会牧師)

アメリカの教育事情

望月 信 (休職教師・カルヴィン神学校)

若者たちとともに

大嶋重徳 (キリスト者学生会副総主事)

御言葉は命の水

保田広輝 (長丘教会信徒・神学校聴講生)

教会学校教師のための神学講座

吉田 隆 (神戸改革派神学校校長)

聖書黙想・説教展開例

木下裕也 (名古屋教会牧師)

長田詠喜 (新所沢伝道所宣教教師)

大西良嗣 (休職教師)

相馬伸郎 (名古屋岩の上教会牧師)

赤石めぐみ (伊丹教会信徒)

袴田清子 (北神戸キリスト伝道所信徒)

芦田高之 (新浦安教会牧師)

柏木貴志 (岡山教会牧師)

牧野信成 (西神教会牧師)

安田直人 (田無教会牧師)

小宮山裕一 (ひたちなか教会牧師)

村手 淳 (山梨栄光教会牧師)

吉岡契典 (板宿教会牧師)

分級展開例

堀 基枝 (南浦和教会信徒)

安田真弓 (田無教会信徒)

イラスト作画

表紙 中村未生 (春日井教会信徒・IBUKI)

高橋乃亜 (湘南恩寵教会信徒・IBUKI)

本文 岡野美佳 (青葉台キリスト教会信徒)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)

名古屋岩の上教会牧師・大会教育委員会

安田直人

田無教会牧師・大会教育委員会

小宮山裕一

ひたちなか教会牧師・大会教育委員会

長田詠喜

新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会

木下裕也

名古屋教会牧師

辻 幸宏

大垣伝道所協力牧師

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会『教会学校教案誌』

2016年4・5・6月号 (季刊)

第61号

2016年3月1日発行

発行

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

発行所

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎

〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

郵便振替口座

00890-2-148183 「伊藤治郎」

編集・印刷

株式会社あるむ

頒価

900円 (本体価格)

Reformed Church in Japan
Board of Education

